

目 次

卷頭言

あっと云う間の7年間

二神 浩三 2

シリーズ

二神氏ゆかりの地を訪ねて (No. 9)

編集部 4

古文書の解説 第8回

二神 英臣 17

系譜・家紋紹介 (小川二神氏) (No. 9)

二神 英臣 32

二神氏と苗字の歴史 (第8回)

編集部 40

特集「二神会7年の航跡」

1 7年間のあゆみ

編集部 44

2 ①「豊後岡藩士福田家に二神家系が」

竹野孝一郎 78

②「由利千軒の謎は解明されるか」

竹田 覚 80

特別寄稿

① 二神島と日本常民文化研究所

網野 善彦 83

② 弾コギ異聞

大国 英子 90

③ 二神島に現存する民家と文献資料とを総合すれば

津田 良樹 97

研究・調査報告

小才角二神家の古文書より

二神 政幸 100

役員のつぶやき

二神島の人々と二神氏

二神 浩三 105

健康雑感

二神 俊一 108

テレビ討論「日本のこれから」を見て思うこと

二神 久蔵 110

初さんの自慢の友「富さん」

二神 亮郎 118

お先気になる港山二神氏

二神 康郎 121

二神島を想う

二神 重成 123

まもなく年金満額

二神 重則 126

いろいろ変わった?

豊田 渉 128

方言にみる小才角二神氏のことなど

二神 栄三 131

中部・関西支部7年の航跡

二神 宏介 134

「ふたがみ」にまつわる話

二神島の昔話「お市さんあわれ」

編集部 138

二神島の近況

豊田 渉 140

二神系譜研究会 会則 142

会員名簿 144

役員名簿 148

入会申込書 149

編集後記 150

卷頭言

あっと云う間の7年間

会長 二神 浩三

二神島で「二神島シンポジウム」が開かれ、兄や俊一さんとともに参加したのは1995年8月のことでした。その時、網野善彦先生の「二神島の調査より見えてきたもの」という基調講演があり、我らのご先祖が長門の国の豊田氏で、年代は明確ではないが、鎌倉末期か南北朝初期の時代に、豊田の一派が二神島へ移住し、庄屋として住み着き二神姓を名乗ったのが二神氏の出自らしいことが分かった。小さな島に住んだがために、古文書や過去帳、墓碑などが、広く散逸するのを防ぎ、また、墓石もそのまま遺されていたこと等が幸いして、島に残って二神氏を護って来た本島二神氏の系譜は現代まで見事に繋がりを見せている。

網野先生を中心として、多くの歴史家の皆様方のご支持を得て、日本の中世史、近世史に二神氏の名をはっきりと定着させることができたように思う。また、この会報「海の民 ふたがみ」も歴史家の目に留まり、参考文献として利用される迄に至っている。あっと云う間の7年間ではありましたが、これだけの結果を遺せた事を誇りに思い、会員の皆様とその喜びを共に分かち、今後の会の励みにしたいと念願しています。

1995年10月には、豊田の一ノ瀬で行なわれた豊田種長追善供養祭に参加し、一ノ瀬地区の方々の温かい歓迎ぶりに、驚き、感動しました。その時点で、豊田氏保存会に対応する二神氏の代表には、広島に在住の二神種弘氏がなさり、献身的な努力を払って来られた。種弘氏は、



筆 者

中島のご出身で吉木二神氏に属し、現在は、広島工業大学工学部教授を勤められている。供養祭の懇親会の席上で、唐突に種弘氏から代表の交替が述べられ、何の前触れもなく次期代表に据えられてしまった。ただ、この集いが、和気藹々の集まりで、二神氏と云う同じ姓を共有する不思議な会であるように思え、そのまますんなりと引き受けてしまった次第である。その後、二神会と云う組織造りをやってほしいとか、それに類する話があちこちから聞こえてきていました。

そうした時の流れの中で、松山市や北条市で、独自に二神氏のルーツを追っていた人達がいた。二神重則氏、二神英臣氏である。お互い何の知り合いでもなかったが、豊田種長追善供養祭に集まった二神氏のいることを知り、二神種弘氏、舜子さん、興三郎氏、慶子さん、重則氏、英臣氏と浩三の7名が舜子さんのお宅に集まり、二神氏の系譜を調査するための準備会を立ち上げる相談をしたのが1999年のことでした。「二神さん集まれ！」と云う冊子を全国の二神さんに宛てて発送し、準備会を立ち上げました。そうして、松山市の国際ホテルで発会式を行い、数十名の二神氏が全国から集まり、およそ1年前には想像もしなかった光景が展開され、一気に、二神さんと云う一つの輪が出来たようで和やかな会合であったことが今も思い出されます。

2000年には、長ったらしい「二神氏の系譜を調査するための準備会」と云う名をスリムにし、「二神系譜研究会」と改名して、よりすっきりとした会の組織に変更し、自由で明るい若やいだ会を目指して、海民スピリッツをロゴマークとして出発した。あれから、もう7年である。長いようでもあるが、今ここに振り返ってみると、あっと云う間の7年間であったよに思う。この会が、ますます発展し、二神島を盛り上げ、西瀬戸を赤々と照らす歴史の宝庫になることを祈って止まない。

二神氏ゆかりの地を訪ねて (No.9)

編 集 部

愛媛県松山市小川

1. 小川村の歴史

現在の松山市小川は、一昨年末まで北条市小川でしたが、かつて明治22年12月までは風早郡小川村と呼ばれ役場が置かれた時代もありました。天保9年（1838）の調査では48軒の家に人口221人（男108、女113）牛25頭、馬27頭がいて、近隣の磯河内、和田、河原等と比べてみても小川の村勢が大きいことが判ります。

この小川にいつ頃から人が住み着いたのかについては定かではありませんが、隣部落の磯河内村の前田池には縄文遺跡が残されており、粟井の谷あいにはかなり以前から人が住み着いていたと考えることができます。

文書の記録として残されているものでは、正治元年（1199）己羊正月十六日、風早郡小川村有田山城守定之が京都における二度の戦いに勝利したお礼に同村に有田大明神を勧請したことが古文書に書かれており、現在もこの有田大明神が存在しています。また文政4年（1821）に書かれた風早郡小川郷地図にもこの有田大明神が31戸の家とともに描かれています。

（風早歴史文化研究会会報『風早』第49号「小川地区学習会」竹田覚）

一方、小川の正八幡神社の



写真①正八幡神社

創立年は判りませんが、その由来には河野氏との関わりが伝えられています。明治4年1月までは、正八幡宮と呼ばれておりましたがその後、正八幡神社と改称し村社に加えられたと伝えられています。

小川村の南側に聳えている宅並山城については「小川村宅並山絶頂にあり傳へいふ、栗上左右衛門尉これを築て居る後二神信濃守これに拠りしか麓村横山城主南美作守の陥る所となる。文明十一年細川頼春當國へ侵入の時、彦四郎忽那新左衛門、重見隼人佐、等當城に據り二百餘騎を以て栗井坂の切所を塞くと云ふ」(『伊予温故録』)と記録されています。

「二神家経口上書」によれば二神信濃守(家真)が拠ったと伝えられていることと、天正10年2月に当時の城主であった栗上左右衛門尉と横山城主南美作守とが争ったいわゆる「樺木鼻事件」で知られてからです。



写真②宅並山と小川村

河野氏が歴史に登場し、鎌倉、室町、戦国時代のいわゆる中世時代の小川村の記録は古文書類ではこれまでのところ余り確認されておりませんが、石造物などではその足跡が残り、江戸時代になって大森彦七の末裔、大森氏が小川村の庄屋になってからのものは現在調査解明中の「小川大森文書」や小川部落に残る「明治、大正期の文書類」で一定の記録が残されています。

2. 小川村を記録する会の活動

「小川村を記録する会」(仮称)の有田晋作氏による「風早郡小川村及び宅並山関係の歴史」の調査報告書には、小川村を代表する城跡、建築物、記念碑、石造物や大森文書をはじめ古文書類など総ての分野

に渡り調査した中間報告がされており、「この村を訪ね歩いていると中世の村にタイムスリップしたような気分になる」と、かつて小川村を訪問した田代郁夫東国歴史考古学研究所所長に言わしめたほどの歴史の宝庫とも言えるのが小川村です。

その有田晋作氏による「風早郡小川村及び宅並山関係の歴史」の二神氏関係分を紹介します。

なお大森氏は南北朝期、湊川の合戦で楠木正成を敗死させ勇名を轟かせた大森彦七を祖先とし伊予国砥部庄に住んでいましたが、天正10年（1582）に栗井の小川村に移ってきました。その後、江戸時代から明治にかけて約300年の間小川村の庄



③旧小川村庄屋大森家屋敷

屋をつとめた系譜で、河野氏滅亡後に帰農した小川二神氏は、庄屋小川大森氏の動きに連動するため、現在「小川大森文書」の調査解明作業を進めています。

宅並城祉 松山市小川

宅並山頂上にある中世の城跡栗上左衛門尉之を築く。後交代、二神信濃守。建武年間（1334～38）河野通盛が湯築（ゆづき）城を築いてから栗井坂の切通しが戦略上重視され、坂のすぐ上の宅並山に砦が築かれた。文明11年（1479）細川義春軍が伊予に侵入した時にも道後湯築城の前線基地としての役割を果し、「予陽河

「野家譜」（よようこおのかふ）には南彦四郎通景・忽那新右衛門尉・重見隼人佐らが200余騎を率いて、固く栗井の切所を守って宅並城に立てこもったとある。天正13年（1585）の河野氏滅亡によってこの山城も廃城となった。江戸時代は農村としての歩みを続けた。なお、宅並山のお宮は小川の正八幡神社奥の院です。この奥の院は、昔から石積の上に祠があり戦後「焚き木」が必要な頃は登っていたが昭和30年頃から登らなくなり荒れ放題となり平成6年小川部落により再建された。区長有田弘、登山道は重機オペレーター林賢三、石積林菊夫、棟梁玉井秀孝、当時の役員による奉仕により完成した。文政4年（1821）小川村地図によると正八幡神社は宅並山頂上にあったと記されています。

樅木鼻（かたぎのはな）　松山市麓（ふもと）

県道松山・北条線の平林橋を渡って、東に見える小高い山を樅木鼻と言います。地元の人たちは「かたぎのはな」と呼んでいます。それは、栗井の歴史上、重要な事件が起こったからです。昔、農民にとつて農業用水は命の次ぎに大切なものです。天正10年（1582）に、この農業用水をめぐって水争いが起り、横山城主の南道方（みちかた）と宅並城主栗上通妙（みちたえ）がこの樅木鼻で話し合うことになりました。この時、通妙は、兵を川岸の岩かけにひそませ、南道方を矢でねらいました。矢は通方の右肩をつきぬけ、通方は死んでしまいました。通方の子、通具（みちとも）は13歳でしたが、父の敵（かたき）をとるため家来を100人あまり連れて宅並城へ攻めこみました。栗上通妙は、力尽きて城の中で死んでしまったそうです。栗上氏の兵がひそんでいた大岩は現在小川の玉江民雄氏邸宅の庭石として残っています。また、樅木鼻で戦った南氏の家来を供養するために立てたと伝えられる五輪塔が、客の矢田に残っています。

玉江邸・檍木鼻関係の岩・日露戦役記念碑・短歌碑

栗上氏の兵がひそんでいた大岩は小川の玉江律之氏が、邸宅の庭石として運ぶ、途中木・石橋の為、補強しながら運ぶ、しかし小川上地蔵さん所の橋が壊れたといわれている。また、あまりの大きさの為、人夫が少し割ったとも伝えられている。「日露戦役記念碑」は太平洋戦争の敗戦により小川公民館にあったものをアメリカ軍が占領することになり公民館にあるのはいかがなものかと言うことになり、玉江律之氏の父玉江平五郎氏が碑文を書いている為自宅の庭へ引き取ったもの。出征兵士の氏名次の通り。序位抽籤右から、福部村吉、大森千太郎、玉井政助、玉井勝五郎、玉江善平、玉井繁蔵、玉井元吉、作道重太郎、大森孫太郎。玉江平五郎書とある。

吉井 勇 短歌碑

「うらうらと 春の日射せは 見はるかす
宅並山は 眠ることしも」

「吉井勇」歌人、劇作家の吉井勇は明治19年東京に生まれる。(1886)～昭和36年(1960)。早稲田大学中退。明治38年「東京新詩社」に加わり、「明星」に歌を発表。やがて「東京新詩社」を脱退し、北原白秋らと「パンの会」を結成し、枕美派文学の一翼として多彩な活動を展開します。明治42年に森鷗外監修のもと、石川啄木らと「スバル」を創刊し、編集にあたる。翌年、第1歌集「酒ほがひ」を発行して歌壇的な地位を得、以後「昨日まで」「祇園歌集」「人間経」など多くの歌集を出版した。

二神信濃守宝篋印塔 松山市磯河内

磯河内に「大殿様の墓」と称し宅並城主二神信濃守の供養塔と伝えられた宝篋印塔並びに大小の五輪塔がある。天正13年(1585)7月小早川隆景(たかかけ)が来攻、風早攻略をしたが「予陽河野家譜」には日高(ひだか)城、高穴(たこな)城、横山(よこやま)城の戦いについて記録され、結局9月28日に至って周布(しゅふ)、越智、野間、風早5郡の数城悉(ことごと)く陥(おち)るとある。したがって恐らくこの宅並城攻略も横山城に続いて行われたものであろう。この宅並城主については二神家経(いえつね)の口上書(こうじょうがき)きがある。「豊田と申し候えども二神島より河野家へ参り候ゆえ、これより二神と名乗り申す由、申し伝え候。則ち豊田の系図今に御座候。河野家にても風早郡のうち沢並(宅並)と申す城を私の祖父信濃守と申すもの預り居り申し候。同郡のうち高之山(高穴)城には私の親、長門(ながと)預り居り申し候。同郡のうち鹿島と申す海中の城には私の叔父二神豊前(ぶぜん)守と申す者預り居り申し候」と述べられている。また、伊予古城砦記(いよこじょうさいき)には「宅並城は栗井村小川にあり栗上左衛門尉(さえもんのじょう)これを築く。のち交代あり」とし、伊予郡郷俚諺集(いよぐんごうりげんしゅう)・予陽塵芥集(よようじんかいしゅう)などにも「宅並城・小川村・二神信濃守の古城」と明記する。したがって、この宝篋印塔は二神一族のものと思われる。

「二神氏」はもともと二神島に住んでいたわけではなく、「豊田姓を称して長門の国豊田郡に居住していました。豊田藤十郎種家の時、理由があって伊予の国温泉郡二神島に移り、これより二神姓を名乗り二神長門守種家と呼ぶようになりました。種家が二神島に本拠を移した時期については、明かではありませんが、資料から推察すると室町時代の初期であったと云われています。

大森家 松山市小川

「大森氏系図」清和天皇⇒盛長（彦七）⇒盛頼⇒盛寿⇒。「大森氏家紋 割り九曜（わりくよう）」大森家の先祖は、砥部に住んでいましたが、天正10年（1582）に栗井の小川村に移ってきました。その後、江戸時代から明治にかけて約300年の間小川村の庄屋をつとめました。その間新田開発（盛信新田と言う=小川旧R196号払川南の海岸あたりと思われる）や溜池を作るなど、村の為に尽くしました。中でも、大森家11代目の大森盛寿（おおもりもりかず）は、「栗井坂新道」を開きました、27代大森盛信は風早郡辻村困窮の為「取り立て入り庄屋」となる。亨保11年丙午年5月4日松山藩主松平定英の命により入り庄屋となり入用米100表を下賜す。

「大森屋敷跡全体」の広さは約550坪、屋敷は120坪、部屋数17、畳83枚分あったという。「大森家墓地」は屋敷跡を真下に見下ろす南岡に歴代墓石が整理されて立つてある。元風早歴史文化研究会会長の得居衛先生のメモに、栗井の庄屋大森家の墓地で「大森盛頼先祖の碑」は2mに余る大石碑である、この墓地の間に1字1石塔があつて銘文次の通り、銘文、法華経1字1石塔小川郷六代大森盛重、この1字1石塔は、古老の話によると、その昔小川村に伝染病が流行した時、4カ所に1字1石塔をたてて伝染病退散を祈願したということである。またこの尾根すじには三つの経塚があると伝えられ大森家の墓地近くの頂上に中経塚があった、下の墓地の頂上に下経塚、の墓地の頂上に上経塚があつて、そこには最近まで古松が1本あつたが、切って、株だけが残っているということである。

「大森盛頼先祖の碑」は子孫の堤茂登子さんにより菩提寺の蓮福寺に移した。移転後の場所は整理されているが、その中に小川の庄屋職にあつた大森盛章（春恕・しゅんによ）の辞世の歌が墓石の左側面に刻まれている。

「かりものの いつつのものはもどすなり
はだか身で来て いぬる裸身」

「大森盛寿の碑」大森家墓地をを少し下ると大森盛寿之碑がある。碑は菩提寺である河原の蓮福寺の方角を向いて建ててあり、高さ122cm、幅61cmである。

(有田晋作「風早郡小川村及び宅並山関係の歴史」より)

二神用語（一説）

海賊衆二神氏

文明11年（1479）12月13日の河野教通知行宛行状（二神文書・1486）によって、二神四郎左衛門尉（家経か）が風早郡栗井の安岡名・同友兼（友包とも記す）名・宮崎分を宛行われており、それ以前に河野氏被官となっていたものと思われる。同13年（1481）には、河野氏の直轄領である「風早郡御手作分反錢」（文明8年分）を高山通貞からうけとっている（二神文書・1499）。河野氏直轄領の代官となっていたのであろう。二神氏は二神島を本拠とし、「二神嶋作職」を相伝していたが（二神文書・1773）さきにみた栗井郷内の所領を相伝し、栗井郷反役職、河野郷役職に補任され、河野氏家臣団のなかで重きをなすようになった。そして風早郡の宅並城に拠って宅並二神衆を形成し、河野氏の軍事力（水軍）の一翼をになった。

永禄13年（1570）来島牛松丸（のちの通総）が河野氏に背いたとき、河野氏は垣生・平岡という重臣の連署奉書をもって、来島氏との対面を禁止し、河野郷役職の補任をはじめ、風早郡で多くの所領を与えることを約束した（二神文書・2106）。これは、来島氏に対抗する勢力を二神氏がもじほじめたことを意味する。二神衆の構成・実態などについては不明であるが、永禄13年（1570）12月15日の河野牛福丸（通直）の所領安堵状（二神文書・2110）によると、「粟井三分廿五貫」は「衆中申し談すべきなり」とあり、二神氏惣領の所領經營が宅並二神衆中の承認が必要だったことをうかがわせる。河野氏は、このような海賊衆を掌握していくた。（『愛媛県史、古代II・中世』昭和59年愛媛県発行）

小川村（二神氏一族の館跡）

伊予国風早郡小川村（現在は北条市小川）は比較的古くから開けた村ですが、河野氏の祖、河野通清が備後国の奴可入道西寂の伏兵にあって治承4年（1180）1月に小川村の南外れにある粟井坂で自害した場所として知られたのが最初であると思われます。次に河野通盛が道後湯築城を築いたとされる同じ建武年間（1334－1338）に小川村の南側に聳える山、宅並山に城が築かれました宅並城の創建です。この宅並城が初めて文献に現れるのは、寛正6年（1465）讃岐国の細川勝元が伊予国に侵入したとき、河野通春を支援した大内政弘の軍勢が宅並城に拠ったと「予陽河野家譜」に記されています。この他、粟井坂にある大師堂には「木造地蔵菩薩座像」（北条市指定文化財）には応永2年（1395）奉造の銘記がありますが文政4年に描かれた小川村の絵地図には粟井坂に大師堂は描かれておらず応永2年（1395）奉造の「木造地蔵

菩薩座像」がいつの頃から小川村にあったのかは明確ではありません。

小川村にある多くの石造物や五輪塔、中世墓石などの中で、年代が銘記された物のうちで最も古いものが下屋敷の小字が残る払川の橋のたもとに、地元の人たちが「地蔵さん」と呼ぶ石造物や五輪塔を雑然と並べた中の一つになる高さ90センチ程の宝篋印塔です。これには最下の反花や上部の宝珠、請花などは失われていてありませんが、格狭間に残る康応元年（1389）9月の年記名が微かに読み取れます。（風早歴史文化研究会）ちなみに、国内在銘最古の宝篋印塔は鎌倉で発見された宝治2年（1248）のものですから、この宝篋印塔の歴史的価値を証明すると同時に歴史の宝庫としての小川村を逆に証明するものと云えます。

康応元年（1389）9月年記名の宝篋印塔がこの場所に置かれたのは近年になってからのこと、小川村が俯瞰できる高台にかつて建立されていた永福庵の近くから複数の五輪塔や宝篋印塔などが発見されましたが、それらのうちの一つであることが判明しました。それをかつての小川村の入り口に置いたのはこれらを発見した時代の人たちも、村人の安全と村の発展を願ってのことであったものではないかと考えられます。先述の大師堂の「木造地蔵菩薩座像」と比較すると宝篋印塔の場合にはそれほど簡単に持ち運びは出来ませんから、小川村で建立された後に再発見され、この場所に移動されたまま今日まで村の入り口に建っているものと見るのが自然であると考えられます。

この小川村に二神氏が入ってきたのが正平22年（1367）のこと、宅並城主として二神十郎左衛門尉種直が一族郎党を率いて二神島からはじめて伊予本土の土を踏みました。康応元年（1389）9月の年記名の入る小川村の宝篋印塔が建立される22年前のことです。その後、二神氏の発展と共に「宅並二神衆」と呼ばれた強力な軍事力を持つ集団などへと広がりをもってゆきます。宅並城

主であった歴代の二神氏をはじめ「宅並二神衆」など二神一族は、家族を含めて日常普段の生活の場としてこの小川村に住み着いていたものと考えられますがその館のあった場所が一体どこであったのかについて今後の調査研究の課題になるものと思われます。

宅並城（二神氏の居城）

小川村の南側に聳える山、宅並山（200.9メートル）に城が築かれたのは建武年（1334～1338）のことであると云われています。

創建した人物は不明ですが、同じ時期に道後湯築城を築いたとされることから河野氏の命令によって道後湯築城に対して道後北方面の海からの侵略に備えた山城であると考えられています。

この宅並城が初めて文献に現れるのは寛正6年（1465）讃岐国の細川勝元が伊予国に侵入したときで、河野通春を支援した大内政弘の軍勢が宅並城に拠ったと「予陽河野家譜」に記されています。が、この時二神氏は道後で討ち死にした二神種の時代に入つており宅並城が平時と戦時下とでは大きく役割が異なっていたと考えられます。宅並城は城郭立地から見れば、海からの侵入に備えているため西部方面は二神氏の故郷二神島や忽那諸島、遠く長門国を眺望でき、風早平野を隔てた北部に鹿島城や惠良山城を、東に高縄山城、横山城、北東方面には雄甲城、雌甲城、高穴城、神途城、日高城、南方面には葛籠脣城、花見山城などが手に取るように見えます。

城郭は東西60メートル、南北25メートルの長方形の単郭で郭の西部に部分的に一段の石列が残っています。文明11年（1479）讃岐国の細川義春が伊予国侵入を計ったとき南氏、重見氏、忽那氏らが宅並城を固めたとの記録が「予陽河野家譜」に記されています。

二神氏側の記録では4代目家直の弟で城辺二神氏の祖、二神家経の口上書に「……始め豊田と申し候えども二神島より河野家へ参り候ゆえ、それより二神と名乗り申す由、申し伝え候（中略）河野家にても風早郡の内、宅並と申す城には私の祖父信濃と申す者預かり居り候……」（会報創刊号「二神氏ゆかりの地を訪ねて」参照）との文書が残されています。

宅並城主だったと考えられるのは二神系図から見ると二神種直、二神家直、二神家真の三名で、道後で討ち死にした二神種や、宅並城が廃城となった時代に生きた二神通範についてはこれまでのところ宅並城と結びつける有力な史料は確認されていません。道後湯築城が築城されて以降の時代に河野氏の家臣団が拠っていた配下の各枝城との関係や、先述の湯築城への出仕当番制度などについてもその実態はまだ明らかになっていません。ともすれば近世藩政時代における「登城」の光景が頭をよぎりますが政治的、軍事的にも不安定だったこの時代の出仕当番制度などがどのようにになっていたのかを明らかにすることについては今後の調査課題でもあります。また「宅並二神衆」（会報第3号二神古文書解説参考）についてもその実態が家族をはじめ日常生活のスタイルなどを含めて一体どのようなものであったのかについても様々な角度からの調査研究が期待されています。

宅並二神衆

「宅並二神衆」が登場するのは「片山二神文書」の中で、今から約450年前の天文21年（1552）11月17日に河野通宣から宅並二神衆宛に出された「安堵判物」に次のように書かれています。「鴨部郷新田分、為代所新田弥九郎知行分之事、申付所也、右早任先

例之旨、進退領掌不可有相違之状如件、天文二十一年十一月十七日通宣（花押）宅並二神衆中」

安堵判物とは土地、建物などの所有権や領有権、知行権などを確認あるいは承認したことを証明する文書のことで、この内容を解釈すると、「鴨部郷（現在の今治市玉川町）の新田分、即ち従来新田弥九郎が支配していた土地を、代わりの領地として宅並二神衆に与え、支配することを申し付けるものである。右、速やかに先例に則って知行裁量致すことに異存ない事、此の書面のとおりである。」と理解できます。では、なぜ宅並二神衆に遙か遠い鴨部郷の新田弥九郎の知行分に代わって安堵したのかと云う疑問が起こります。この疑問に答えるためには当時の情勢を分析してみることが必要です。当時、鴨部郷を支配していた新田弥九郎は河野氏との関係を持つつも、安芸の毛利元就や小早川隆景との接触があった来島氏と、地理的に見ても関係があったと見たほうが自然であると考えられます。このこともあって河野通宣は、宅並城に拠る二神氏一族の中でも最も戦闘的で才智に長けた集団で宅並城のすぐ麓の小川村を生活の拠点にしていた、宅並二神衆に鴨部郷の新田分を知行することによって来島氏や、毛利氏、小早川氏を牽制しようとしたのではないかと推測できます。

数ある「二神文書」の中で、河野氏が直接「宅並二神衆」宛に出したものは、残されているもののなかではこれが唯一のものです。「宅並二神衆」については会報第3号「二神古文書の解説」第2回で考察を試みておりますので参考にしてください。

連載 二神古文書の解説 第8回

二神 英臣（事務局長）

二神氏が栗井郷内の反銭徵収を任務とする役職を河野氏から認められていた

高山通貞請取状「反銭」の請取状

栗井郷反役職安堵状

これまで本島二神氏に伝来してきた「二神文書」は現在「神奈川大学日本常民文化研究所」で管理され、調査研究がすすめられています。また片山二神氏に伝来してきた「片山二神文書」の原本は昭和20年（1945）7月の松山空襲で焼失し、その写しが東大史料編纂所に保管されています。「二神文書」と呼ばれるものはこの他にも「柳原二神文書」や城辺二神氏の「二神内記・外記」、大分県玖珠町の「豊後森二神文書」など各系譜に伝わるものがありますが、多くの文書は、二神氏の間でも公開されてきませんでした。

本欄の「二神古文書の解説と紹介」での連載を通じ初めて、中世の伊予国で二神氏がどのような任務を担い、その役割を果たしてきたのかについて知られた方も多いのではないかと思います。

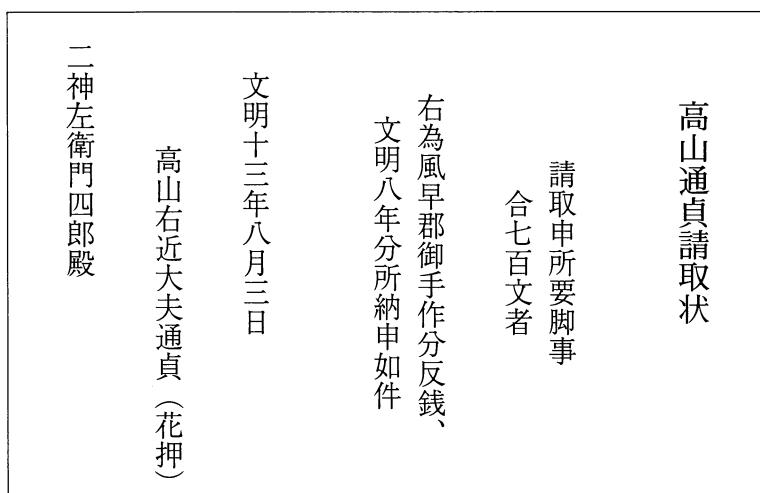
速報No.25でも「二神関係用語集」の必要性について提案していますが、会員や関係者の皆さんが二神氏に関わる事柄についての知識が少しでも必要になったときにすぐに開けられる「二神関係用語集」の編集に直ちに取りかかることとします。

さて、今回紹介するのは「二神文書」のなかで文明13年（1481）8月、二神家直（左衛門四郎）に出された「反銭」の請取状と、「片山

二神文書」に残る、天文21年（1552）9月、二神左衛門尉、二神源三郎二名宛に出された「栗井郷反役職」の安堵状の紹介と、かつて石野弥栄湯築城資料館長も編集に携わった『愛媛県史』や辞典などの著述や説明なども併せて「反銭」の解説をします。

高山通貞請取状

これは文明13年（1481）8月3日付で二神四郎左衛門（家直）宛に高山右近大夫通貞の名によって出された反銭の請取状です。これは、文明8年分の風早郡正作分700文の反銭を河野氏に納付した事を示し、この時代「栗井郷反役職」にあった二神家直に対し、受領した旨を伝えているものです。高山通貞とは河野氏の家臣で「河野氏分限録」にもその一族の名前が確認されます。二神氏の四代目になる二神家直の時代は、二神種直が河野氏の家臣になってから100年以上が経過しており、この頃になると「二神氏は河野氏から知行をうけた忠実な部将であったことがわかる」（景浦勉著・「二神家文書」）と述べています。

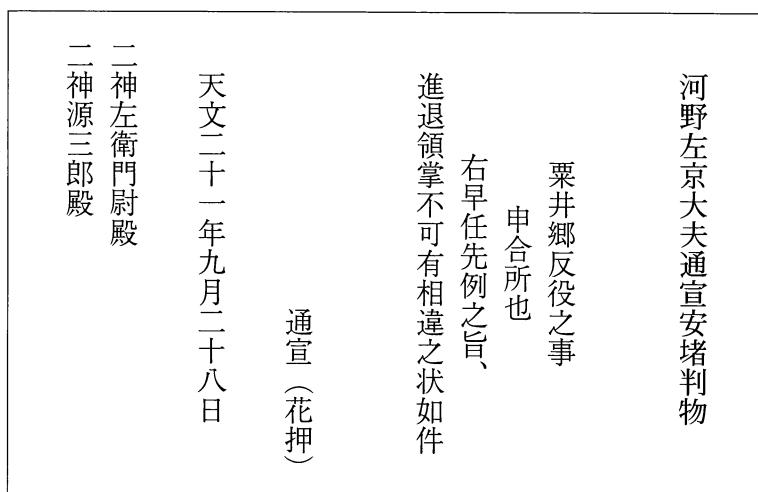


河野左京大夫通宣安堵判物

次に、天文21年（1552）9月28日付けで河野左京大夫通宣から二神左衛門と二神源三郎の2名に出された「栗井郷反役之事」は、先の栗井郷反役職にあった二神家直の時代から代々二神氏が同職を継承してきたことを示すものであると考えられます。安堵判物とは祖先以来知行している所領等の継続確証をした文書のことで、因みに二神家直の時代からこの時代まで70年が経過しており、二神氏も時代が二代ほど下がっています。

安堵判物の宛名は二神左衛門と二神源三郎ですが、この人物の系図及び系譜上での確認が取れていません。

二神左衛門は「高山通貞請取状」の二神四郎左衛門と同一人物のように見えますが、70年の経過をどのように見るかが焦点で、左衛門を襲名した人物かも知れませんが確認されていません。もう一人の二神源三郎については「本島二神系図」にも「片山二神系図」でも発見できません。



これらのことについては先年亡くなられた景浦勉先生も次のように述べています。

「前略『豊田二神嫡流系図写』と『二神氏系図伝書略記』はともに系譜であって、前者は江戸時代末期に、後者は江戸時代初期に完成したものである。史料として取扱に注意を要するけれども、二神氏を研究するうえに重要な参考資料である。このような諸文献がありながら、これらを基礎とした二神氏の体系的な研究はまだされていない。それは史料にいろいろの隘路があるためである。そのうち最も困難な問題は、系譜の記述が本系のみに限定せられ、かつ余りに簡単であるから、古文書のうえに現われる重要な人物（官名で書かれている場合が多い）を系譜のなかに発見できることである。同じ二神氏でありながら、これらの人物をどこに位置づけるか、また系譜の上の人物といかに関係づけるかがわからない。もし別に家記の類があれば、これらの人物関係を解決することができるばかりでなく、ひいては二神氏の活躍をいっそう確実にすることができるであろう。残念ながら現在の段階においては、これらの人物関係を掌握できないために叙述が不明確になることを諒承されたい。後略」景浦勉「二神家文書」（『大山積神社関係文書』伊予史料集成刊行会編・昭和52年1月8日発行に収録）

いずれにせよ、二神源三郎はこの時代まで来ると何処かの二神氏系譜に属していたのであり、各系譜の皆さんには是非もう一度系図を調査して見てこれらの人物の確認をして欲しいと思います。

守護の権限

南北朝～室町期における守護の権限は、鎌倉時代のそれに比べて著しく強化された。すなわち鎌倉期の守護が、いわゆる大犯三か条に基づく検断権を主体とするものであったのに対し、この時期の守護は、それ以外

- ① 使節遵行権
- ② 荘田狼籍の禁止を行う権限
- ③ 段銭等諸役（役夫工米、大嘗会段銭等）徵収権
- ④ 半済給与権
- ⑤ 闕所地預置権等諸種の公的諸権限

を挺子として分国（領域）支配を展開した。河野氏の場合、この種の史料に乏しく容易にその実態は把握できないが、つぎにその事例を少しく述べておこう。（『愛媛県史、古代II・中世』昭和59年愛媛県発行・石野弥栄執筆）

段銭等諸役徵収権

室町期の守護は、役夫工米（伊勢神宮造替の費用・大嘗会段銭（天皇即位式の費用）等の諸公役を分国内に一律に賦課する権限を幕府から認められていた。たとえば、応永二年（一三九五）一〇月一七日、幕府は守護河野六郎（通之）に東寺実相寺造営の費用の段銭（段別五〇文）を伊予国内一律に賦課することを命じ、通之はそれを承けて守護代と思われる河野伊豆入道（戒能氏か。「築山本」に戒能豆州と見える）に遵行命令を下達している。このとき、段銭賦課の基準になったのが「公田」であった。東寺実相寺造営要脚について「段別伍拾文を公田に支配せしめ、寺家に沙汰し渡すべし」と見える（東寺百合文書一〇九〇）公田とは、鎌倉期に作成された大田文・図田帳・惣勘文等の一国単位の土地台帳に記された寺社本所領の笠園・公筈（国衝領）の田地をさすが、室町期の守護はこの公田に一国平均役としての諸賦課（公役）、さらには守護段銭を賦課し、領国支配を展開したといわれる。河野氏も例外ではなかったと考えられる。ただ伊予国の場合、惣国

にわたる公田を記した土地台帳は残存していない。「乾元井文永国検帳」が作成されたというが（国分寺文書・九三一）、これが大田文に類するものなのか、あるいは伊予国衝領全体のみを記したものなのか、判然としない。（『愛媛県史、古代II・中世』昭和59年愛媛県発行・石野弥栄執筆）

段銭（たんせん）

中世の臨時に課せられた公事。即位・譲位・大嘗会・内裏造営・將軍宣下などに際し、朝廷・幕府はその費用を田の面積に応じ段別を基準として人間を客体として課した。はじめは米を課したので段米といった。（各別賦課）課率はそれぞれの目的や事情によって一定しないが、地域的には一律賦課を原則とした。

15世紀に入ると棟別銭とともに室町幕府の財源として種々の名目のものとに煩雑に徴収され、幕府には段銭奉行がおかれた。また守護も領国に自分の段銭を課したことがある。これを守護段銭といった。また社寺もその荘園に課した。興福寺ではそれを寺門段銭・門跡段銭と云った。戦国大名の中には、これを恒常化して領国支配確立の一手段としたものもあった。

後北条氏は雜税を統一して段銭にかえ、これを本段銭と称しそれを基準にその3分の1増、ないし2倍増の増し段銭の徴収を行った。

『角川日本史辞典』（昭和51年発行第二版6版）

段銭（たんせん）

「反銭とは段銭とも呼ばれ、室町時代田畠の面積に応じて課し

貨幣で納めさせていた臨時税のことと、重要行事や内裏造営などのため臨時に特定の国郡あるいは全国に課したが、室町幕府は財政難のため頻繁に課税、段銭国分奉行を諸国に置き重要な財源とした。国司、守護、大名らも課し（守護段銭など）、臨時税から恒常化すると、銭納のため特に農民を苦しめた」

（『旺文社版 日本史辞典』）

段銭（たんせん）

中世、田地一段別に賦課された公事（くじ）。

本来は臨時的なものであったが、のちには次第に恒常化した。その起源は、朝廷諸行事や大寺社修造などの費用として諸国に賦課された一国平均役が、年貢・公事の銭納化の展開に伴って、田地一段別何文という賦課形態に変化していったことに求められよう。

一国平均役が段銭として賦課された事例は鎌倉時代後期から史料上に散見するが、史料的な疑問もあり、その初見の時期は確定し難い。いずれにせよ、鎌倉時代には一段別何升という形態の段米としての賦課がなお一般的であり、**段銭としての賦課が一般化するのは南北朝時代のことである**。南北朝時代にはまた一国平均役の賦課・徵収の権限が朝廷から幕府に全面的に移行し、それに伴って段銭に関する室町幕府の諸制度が南北朝時代から室町時代初期にかけて整備されていった。

室町幕府の段銭は、その内容から分類すれば、大嘗会や内裏造営などの朝廷諸行事の費用、伊勢神宮以下の寺社の修造および法会などの費用、そして將軍拝賀などの幕府諸行事の費用に大別される。このうち幕府諸行事の費用としての段銭の出現はやや遅く十五世紀中ごろであり、以後時期が下るに従ってその比率が増加

してゆく。また賦課の形式から見れば、諸国に賦課されたものと、特定の国を指定して賦課されたものとがあった。これらの段銘は、大田文（おおたぶみ）に記載されたいわゆる公田を対象とし、一段別何文という形で守護に対して賦課の指令がなされ、守護代以下の守護の支配機構を通じて徴収され、幕府に納入された。

幕府内においては段銭に関する機構として奉行人の中から国ごとに国分（くにわけ）奉行が定められ、また別に総奉行が定められた。一方では有力な寺社・公家および将軍近習・奉公衆は幕府から段銭の免除ないしは京済（きょうせい）の特権を認められていた。京済とは段銭を守護の手を経ずに京都において直接幕府に納入する権利であり、納入者にとっては負担の相当な軽減となつた。

また同時にこの特権によって彼らの所領は守護の干渉を排除することが可能となっていたのであり、特に将軍近習・奉公衆のこうした特権は、幕府の守護統制の一環として大きな意味を持っていた。以上のような室町幕府の段銭制度は、十五世紀中ごろ以降大きく変質してゆく。その大きな契機となったのは、段銭が国ごとに一定額で守護によって請け負われる守護請の出現である。段銭守護請の史料上の初見は現在のところでは永享五年（一四三三）の多田院造営要脚であり、この時は越中国段銭がこれに充てられて守護畠山氏が五百貫でこれを請け負った。こうした守護請は十五世紀中ごろにはその額も一国百貫ずつに固定化し、「国役」なる名称で一般化する。この時期には地頭御家人役が守護の請け負いとなったものも同様に「国役」と呼ばれており、「国役」はその本来の内容にかかわらず単に守護に対する定額賦課を示す概念となっていた。

段銭がこのような形態に変化したことは、幕府が在地における賦課体系から切り離され、幕府にとっての公田支配とそれを通じての賦課体系がその意味を失いつつあったことを示している。し

かしながら一方では、この段階においては有力寺社・公家や将軍近習・奉公衆の段銭京済の特権がなお存続しており、彼らの所領については段銭が守護の手を経ずに幕府に直納されていた。著名な「康正二年造内裏段銭并国役引付」は、そうした国役と京済の並存していた十五世紀中ごろの段銭賦課の実態をよく示している。これ以後戦国時代における段銭の賦課形態の変化は、守護による京済特権領域の包摂という形で進行し、幕府にとっての段銭はより完全に守護に対する定額賦課としての国役に転化していった。

戦国時代の幕府段銭はその多くが幕府諸行事の費用であり、天文十五年（一五四六）の足利義輝元服要脚を最後として史料上からその姿を消す。これ以後も幕府の戦国大名に対する何らかの形での賦課は見られるが、そこにおいてはもはや公田に基づく段銭としての性格は失われている。一方、こうした国家的な一国平均役の賦課とは異なり、領主諸階層が独自に賦課したものとして、守護段銭や領主段銭などのいわゆる私段銭が存在するが、これらの成立の契機もやはり一国平均役の賦課に求められる。守護の場合は、すでに述べたように幕府の賦課する段銭の徴収権を与えられており、その結果分国における段銭の賦課体系を自己の支配機構に組み込むことが可能であった。これを梃子として守護はみずからを賦課の主体とする守護段銭をその分国に成立させてゆく。守護段銭は応永年間（一三九四～一四二八）から史料上に現われ、十五世紀中ごろには一般的に成立し、また次第に恒常化していった。このことはほぼ同時期に幕府の賦課する段銭が守護の定額請け負いによる国役に転化していったことと密接な連関を有する。

段銭の国役化によって幕府が在地における賦課体系と切り離されたことにより、公田の支配とそれを通じての段銭の賦課体系はより完全に守護の分国支配の一環に組み込まれ、またそのことにより守護段銭の一層の展開が可能となったのである。ごのようにして守護の分国支配における段銭の重要性が増大するに従い、そ

の支配機構も整備され、段銭奉行などの機構が多く設置された。守護はまた段銭をその知行制に組み込んで国人に対する給与の対象とし、被官関係の形成に利用した。一方、当初から段銭京済の特権を与えられていた將軍近習・奉公衆も、みずからの所領におけるその賦課体系を梃子として独自の領主段銭を成立させることができた。

こうした条件はまた守護から段銭を給与された国人においても、また段銭京済の特権を得ていた莊園領主においても同様であり、十五世紀中ごろ以降、段銭は国役という形で幕府制度としての枠組みをかろうじて残しつつ、実質的には領主諸階層にとって独自の収取体系として機能するに至るのである。こうした状況の中で、段銭の賦課形態も従来の公田に対する段別賦課という形態にとどまらず、領主にとってより多くの剩余を収取することが可能な形態に転化してゆく。特に十六世紀後半の後北条氏や毛利氏などにおいては、土地に対する貫高の確定に伴い、貫高に対する一定の比率によって段銭の額を算出するという賦課方式が確立していた。ここにおいて、段銭は公田に対する段別賦課という本来の意味を失い、戦国大名のもとにおいて新たな形態の収取体系としてその経済的基盤に組み込まれていったのである。

京済（きょうせい）公事（くじ）康正二年造内裏段銭并国役引付
(こうしょうにねんぞうだいりたんせんならびにこくやくひきつけ) 国役（こくやく）守護請（しゅごうけ）段米（たんまい）

【参考文献】

岸田裕之『大名領国の構成的展開』、桑山浩然「室町幕府経済の構造」(『日本経済史大系』に所収)、百瀬今朝雄「段銭考」(宝月圭吾先生還暦記念会編)『日本社会経済史研究』(中世編所収)阿部猛「段米・段銭について」一起源と負担方式ー(『中世日本

莊園史の研究』所収)、田沼睦「公田段銭と守護領国」(『書陵部紀要』一七)、同「室町幕府財政の一断面」(『日本歴史』三五三)、市原陽子「室町時代の段銭について」(『歴史学研究』四〇四・四〇五)、小林保夫「室町幕府における段銭制度の確立」(『日本史研究』一六七)、今岡典和「幕府－守護体制の変質過程」(『史林』六八ノ四) (今岡 典和)

『国史大辞典』(吉川弘文館・平成5年第1版第3刷)

開元通宝、皇宋通宝、永楽通宝などの銭貨で納付

このように河野氏の家臣であった時代、二神氏は栗井郷の「段銭」(反銭)を徴収する役目を任せられました。栗井郷とは、二神家直が居城していた宅並城が位置する小川村を含む旧栗井村(明治22~昭和30年)のことです。この時代には17か村あった広い地域です。

中世の栗井郷については「[中世] 栗井荘 鎌倉期から見える莊園名。風早郡のうち。鎌倉末期と推定される「伊予国内宮役夫工米一向未済所々注文」(御裳濯和歌集紙背文書)に「栗井保九十一町七反□」と見える栗井保は栗井荘と同一と考えられる。建保3年2月8日の河野通信譲状(池内家文書/編年史2)に河野通信がその庶子池内冠者公通に譲与した所領の四至勝示に「みなみはあわいさかひをかきる」と見え、当荘は河野郷内の池内氏の所領(北条市夏目付近)に隣接したことが知られる。応永5年正月28日の竹林寺(越智郡朝倉村)蔵大般若経奥書(編年史3)に「予州風早都栗井庄年野山仏性寺」と見える。応仁の乱以後、文明年間から戦国期の天文年間にかけて、河野氏の代々は、被官二神氏(二神島出身)に当荘内の所領を給与し、安堵している。(中略)なお、天文21年9月28日の河野通宣安堵状(片山二神文書/愛媛県編年史4)に河野通宣は二神左衛門尉に「栗井郷反役職」を安堵しており、二神氏が栗井郷内の反銭徴収を任務とする役職

を河野氏から認められていたと考えられる」『角川日本地名大辞典』(38・愛媛県 平成3年発行・石野弥栄氏原稿校訂)と報告されています。

「反銭」については文書解説のなかで説明をしたとおりです。初期の頃は「反米」として米を納付していましたが次第に銭納となります。この頃国内で流通していた貨幣は、渡来銭と呼ばれた唐(開元通宝)、北宋(皇宋通宝、熙寧元宝、元宝通宝)、南宋(淳熙元宝、嘉定通宝)、明(永樂通宝、洪武通宝)の時代に铸造された物、朝鮮通宝や安南銭など銭貨を商品として輸入したものを流通させていました。「この頃、日本国内では銭貨の铸造をやめており、いわゆる皇朝十二銭は天徳2年(958)に、けん元大宝を铸造したのが最後で、新規につくることも不可能な状態でした。こうした渡来銭の輸入、使用は寛文10年(1670)に四代将軍綱吉によって、寛永通宝以外の流通禁止令が出るまで続きました。」(『貨幣手帳』頒分社刊)

このように「二神氏が粟井郷内の反銭徵収を任務とする役職」を執行していた時代に流通していたのは「渡来銭」と云われる銭貨で、反銭が銭納となってからは、二神氏の屋敷には各種の銭貨が運び込まれていたと想像されます。神奈川大学日本常民文化研究所で調査研究が進められている「本島二神氏文書」をはじめとする、本島二神氏の宗家から搬出された資料類でも渡来銭が数多く確認されています。



開元通宝(唐・621年)



皇宋通宝(北宋・1039年)



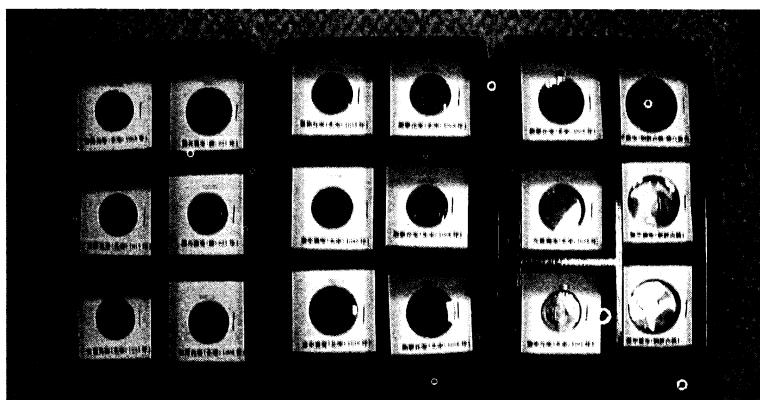
景祐元宝(北宋・1034年)

いずれも小川二神氏
に伝わる古銭

小川二神氏に渡来錢が伝承 反錢職時代のものか？

宅並二神衆の一流と思惟される「小川二神氏」の系譜にこの渡来錢が家宝として伝わっています。子孫の方は「ずっとご先祖様の時代から家に伝わっていました。薄暗い床間横の長櫃に武具らしきものや数点の文書のようなものに混じってあったようです。父親が子供の頃にはそこに近寄ることが怖くて何があったのかについては判りません。長櫃の中には散逸しましたが数点の古錢だけは残りました……」と話しておられます。

小川二神氏の古錢には、開元通宝（唐時代）、熙寧元宝、皇宋通宝、祥符元宝（北宋時代）、など全国的に大量に発見されている貨幣は勿論、全国的にも発見例の少ない、景祐元宝（北宋時代）、や安法元宝（安南錢）、の珍しい物もあります。また、網野善彦先生の論文でも報告された康熙通宝、乾隆通宝、道光通宝、などの十七、八世紀の清錢に混じて咸豐重宝の大型清錢も残されていますが、これらの錢貨が「二神氏が栗井郷内の反錢徵収を任務とする役職」を担当していた時代のものであるのかどうかについては、本島二神氏の錢貨と同様に今後の調査研究の課題として残されています。



小川二神氏に伝承する中世古錢

網野善彦先生も論文で 「本島二神氏」の古銭について報告

故網野善彦先生もその論文の中で、「本島二神氏」に残された古銭について次のように述べています。

「さきにふれたように、二神家に伝來した古銭は、計1,865枚に及ぶ。北宋銭・明銭、朝鮮銭に加え、その中に、康熙通宝、乾隆通宝、嘉慶通宝、道光通宝、咸豐通宝など、十七、八世紀の清銭が少なからず含まれている。

こうした清銭については、これまでほとんど全く注目されてこなかったと思われるが、薩摩の坊津や能登の時国家にも、清銭が伝わっている事実を考えると、清銭が江戸時代寛永通宝に混入しつつ流通していたことは間違いないといってよからう。その流入経路、流入量、流通の実態などについては、すべて今後の研究を待たなくてはならないが、これは江戸時代を単純に「鎖国」と見る見方一すでに最近の研究によって克服されつつあると云って良い見方の誤りをさらに明白に物語っているといえよう。そして逆に寛永通宝が広く中国から東南アジアにまで流出しているという事実を考えあわせると、銭の機能、その流通する世界のあり方について、検討すべき問題はきわめて多いといわなくてはならない。二神家のこの古銭については、模鋳銭も含まれているが、瀬戸内海の一小島が海を通じて江戸時代にいたるまで、日本列島の外の広い世界と関わりを持ちつづけてきたことを物語る貴重な証拠として、さらに精密な研究をつづけていきたいと思う。」〔網野善彦「伊予国二神島をめぐって」五 古銭について〕（『歴史と民族1』神奈川大学日本常民文化研究所論集1所収・1986年4月）

湯築城跡からも北宋錢を発掘

一方1988年（昭和63）から調査が行われた河野氏の居城「湯築城跡」から発掘された渡来銭が「湯築城資料館」で展示されています。これらも「本島二神氏」「小川二神氏」に残された銭貨とほぼ同じ傾向を示し、開元通宝（唐時代）、熙寧元宝、皇宋通宝、祥符元宝（北宋時代）、など全国的に大量に発見されている貨幣は当然としても、淳化元宝、祥符通宝、大觀通宝、嘉祐元宝、嘉祐通宝（北宋時代）、など全国的に発見例の少ない銭貨も発掘されています。

河野氏が二神氏などの反銭職から集めた銭貨をどのようにして幕府に送っていたのかなどについての報告や論文はあまり多くないと考えます。従ってこれら銭貨が、二神氏が反銭職を担当していた時代のものであるのかどうかについては、本島二神氏の銭貨と同様に今後の調査研究を待たなければならないと考えます。

系譜・家紋紹介（No.9）

事務局長・二神 英臣

小川（おがわ）二神氏

1. はじめに

二神氏三代目の二神種直が正平22年（1367）に河野通堯公から宅並城を給与され、二神島から四国本土にはじめて上陸しましたが、その宅並城は小川村（現松山市小川）にありこれまでにも何度か本誌で小川村を取り上げてきました。最近では『海の民・ふたがみ』第5号「湯築城特集」でも「二神氏ゆかりの地を訪ねて」の中で報告をさせて頂きました。



小川二神氏の屋敷がある小川村の下屋敷、岡ノ谷、上屋敷地域

今回、系譜特集として取り上げる小川二神氏は、小川村を拠点にした二神氏で、かつて二神種直や家直、家真等も住んでいたのではないかと考えられる地域を中心にしてその足跡を残しており、小川二神氏の関係史跡などから宅並二神衆の一流であると思慮されている系譜です。

このようにこれまでに発表された文献なども参考にしながら読み進めて頂ければ小川二神氏についてより理解を深めて頂けるのではないかと考えます。

2. 小川二神氏の歴史

小川二神氏の歴史については、二神系譜研究会が発足するまでに研究もしくは考察された足跡が確認されませんでした。それまでの小川の歴史については郷土史家の故林関四郎氏が故郷の風早小川をこよな

く愛したこともあり、閑林園の造園をはじめ栗井坂に残る河野通清の供養塔や関所跡などの文化財の保護に全力を尽くしました。その林氏も今は亡くなりましたが、その後の一昨年夏「小川村を記録する会」（仮称）が発足しこれまでに林関四郎氏が調査した成果を継承する形で現在史跡等の調査研究が進められています。

小川二神氏の歴史解明についてはこの「小川村を記録する会」の調査研究が参考になっており、二神系譜研究会の調査研究と平行する形で、共に協力協同しながら解明をすることが重要で、小川二神氏の全ての方々の協力によりこれまでに小川村の歴史と系譜の解明が進められております。

文政4年（1821）に書かれた「風早郡小川郷地図」31戸の家には藩政時代になって帰農した小川二神氏の数家も描かれています。

一方、平成11年（1999）12月には神奈川大学日本常民文化研究所の調査団（橋川敏忠団長）が小川村に入り、小川二神氏の所有地内に残る宅並二神衆の墓地と見られる五輪塔墓石や一石五輪塔などの調査を行いました。こうした研究調査などを進めるなかで、現時点で小川二神氏は一族に残された伝承や関連史跡、遺品などから伊予の中世史に残る「宅並二神衆」の一流と思慮されています。

3. 現在の小川二神氏の系譜

小川二神氏の系譜は現在も小川村に住んでいますが古文書や系図などの史料が残されていません。しかし、宅並二神衆の墓石と見られる無数の五輪墓や小川二神氏が代々所有してきた土地や墓地などは、村の中心部を流れる払川沿いの宅並城への入り口周辺にあってその時代における風早郡小川村でのいわゆる一等地にあり上屋敷、岡ノ谷、下屋敷などの小字が残っています。

また、代々家に伝わる中世古銭を所持していたり（二神古文書紹介参照）、伝承としていくらかの武具のようなものが長櫈の中にあったことや、宅並城の麓で先祖が敵に斬られた場所、などの話が断片的で

はありますがあえて語り伝えられています。

一方、二神氏の系譜研究を進めてゆく上においても重要ないくらかの残された物が、康応元年（1389）9月の年記名が入った宝篋印塔や無数の石造物など、近世のものも含めてその時代にタイムスリップしたかのように村のあちこちに無造作に置かれています。このように小川村や周辺に点在する二神信濃守の宝篋印塔や、関連する石造物をはじめとする史跡に歴史科学の光をあて解明してゆくことが二神氏全体や小川二神氏の系譜研究を進めてゆく上において極めて重要なことであると思われます。

以上の経過をみて、今日の小川二神氏の系譜と宗家を含む風早二神氏との関係について考えてみました。

現在、栗井地区で二神氏を名乗る家が13軒あります。そのうち先に述べた近世風早御三家の直系に属するお家が2軒で、後の11軒は全て小川二神氏の系譜に属します。

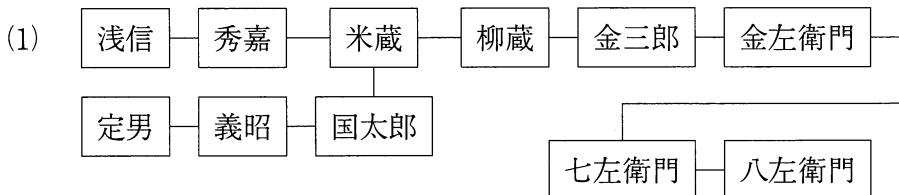
その小川二神氏の系譜に4つの系譜があることがこれまでに明らかになりました。

4. 小川二神氏 4 家系譜

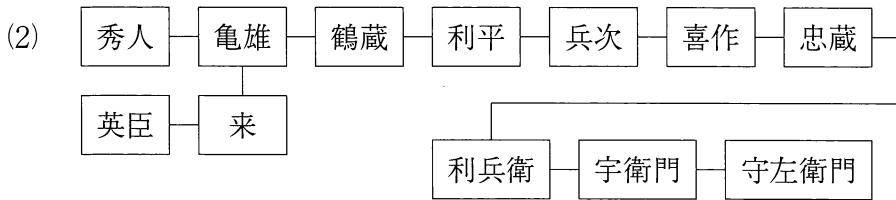
小川二神氏の4系譜は今日では全国に拡がっています。小川村は勿論のこと旧北条市内や松山市、その他周辺地域で発展を続けています。

【小川二神氏の4家略系図系譜】 * 基本的に直系のみ記述

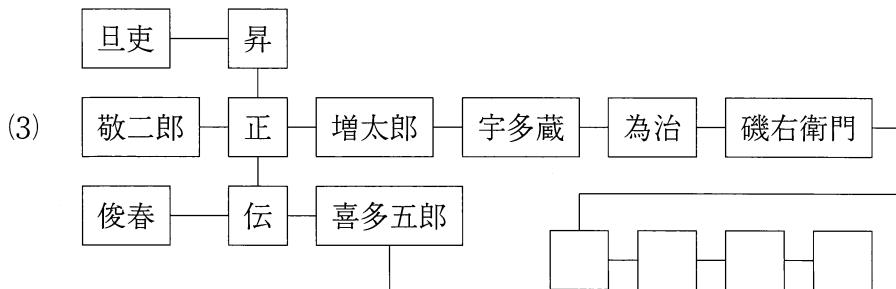
【下屋敷家】



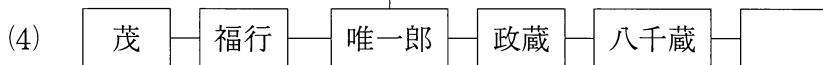
【岡ノ谷家】



【岡ノ谷中家】



【木間屋家】



【小川正八幡神社寄進額に残る小川二神氏の名前】

- 1 明治12年 9月御輿新調世話人
二神 政蔵【木間屋家】
二神 柳蔵【下屋敷家】
- 2 明治16年 9月御輿新調寄付
二神 政蔵【木間屋家】
二神 柳蔵【下屋敷家】
二神宇多蔵【岡ノ谷中家】
二神 利平【岡ノ谷家】



小川二神氏の氏神様正八幡神社

3 大正9年10月御輿新調寄付

二神唯一郎【木間屋家】
二神喜多五郎【岡ノ谷中家】

二神増太郎【岡ノ谷中家】

二神 鶴蔵【岡ノ谷家】

二神唯一郎【木間屋家】

二神喜多五郎【岡ノ谷中家】

二神増太郎【岡ノ谷中家】

二神 鶴蔵【岡ノ谷家】

4 大正15年10月道路改修寄付芳名

【宇佐八幡神社常夜灯に残る二神氏の名前】

明治15年8月建立奉寄進氏子中

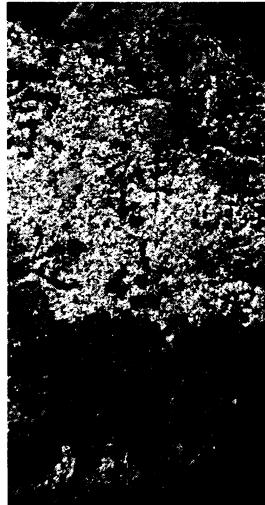
小川 二神政蔵【木間屋家】 河原 二神勘左衛門【常竹二神氏宗家】

二神柳蔵【下屋敷家】 常竹 二神小三郎【常竹二神氏大谷家】

二神利平【岡ノ谷家】



磯河内宇佐八幡神社常夜灯
(明治15年)

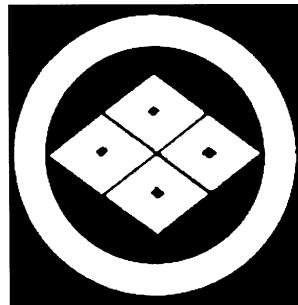


同常夜灯に残る二神氏の名前

5. 小川二神氏家紋

小川二神氏の家紋は「丸に四つ目菱」と云われる紋様ですが、「丸に四つ目菱」と呼ばれる紋は菱紋系統に属しています。菱紋は植物の菱からきたものです。

「菱はヒシ科の一年生水草。池沼や河川に自生し、根は泥中にあって、葉はいわゆる菱形で水面に浮いている。夏、白い四弁の花を開き、鋭い角のような突起のある実を結び、食用とする。菱の語源については、緊の意で実が鋭くとがっているから（大槻文彦氏）、あるいは葉がひしげた形であるから（牧野富太郎氏）といわれている。



「丸に四つ目菱」

『万葉集』に、

君がためうきぬの池の菱とると
わがそめし抽ぬれにけるかも

とあり、古代から池や沼で実をとっていたようだ。菱の文様は、古くから人々に好まれたらしく、正倉院宝物にも菱紋の染織品や木工品などが多くある。平安時代になってこの文様はますますもてはやされ『年中行事』や『伴大納言』などの絵巻によくみられる。菱紋はこれらの文様から転化したものである。

菱紋をはじめて使用したのは、清和源氏義光流の武田氏である。武田勝頼が天目山に敗死したのち、遺臣たちは再起をはかけて世をしひつつ各地に散ったが、彼らも何らかの形で菱紋を継いだ。

「寄せ三つ菱」は三菱財閥系会社の社章になっているが、創設者の岩崎弥太郎は、武田一族の裔である。

使用家は、武田流のほかにある。例えば大内氏、平氏良文流秩父支流、橘氏流、藤原利仁流、同秀郷流などが用いている。しかし大部分は清和源氏義光流（武田氏、小笠原氏など）すなわち甲斐源氏が用いた。

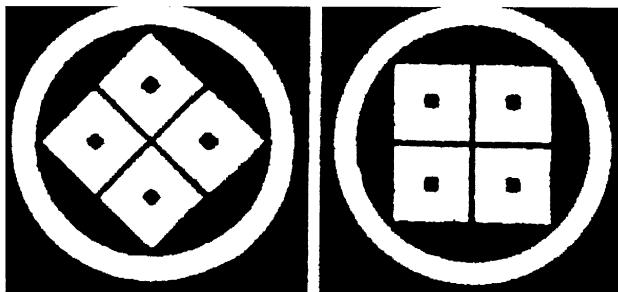
菱紋は二百十余種あり、家紋の数では第一位。形も武田一族の代表家紋である「割り菱」のほかに、重ね、三楷、松皮、搔摺など、また、析入り、稻妻、唐花など多くのバリエーションがある。」

(『家紋 知れば知るほど』発行・実業之日本社)

「丸に四つ目菱」とよく似たものに「丸に隅立て四つ目」とこれを90度回した形の「丸に平四つ目」があります。この紋は目結紋の系統に属し、鎌倉時代にこの文様がもてはやされたようです。

小川二神氏の中にはこの二つを墓石に彫り込んでいるものがありますが、「丸に四つ目菱」とよく似ているため、傍目には判りにくい場合があります。これらは相互によく似ているだけにご先祖が見間違えたのか、子孫の方への伝承が間違えたのか、あるいは意図して違えたのかについては明確ではありません。

これら小川二神氏の家紋は今日では家の神棚や屋根瓦等に使用され、墓石や秋祭りの御神灯提灯等に描かれ使用されていますが、藩政時代の墓石に家紋は確認されていません。



「丸に隅立て四つ目」と「丸に平四つ目」にこの文様がもてはやされたようです。

【お詫びと訂正】

既にお気づきの方もおられると思いますが、今回、系譜・家紋紹介欄の連載番号はNo.9となっております。前号の菊間二神氏がNo.7なので本来ならばNo.8とならなければなりませんでした。ところがこれまでに本欄で取り上げた系譜は前回までに8系譜あり、小川二神氏は9系譜目と云うことになります。調査したところその原因は連載初めの頃にありました。第1回本島二神氏・土井二神氏、第2回吉木二神氏を取り上げたまでは良かったのですが第3回余戸二神氏を取り上げたときにNo.2と連載番号を誤って打ち、未確認のままその後通し番号を重ねていったのが誤りの原因です。従って今回から正規のNo.9に戻し、第3回の余戸二神氏以降の連載番号をNo.3からに訂正してください。大変ご迷惑をお掛けし、申し訳ございませんでした。

連載第8回・二神氏と苗字の歴史

編 集 部

前回は「二神の苗字が頼り、幼少期に別れた母を探す人」の題で滋賀県在住のMさんの実例をご紹介しましたが、今回は第1回で取り上げた「明治新姓の時代」を再度振り返り、最近「小川大森文書」から偶然発見された「小川二神氏」系譜の二神鉄蔵（嘉永3年2月12日生）を取り上げて見ました。

「国民皆苗」は徵兵、徵税が根底に

第1回目の本欄で取り上げたのは、①明治3年9月4日、農民、町民も苗字を許す太政官布告で基本的には皆苗になったこと②明治4年4月に戸籍法が出され③明治5年2月戸籍法が施行（壬申戸籍）されたこと④明治5年5月には通称名、実名の併用禁止、単名の採用発令⑤明治8年2月に苗字必称令が出され、全国民は苗字を名乗ることを義務化されたこと。

ということでした。総ての国民が苗字を名乗るのに5年間も歳月がかかったのは苗字を名乗らせようとする明治政府の目的が、徵兵と徵税にあったためでした。本来ならば江戸時代に苗字を名乗れず、密かに墓石に彫り込んだり、寺社の寄進帳に書き込んだりして、苗字が公称できる日を待ち望んでいたはずが、そのようにならなかつたのは、政府の目的に対して5年間の抵抗をしたためです。明治5年（1872）にはじまる戸籍制度（壬申戸籍）の制定によって、それまで名字をもたない者が新たに名字を用いるようになりました。この時期にできた名字のことを「明治新姓」と呼びます。

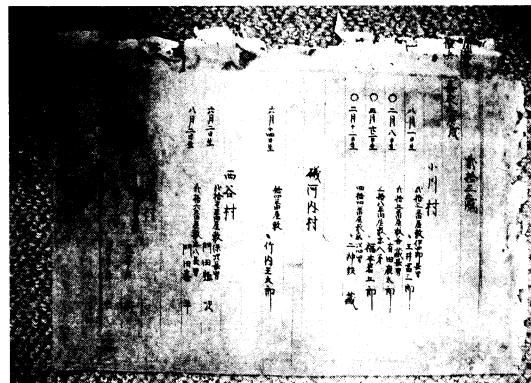
このようにして明治時代が始まりました。

「小川大森文書」から「徵兵検査下調査文書」を発見

一方、明治5年11月28日付けで徵兵令が出され、愛媛県では「徵兵適齢者調査」など徵兵検査の下調査を始めたのが、明治6年5月20日からのことで、区長、戸長を通じて伝達がありました。

当時、風早郡小川村の戸長をしていたのは大森氏ですが、その「小川大森文書」から最近、「徵兵検査下調査文書」が発見されました。

(写真①) その中に小川二神氏岡ノ谷中家二神家の二神鉄蔵に関するものがありますので紹介します。二神鉄蔵は父二神為次の四男として嘉永3庚戌年2月12日に伊予国風早郡小川村四拾四番屋敷で生まれました。小川村でこの年生まれた男は他に、玉井富三郎、有田鹿太郎、福本岩五郎の4名でした。この事については本稿の目的ではないので別の機会に触れて報告を試みたいと考えていますから詳しくは述べません。が、先述のように徵兵令公布による徵兵適齢者調査の実施が愛媛県では明治6年(1873)5月20日以降直に行われましたから、今回発見された「徵兵検査下調



①小川村、二神鉄蔵ら4名の徵兵検査下調査文書（嘉永3年）



②徵兵検査下調査文書（嘉永4年）

査文書」が作成されたのはこの年の後半以降であったことが判ります。この時期は藩政時代からの諸制度が大きく変更、改正されようとし、様々な動きがあった時代で、明治5年2月に戸籍法が施行(壬申戸籍)されたものの、新しい制度はなかなか国民の間に浸透しませんでした。

「徵兵検査下調査文書」には嘉永3年（1850）生まれの小川村、二神鉄蔵ら4名の他、他部落の人物も多数記載されています。また、嘉永4（1851）、安政元（1854）、安政2（1855）年、安政6（1859）年生まれなど、当時20歳以下であった者まで調査対象とされていたことが判ります。（写真②）

「徵兵検査下調査文書」から見える明治新姓の実情

この時二神鉄蔵をはじめ、嘉永3年小川村生まれの4名は満23歳でしたが、全員苗字が付けられています。

（写真③）藩政時代の「小川大森文書」には苗字が記載されていませんが、少なくとも明治3年9月4日に国民に苗字を許す太政官布告が出されて以後の文書には苗字が付けられており、伊予国風早郡小川村の村人は藩政時代に苗字を持っていて「明治新姓」即ち、明治8年2月の「苗字必称令」に関わった系譜はなかったのではないかと考えられます。小川村には文政4年（1821）の村地図が残されてありますが、それにはそれぞれ31軒の住居が記載されており、二神鉄蔵が生きた時代とそれほど世帯の変化はありません。

この時23歳だった二神鉄蔵はその後「岡ノ谷中家二神家」を継いだ兄の二神増太郎を助け、弘化4年生まれの兄、甚五郎などと共に農事に勤しんでいましたが、明治22年（1889）12月16日、折しも元庄屋大森家の新



築の際、高所作業中に落下し死去しました。享年40歳 二神鉄蔵の事故死を悼み大森家では墓石を建て手厚く供養したと伝えられています。
(岡ノ谷中家二神家当主 二神敬二郎氏談)

二神鉄蔵は多くの小川二神氏岡ノ谷中家二神家先祖と共に同家墓地で永い眠りについています。

小川大森文書

2001年（平成13）12月、旧小川庄村屋であった大森家の屋敷から発見され、2002年（平成14）春から愛媛大学寺内研究室の指導のもと北条ふるさと館で解体作業が継続されてきました。

旧小川庄村屋であった大森家は「太平記」に登場する湊川の合戦で楠木正成を敗死させた大森彦七の子孫が16世紀末に風早郡小川村に移り、藩政時代を通じ庄屋としてこの地域を治めてきました。その屋敷は近年無人となっていましたが 屋敷に残る襖から下張りに使用された古文書類が発見されていました。それを2001年末に、北条ふるさと館に持ち帰り、倉庫で保管していたもので、最近になって風早歴史文化研究会などの手によって襖からの剥がし作業が完了していました。この「大森家襖の下張り文書」には二神氏がかつて居城した宅並城の麓の村である小川村に関する幕末から明治初期の同村に関する事項が記録されており、小川二神氏に關係するものも発見される可能性を持ったもので、関係者の期待が寄せられています。愛媛大学寺内研究室での取材調査は終了していますが、解明調査はまだ進んでいません。

特集「二神会 7年の航跡」

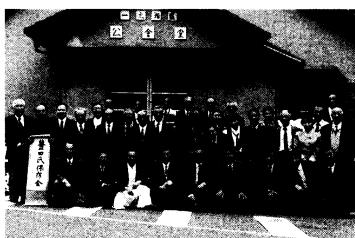
1 7年間のあゆみ

編 集 部

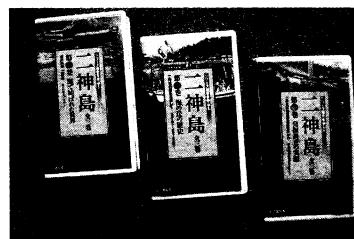
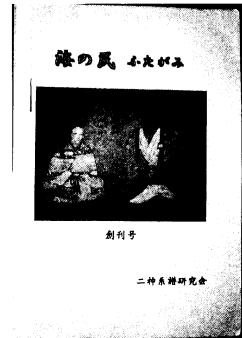
二神系譜研究会の航跡

2000（平成12年）

- 3月8日 神奈川大学日本常民文化研究所による二神家墓地発掘調査が21日までの日程で開始される。二神家種の墓石が特定される。
- 3月12日 愛媛県北条市ふるさと館にて二神の系譜を研究するための準備会の総会に続いて、
正式な会に移行。「二神系譜研究会」発足
- 3月18日 二神島二神本家の墓地調査
の現地説明会。第1回常任理事会：民宿西野
- 3月31日 **研究会速報No.1 発行**
- 4月15日 山口県豊田町一ノ瀬での
「豊田種長追善供養祭」に
17人が参加
- 5月30日 第2回常任理事会。**研究会
速報No.2 発行**
- 6月4日 関東支部結成総会：日本離島センター会議室
- 6月18日 中部・関西支部総会：サニーストンホテル（吹田市）
- 7月1日 会報創刊号編集委員会

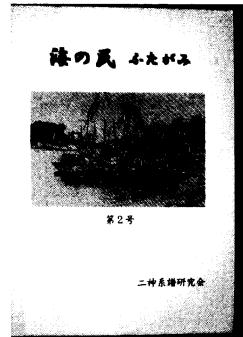


- 7月8日 第3回常任理事会
- 7月15日 研究会速報No.3発行
- 7月20日 二神島交流会案内状の発送
- 7月31日 系譜調査書一次集約
- 9月1日 **会報「海の民ふたがみ」創刊号発行。**
大内義隆公450回忌法要が北条市法善寺で営まれる。
- 9月3日 常任理事会
- 9月9日 第2回二神島交流会：二神島
- 9月10日 **速報No.4発行。** 第1回全国理事会。
中島町総合文化センターで文化講演会「二神家墓地調査から見えてきたこと」講師：橋川俊忠・田代郁夫
- 10月24日 岩波書店発行の「ものがたり日本列島に生きた人たち」で二神系譜研究会の活動を網野善彦氏が紹介。
- 11月 シリーズ歴史を学ぶ「二神島ビデオ全3巻」(紀伊国屋書店)が完成
- 11月7日 来年秋の豊後森二神氏隨行
400年記念学習交流会に向けて、現地訪問。
- 11月30日 北海道佐呂間町在住の二神氏系譜、東予二神氏と判明
- 12月5日 **速報No.5発行**
- 12月8日 会報第2号の取材で北条市の客・中西の二神氏墓地を調査
- 12月16日 「二神島」ビデオの案内書を発送
- 12月22日 本島二神氏が所有した古銭の件で愛媛県歴史文化博物館に調査を依頼

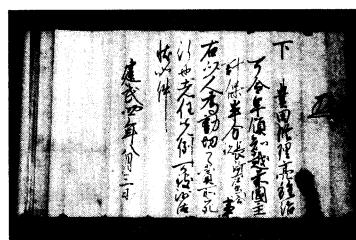
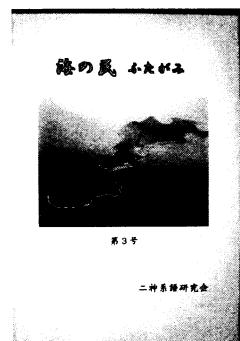


2001（平成13年）

- 1月9日 第6回常任理事会
- 1月14日 中部・関西支部理事会：京都
- 1月30日 本島二神家伝承古銭の件の回答が届けられる。
- 2月1日 **会報第2号発行**
- 2月12日 第7回常任理事会。
- 2月23日 総会での記念講演、愛媛県歴史文化博物館の石野弥栄氏に決定。
- 2月28日 「二神島」ビデオ好評につき、第2次販売を4月30日まで延長。
- 3月11日 東京八王子市にある久留島家で、来島通康から二神左馬助（康種）宛ての書状写し発見。
- 3月12日 全国水軍サミットへの招待を受ける
- 3月14日 神奈川大学日本常民文化研究所による二神島調査団が20日まで来島。二神庄屋屋敷跡の確定のためのトレーニング調査。
- 3月16日 二神島集会所で、「二神島」ビデオを上映。島民に好評。
- 3月18日 二神古文書学習会：松山市道後の子規記念博物館。愛媛大学の田村憲治教授が「片山二神古文書」の内容を解説。
- 4月7日 第8回常任理事会
- 4月10日 **速報No.6発行**
- 4月15日 第2回全国水軍サミットに初参加：北条市鹿島。水軍船曳き合戦にも出場。
- 4月20日 「玖珠町史」の刊行案内を受ける。
- 4月21日 総会の前夜祭：国際ホテル松山
- 4月22日 2001年度総会：北条市ふるさと館。26日の愛媛新聞で報道される。



- 5月5日 「Kurusima Times」第5号の送付を受ける。
- 5月14日 玖珠町郷土史家梅木金治氏あてに、「二神氏学習交流会 in 豊後森」開催の協力依頼を発送。
- 5月22日 愛媛新聞の「愛媛偉人伝」No.53で、城辺二神氏出身で幕末から明治時代に活躍した二神深蔵（会報第2号P69参考照）が紹介される。
- 5月31日 **速報No.7発行**
- 6月9日 第1回常任理事会
- 9月9日 学習交流会 in 豊後森：大分県玖珠町
- 会報第3号発行**
- 10月21日 豊田種治宛の正文と伝えられる「足利尊氏の下し文」の発見で、愛媛県周桑郡綾延神社元宮司豊田栄年氏（97歳）を訪ねる。
- 11月5日 豊後森より、二神種親が供養した寛文7年正月18日の日付が入った厨子が安楽寺から発見されたとの連絡あり。また、奉納した天神様もみつかっているとのこと。
- 11月10日 **速報No.8発行**
- 11月11日 中部・関西支部総会：サニーストンホテル
- 11月14日 会報第3号、速報No.8会員などへ送付。
- 11月17日 愛媛県歴史文化博物館の石野弥栄氏より、「豊田種治に知行した越前国主計保について、知行を解除したときの



文書が比叡山関係の文書から見つかっている」との連絡あり。

- 11月24日 風早歴史文化研究会の新田敏郎常任理事から、二神水軍小早舟のミニチュアの寄贈を受ける。
- 11月27日 大分県九重町竹野孝一郎氏より「肥後国へ移った豊後森二神氏の調査中、熊本市内に系図・古文書を所持する二神氏が存在している」との情報あり。
- 12月18日 第3回常任理事会

2002（平成14年）

- 1月20日 「第2回全国水軍サミット」の開催で「北条を愛する会」と打ち合わせ。

会報第4号編集委員会：松山観光港

- 1月22日 愛媛新聞の「愛媛偉人伝」No.147で、城辺二神氏出身の歌人・二神永世（本名：二神綱定1790-1854）が紹介される。

- 1月31日 速報No.9発行、総会案内状と共に発送。

- 2月13日 会報第4号編集委員会：愛媛大学図書館

- 3月1日 会報第4号編集委員会：松山観光港

中部・関西支部理事会：京都京阪ホテル

- 3月10日 第3回全国水軍サミットの案内状送付される。12日まで3日間の日程で神奈川大学日本常民文化研究所調査団二神島来島し、由利島も調査。



- 3月23日 風早郡小川村庄屋大森家襖の下張り文書の調査始まる。

- 3月31日 畑中二神文書4巻が完成

- 4月12日 道後湯築城跡公園が開園

- 4月13日 第3回常任理事会：愛媛ソフトウェアサービス事務所

- 4月14日 **速報No.10発行**
- 4月21日 **会報第4号発行。特集：豊後森**
- 4月28日 2002年度総会：北条ふるさと館
- 4月29日 第3回全国水軍サミットに参加
- 5月12日 第1回常任理事会：事務局長宅。速報・臨時号発行
- 5月27日 山口県豊田町の田中鉄蔵氏より「足利尊氏下し文」の発見について、「豊田町文化財審議委員会」へ報告との連絡入る。
- 6月23日 第2回常任理事会：愛媛ソフトウェアサービス事務所
- 6月26日 愛媛県歴史文化博物館の石野弥栄・土居聰朋両氏が、愛媛県周桑郡丹原町の綾延神社元宮司豊田栄年氏を訪問し、「足利尊氏下し文」の再調査。
- 7月11日 愛媛県歴史文化博物館より「しまなみ水軍浪漫のみち文化財調査報告書」送付される。
- 7月13日 中島町教育委員会主催の屋代島探訪に参加。沖家室訪問。
- 7月24日 **速報No.11発行**
- 7月28日 第12回河野氏関係交流会：北条ふるさと館
- 8月25日 第3回常任理事会：愛媛ソフトウェアサービス事務所
- 8月31日 第3回二神島交流会前夜祭：民宿西野
- 9月1日 第3回二神島交流会：二神集会所（講師 橋川俊忠、関口博臣両氏）
- 9月20日 道後・湯築城が国史跡指定、官報告示される。
- 9月23日 福川一徳顧問より、「福岡藩分限帳」の内の「寛文官録」の送付受ける。二神九太夫（嘉林・豊後森の林二神氏系譜）の名前が記載
- 10月27日 湯築城シンポジウムが開催される。
- 10月31日 第4回常任理事会：愛媛ソフトウェアサービス事務所
- 11月9日 二神氏学習交流会 in 小才角前夜祭：ベルリーフ大月

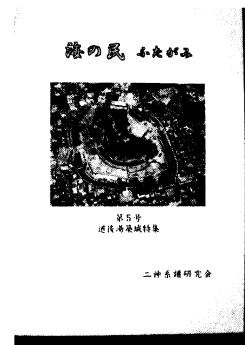
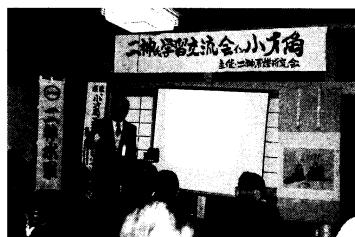


- 11月10日 二神氏学習交流会 in 小才角：二神明義宅
- 11月10日 **速報No.12発行**
- 12月13日 会報第5号編集会議
- 12月20日 二神水軍紹介「瀬戸内水軍歴史散歩」(山川出版)刊行
- 12月24日 **速報No.13発行**



2003（平成15年）

- 3月4日 大分県九重町の竹野孝一郎氏より二神修理進瑞庵についての情報が入る。
- 3月14日 風早郡小川庄村屋大森家襖からの剥がし作業終了。
- 3月25日 二神利絵氏（弘前大学医学部5回生・吉木二神氏）が先祖の地をたどる。25日道後泊、26日二神島泊、27日松山泊。
- 4月1日 2003年度総会の案内状を会員に送付。
- 4月6日 中部・関西支部理事会開催：京都京阪ホテル
- 4月20日 **会報第5号発行。特集：道後湯築城**
第3回常任理事会：愛媛ソフトウェアサービス事務所
- 4月23日 来島会の「Kurusima Taimes」第9号の送付を受ける。
- 4月30日 **速報No.14発行**
- 5月2日 第4回全国水軍サミット前夜交流会：北条市青少年スポーツセンター



- 5月3日 第4回全国水軍サミット。二神系譜研究会前夜交流会：
J A Lシティ松山
- 5月4日 2003年度総会、第1回常任理事会：北条ふるさと館
- 5月7日 別府市在住の二神末次三理事に、豊後森藩主久留島通嘉
が開き今春再建された「照湯」の取材を依頼
- 5月11日 福川顧問より関が原合戦当日の村上武吉の書状発見につ
いての連絡に入る
- 5月12日 横浜在住の二神和子氏より「ルーツ」と題した原稿が届
く。
- 5月15日 二神将（ニカミススム）氏より問い合わせに対する返書
が届く
別府市在住の二神末次三理事に、天正14年の九州島津攻
めに際し、戸次川の戦いで戦死した土佐長曾我部信親の
慰靈碑の取材を依頼
- 5月31日 **速報No.15発行**
- 6月6日 斎藤文嗣氏より「曾祖父二神寛治について教えてくださ
い」のメール届く
- 6月15日 第1回常任理事会
- 6月22日 第3回中部・関西支部総会開催：奈良市内奈良学セミナ
ーハウス
- 6月29日 中部・関西支部理事会：京都京阪ホテル
- 7月8日 「芸予地震被災資料救出ネットワーク愛媛」総会
- 7月12日 村上武吉没後400年記念能島水軍サミット参加。福川顧
問と懇談
- 7月27日 第13回河野氏交流会が北条ふるさと館で開催
- 7月29日 中田和邦氏より「二神種秀、二神種治の名前が入った赤
間硯を発見」との連絡に入る
- 7月31日 **速報No.16発行**
- 8月9日 芸予地震被災資料救出ネットワーク愛媛主催による「市

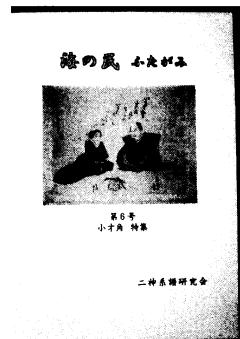
町村合併と行政文書の保存」についての学習会出席：愛媛県歴史文化博物館

- 8月17日 常竹二神氏伝来の文書や多数の伝来品を発見
- 8月18日 「Kurusima Taimes」第10号の送付を受ける
- 8月23日 福川一徳顧問、四国中世史研究会に出席のため来県、道後にぎたつ荘で懇談
- 8月29日 第2回会報第6号編集会議、巻頭言などの執筆者確定
- 9月13日 第3回会報第6号編集会議、小才角二神系図の印刷を協議
- 9月19日 第4回会報第6号編集会議、発効日の2ヶ月延長を決定
- 9月28日 山口県豊田町の田中鑛蔵氏より硯師の鈴木資之についての情報が届くが該当者なし
- 10月19日 風早地方の古文書整理講習会開催：北条ふるさと館
- 10月20日 横浜の二神照夫・和子夫妻が墓参で松山を訪問
- 10月28日 二神寿弘監事より、北方二神氏の小学校習会について、北方二神氏宗家二神光行氏と打ち合わせができたとの報告あり
- 11月2日 「伊予の姓氏」（愛媛文化双書刊行会発行）に「フタカミ」と誤って照会されているのを発見し、伊予史談会へ訂正の旨を要請
- 11月10日 会員の斎藤文嗣氏より、二神寛治は余戸二神氏の出身であることが判明したとの連絡あり
- 11月12日 第5回会報第6号編集会議
- 11月15日 横浜の二神照夫氏より調査依頼のあった祖父二神正近氏を長年供養してきた松尾氏のご子孫が判明、連絡がとれる。
- 11月16日 愛媛県教育委員会主催の「湯築城シンポジウム」湯築城をとりまく西瀬戸の戦国群像～河野氏・大内氏・大友氏の活躍とその遺跡～出席

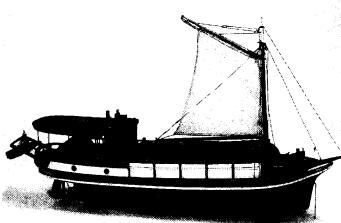
- 11月21日 第6回会報第6号編集会議、今年中の発行が難しくなり、速報第17号を2004年元旦号として発行することに決定
- 11月29日 愛媛大学公開シンポジウム「四国遍路と世界の巡礼」出席
- 12月12日 常竹二神氏墓地で、片山墓地にある仙窓理心大姉（二神通範夫人）の五輪墓石と同型の五輪墓石を発見
- 12月19日 今治市の常竹二神氏宗家文書、過去帳など取材、調査
- 12月28日 第1回常竹二神氏系譜懇談会開催

2004（平成16年）

- 1月1日 速報No.17発行
会報第6号発行。特集：小才角
- 1月6日 常竹二神氏の菩提寺、法善寺を訪ねて調査を依頼。
- 1月9日 常竹二神氏墓地調査で石工の鍋屋正一氏と懇談。
- 1月11日 中部・関西支部理事会開催：京阪ホテル
- 1月13日 景浦勉氏ご逝去。15日の葬儀に参列
- 1月14日 寿弘監事と北方二神氏ミニ学習会開催の打ち合わせ。袖山俊夫氏に「常竹二神文書」の解読を依頼
- 1月16日 芝不器男の研究家谷明子氏より「城辺二神氏」についての問い合わせ。
- 1月17日 川岡勉氏より会報第5号掲載の原稿を他誌へ使用する件で連絡あり。
- 1月18日 「南宇和民俗歴史文庫」藤田儲三氏に芝不器男の父来三郎の件で連絡する。
- 2月1日 第3回常任理事会
- 2月13日 東予二神氏出身大阪府高槻市在住の会員二神喜久雄氏が



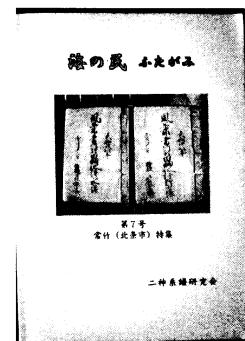
- 系譜調査で事務局訪問。
- 2月15日 日蓮宗法善寺開祖「豊田幾之進350回忌法要」嘗まれ参加。
- 2月21日 「神戸商船大学海事資料館」で戦前の機帆船模型「二神丸」発見。
- 2月23日 弘前市在住の二神真行氏（吉木二神氏）入会。
- 2月27日 歴史研究家・網野善彦氏ご逝去（76歳）。弔電を発信。
- 3月2日 東温市北方ヘミニ学習会準備のため、岡之坊の神野住職を訪ね調査
- 3月3日 「小川大森文書」を取材し、北条市立ふるさと館で写真撮影。
- 3月14日 北方二神氏ミニ学習会開催：愛媛県温泉郡川内町北方宝泉集会所



- 3月28日 中部・関西支部理事会：京都市京阪ホテル
- 4月3日 「常竹二神文書」の解読資料が柚山俊夫氏から送付される。
- 4月4日 横浜市在住の会員、二神照夫氏ご夫妻がご兄弟三夫婦と帰郷し墓参。
- 4月8日 「風早歴史文化研究会」竹田会長が、常竹二神氏の墓地調査を実施。翌日、関連調査で法善寺を訪問。
- 4月10日 第4回常任理事会
- 4月17日 2004年度総会前夜交流会開催：チサンホテル松山
- 4月18日 2004年度総会。速報No.18発行。
- 5月4日 第5回全国水軍サミット・船曳き合戦：北条鹿島ほか

- 4月30日 二神靖夫氏から入会申込み書届く
- 6月5日 常竹二神文書関連で法善寺へ問い合わせ。愛媛資料ネット総会出席
- 6月6日 高浜二神氏の二神利孝宅を調査準備で訪問
- 6月18日 神奈川大学図書館よりビデオ「二神島 海の民の歴史」の上映会と講演を開催したいとの申し入れ
- 6月20日 第1回常任理事会開催
- 6月26日 「網野善彦さんを語る会」(愛媛新聞社主催)に出席
- 7月1日 「えひめ名字の秘密」アトラス出版・土井中照著刊行
- 7月14日 愛媛大学の寺内教授から北条ふるさと館に保管中の「小川大森文書」について、夏休み中に整理をする旨連絡
- 7月17日 愛媛古文書研究会の柚山俊夫氏から、すでにお願いしていた常竹二神文書原本の本格調査を夏休み中にするとの連絡
- 7月18日 河野氏十八将の正岡氏一族の会が発足
- 7月19日 神奈川大学図書館主催のビデオ「二神島 海の民の歴史」の上映会と講演を開催
- 7月26日 二神勉氏より事務局へ入会の問い合わせ
- 7月27日 愛媛大学寺内氏より、襖の下張り文書調査の連絡が入る
- 7月30日 高浜二神氏の二神利孝氏より入会申込書が届く
- 7月31日 「Kurusima Times」第12号送付される
- 8月11日 猛暑により事務局のパソコンがダウン
- 8月18日 常竹二神氏の宗家と大谷家へ古文書調査を連絡
- 8月19日 「Kurusima Times」第13号送付される
- 8月23日 河野修興氏より入会申込み書届く
- 8月24日 柚山俊夫氏が常竹二神氏の大谷家へ古文書調査で訪問取材。常竹二神氏の宗家文書借用のため今治市の宗家を訪問。第2回編集会議開催
- 9月4日 第2回常任理事会、第3回会報編集会議

- 9月6日 常竹二神氏の古文書調査で柚山氏と懇談
- 11月15日 第4回会報編集会議
- 12月 **会報第7号発行。特集：常竹（北条市）**
- 11月28日 第3回常任理事会
- 12月23日 高浜二神氏の系譜調査、墓地、過去帳、位牌、文書を取材



2005（平成17年）

- 1月26日 太田安雄さんから「太田雄寧傳」送付される。二神弘さんから「続・地理学を学ぶ」のコピーが送付される
- 1月30日 第4回常任理事会開催
- 2月17日 **速報No.19発行**
- 3月1日 事務局のプリンター故障。
- 3月20日 第5回常任理事会開催
- 4月4日 豊田町吉本前町長、白石区長さんたちと供養祭の件で打ち合わせ
- 4月9日 2005年度総会：山口県一の俣温泉グランドホテル、**速報No.20発行**
- 4月10日 「豊田氏慰靈5年祭」に出席：一ノ瀬薬師堂
- 4月22日 第1回会報編集会議
- 4月30日 第1回常任理事会
- 5月3日 第6回全国水軍サミット・船ひき合戦開催：北条鹿島
- 5月17日 西南四国歴史文化研究会の安岡道雄氏から「西南四国と中世宝篋印塔」の論文の送付を受ける
- 5月18日 中部・関西支部理事会：京都京阪ホテル
- 5月20日 二神宏介理事から「おじさんの青春日記～その3～」お好み焼き「風月」の送付を受ける
- 5月21日 **速報No.21発行**

- 5月22日 二神勘昭理事から西条二神氏の居住する地域にある「二神山」の調査をはじめ、西条二神氏の系譜調査及び学習交流会の開催について、地元自治会が同意した旨の連絡が入る。
- 6月2日 滋賀県栗東市の向井氏から尋ね人「二神和子」についての連絡が入る
- 6月6日 第2回会報編集会議：アイテムえひめ「東雲」
- 6月9日 菊間二神氏系譜調査のため風早歴史文化研究会竹田会長と菊間町河之内を訪問
- 6月12日 上ノ谷二神氏の戦没者関係の墓石調査を実施
- 6月18日 愛媛資料ネットの総会に出席。
- 6月26日 会報第8号編集のため中西二神氏取材
- 6月30日 第3回会報編集会議：アイテムえひめ「東雲」
- 7月9日 第4回会報編集会議：アイテムえひめ「東雲」
- 7月11日 第5回会報編集会議：アイテムえひめ「東雲」
- 7月23日 愛媛資料ネット主催の「戦後60年戦争資料展」：愛媛大学。二神氏からも関係資料を展示（～25日）
- 8月 会報第8号発行（800部）。
特集：太平洋戦争と二神氏、
豊田氏慰靈の五年祭
- 8月2日 第6回会報編集会議
- 8月6日 第2回常任理事会：愛媛SS
- 8月11日 愛媛古文書研究会の柚山俊夫氏から「大山寺二神氏」関係資料の送付を受ける
- 8月31日 愛媛古文書研究会の柚山俊夫氏から「片山二神文書」第23、第24の現代



文への翻訳文の送付を受ける。

- 9月16日 **速報No.22発行**
- 12月24日 第4回常任理事会：愛媛ソフトウェアサービス事務所
- 12月27日 常任理事会から会員に年賀状発送（182枚）
- 12月31日 「豊田氏保存会」会長磯部完治氏ご逝去

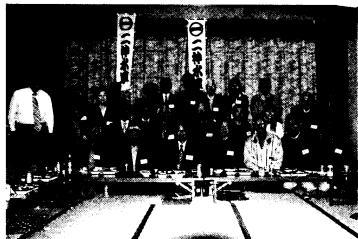
2006（平成18年）

- 1月3日 「豊田氏保存会」会長磯部完治氏の告別式
- 1月12日 旧満ソ国境「我が避難の記」の著者二神守氏からの入会申込み
- 1月22日 松山市主催の文化講演会「松山は海をもった」講師・早坂暁氏：北条市民会館
- 1月29日 中部・関西支部理事懇談会：O C A T 梅の花店
- 2月3日 正岡系属研究会（正岡会）から同会発足記念誌「正岡一族」（B5版、159ページ）を10部進呈される。
- 2月5日 二神氏3代目の二神直種を河野氏の家臣団に呼びかけた河野通堯（天授5年11月6日佐志久原の合戦で戦死）の墓石を愛媛県西条市の現地に取材。
※佐志久原は現在の愛媛県西条市（旧東予市）
- 2月16日 西南四国歴史文化研究会の安岡道雄氏から、宇和島市内で発見された応永4年（1397）正月銘の入った「双式板碑」の関係資料が送付される。
- 2月17日 柳原（土居）二神氏の屋敷内にあった「北門」の写真や関係史料が発見され取材入手。それによれば、「二神城」と呼ばれた柳原二神氏の居住区域は、これまで想像されていた約4倍の広さに及ぶことが判明。
- 2月17日 伊能忠敬が、文化5年6月に小才角を、8月に二神島を測量調査で訪れたときの測量日記のコピーを入手
- 2月24日 2006年度総会の案内状発送

2月27日 速報No.23発行

- 2月28日 豊田渉常任理事、神奈川大学日本常民文化研究所を訪問
- 3月2日 中部・関西支部、二神大輔氏の扱いについて連絡あり
- 3月4日 第5回常任理事会：愛媛ソフトウェアサービス事務所
- 3月7日 風早歴史文化研究会から会報「風早」の創刊号からのバックナンバーの送付を受ける。
- 3月9日 二神大輔氏の会費未納問題で「会費納入記録」の全調査実施。
- 3月10日 山口県豊田町の田中鉱蔵氏から、豊田種治に関する情報の送付を受ける
- 3月11日 奈良市の二神栄三氏より「明日、大輔氏と話し合いを持つ」との連絡あり
- 3月12日 宇和島市下波東で発見された双式板碑を現地取材調査
- 3月17日 「二神大輔氏の会費納入経過についての顛末書」を関係者に送付
- 3月22日 北条郵便局に開設中の「二神氏の系譜を研究するための準備会」口座を閉鎖し、新たに「二神系譜研究会」の普通預金口座を開設。
- 3月26日 安岡道雄氏より「本日、下波東の双式板碑を松山市の十亀幸雄氏が現地調査した」との連絡あり
- 3月29日 豊田町の白石区長より「総会に元吉本町長と出席」との連絡あり
- 4月2日 会報第9号編集企画発表、特集「二神会7年の航跡」
- 4月3日 「Kurushima Times」第14号の送付を受ける
- 4月4日 2005年度の会計監査を会長宅で実施
- 4月9日 第6回常任理事会：愛媛ソフトウェアサービス事務所
- 4月22日 2006年度総会前夜交流会
- 4月23日 2006年度総会（二神島では初めての総会）
- 5月21日 第1回常任理事会：アイテム愛媛

- 5月22日 「文化愛媛No56」に「二神島新説」中田和邦論文が掲載される。
- 5月25日 石野弥栄氏から湯築城資料館館長就任のあいさつ
- 6月3日 愛媛資料ネット2006年度総会開催：愛媛大学法文学部
- 6月15日 湯築城資料館石野館長と懇談会
- 6月22日 余戸二神氏系譜の松下邦栄さんから入会申し込み
- 6月23日 湯築城資料館ボランティアガイド研修会下見の田中弘道氏を風早地区河野氏の史跡に案内する。29日も。
- 6月25日 藤沢市の今村武彦氏より「伊予今村家物語」の恵贈を受ける。
- 6月29日 大三輪龍彦鶴見大学教授ご逝去。弔電を発信。7月9日鎌倉市の自宅（浄光明寺）でご葬儀。
- 7月16日 湯築城資料館ボランティアガイド研修会一行19名を風早地区の河野氏史跡にご案内。
- 7月23日 小川二神氏の二神浅信氏から「二神氏の由来」「靈標記」についての監修依頼。
- 8月21日 一本松二神氏の二神英輔氏から入会申込み
- 9月15日 第2回常任理事会：道後湯築城資料館研修室
- 9月22日 来島保存顕彰会会報「くるしま」第9号の送付を受ける。
- 9月30日 朝鮮半島の珍島に眠る来島水軍兵士の墓参報告：波止浜公民館
速報No.25発行
- 10月9日 安岡道雄氏、二神島の墓地調査を実施



二神の系譜を研究するための準備会に至るまでの経緯
(1994~1999.2)

年月日	内 容	関係者
1994（平成6年）までの動き	「東京二神の先祖を語る集い」など、各地・各家譜等で調査、研究、行事等が行われている。 「九州二神会」お正月などに集まっていた。	二神 康郎 二神各系譜 二神 光次
1995（平成7年） 8月1日	二神島で「二神島シンポジウム」が開かれ、神奈川大学の網野善彦教授による「二神島の調査から見えてきたもの」と題する講演に参加	二神泰次郎 二神 浩三 二神 俊一 豊田 渉
9月10日	山口県豊浦郡豊田町一ノ瀬における豊田種長追善供養が開かれ、東京・広島・松山から二神氏12名が出席する。 (出席者) 二神重成・二神和吉・飯田多佳子・二神啓輔（以上、城辺二神氏）二神種弘・二神雄彦（以上、吉木二神氏）二神興三郎・二神慶子・二神舜子（以上、片山二神氏）二神勘昭（広島西条二神氏）二神浩三・二神俊一（畠山二神氏）	
1996（平成8年）11月	松山市平井町の二神重則氏、インターネットに「二神氏」のホームページを開設する。	二神 重則

1998（平成10年） 3月25日	九州の大学に在学中の二神英臣氏の長男から「二神氏のことについて調査をしている二神さんが松山にいる……」との連絡があり、重則氏のホームページを印刷したものを作成して送付してくる。	二神 英臣
6月27日	重則・英臣両氏による初めての懇談が行われ、協議の結果「二神氏の系譜を研究するための準備会」（仮称）起草委員会をつくり、具体的に活動を進めていくことになる。	二神 重則 二神 英臣 (以下、起草委員会)
7月25日	「二神氏の歴史」をはじめ各種の史資料を作成する一方で、ホームページにも「準備会」のコーナーを設定。全国の二神氏の名簿を作成する。	起草委員会
8月22日	第2回起草委員会。この間、二神啓輔氏（城辺二神氏）と連絡がとれ、95年に豊田町に行った二神氏の名前が判明。「二神氏と宇佐八幡宮」についての調査を行う。	起草委員会
9月16日	二神武信氏（菊間二神氏）ら3名より連絡が入り、懇談の結果、調査に協力いただくことになる。	二神 武信 二神 昌生 佐々木種広
9月16日	第3回起草委員会。全国と地域の取り組みについての確認。二神氏の名前文化の	

	代表である「種」のつく二神さんへの手紙、史資料の送付を決める。	
10月10日	松山市津吉町の二神種興氏より連絡が入り、懇談の結果「津吉二神系図」をお預かりする。	二神 種興 二神 種龍
10月17日	札幌の二神種臣氏（吉木二神氏）より連絡が入り系図の送付を受ける。	二神 種臣
10月24日	愛知県日進市の二神弘氏（吉木二神氏）と連絡がとれ系譜の解明が大きく前進。 (※11月21日にハガキが届く。)	二神 弘
10月26日	北条市府中の二神昇氏と連絡がとれ、かつて二神城と呼ばれた土井二神氏の屋敷跡を確認。	二神 昇
10月28日	二神舜子・二神興三郎氏（片山二神氏）と連絡がとれ、片山二神氏の墓地を確認。	二神 舜子 二神興三郎
10月29日	大分県玖珠町、愛媛県東予市、高知県檮原町の二神氏に手紙、史資料を送付する。	
10月29日	高知県宿毛市の二神政幸氏（小才角二神氏）から連絡が入り、城辺二神氏からの分かれであることが判明。「小才角二神氏系図」の送付を受ける。	二神 政幸

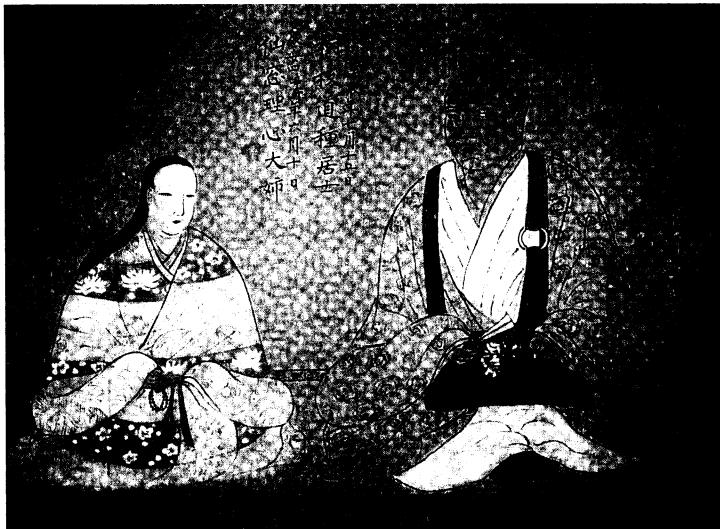
10月30日	愛媛県東予市の二神直昭氏から「曾祖父の代に徵兵忌避のために二神氏を名乗ったと聞いている。」との証言を得る。	二神 直昭
下旬	二神各氏から、共に調査を進めることの反響があいつぐ 豊田氏の研究をされている島根県津和野町出身の豊田氏より史資料の送付を受ける。	二神 敬三 二神日満男
11月1日	東京の二神重成氏（城辺二神氏）との連絡が取れる。豊田町へ追善供養に参加した二神浩三氏、二神種弘氏、二神興三郎氏、二神舜子氏と懇談が実現。このとき九州二神会の代表が二神光次氏（余戸二神氏）であることが判明。	二神 重成 二神 和吉 二神 光次
11月1日	第4回起草委員会。99年2月14日に二神氏の第二の故郷ともいえる愛媛県北条市のふるさと館で「準備会」をスタートさせることに決定。	起草委員会
11月16日	香川県綾歌町の二神正国氏（東予二神氏）から連絡が入り「私たち二神氏の関係が解りますことを心待ちにしております」との手紙を受ける。正国氏の姪で奈良県の二神薰氏からメール届く。	二神 正国 二神 薫

11月20日	愛媛県南宇和郡一本松町の二神國廣氏（城辺二神氏）と懇談し、同時に二神朗、二神昭両氏の紹介を受ける。	二神 國廣 二神 朗 二神 昭
11月15日	ニュース第1号発行	
11月23日	全国の二神氏の情報が次々届けられる。風早二神氏のうち二神正彦氏（常竹二神氏）を訪問し史資料を提供いただく。この地方の流れの解明が前進。	二神 正彦
11月28日	名古屋市の二神道子氏よりメールが入り「ホームページを見た。調査に協力したい」とのこと。ご主人の二神亮郎氏、小才角二神氏出身であることが判明。系図の送付を受ける。	二神 道子 二神 亮郎
11月30日	二神島本家二神司郎氏に会の案内など資料送付。高知県檮原町の二神さん5軒、愛媛県温泉郡川内町北方の二神さん13軒にも送付。	
12月1日	愛媛県温泉郡川内町の二神隆昌氏（川内二神氏）より同家に伝わる系図の送付を受ける。	二神 隆昌
12月4日	北条市の善応寺で、「二神種範夫妻の追善供養絵図」を発見する。	二神 浩三 二神 重則 二神 英臣

12月7日	北条市客の二神要氏、常竹二神氏と判明。また、同氏の妹さんの義父が、中世の二神氏が具体的な形で登場する「伊予河野盛衰物語」の著者玉井豊氏であることが解る。	
12月9日	北条市の八反地地域に伝わる「文政8年（1825）の地図」に二神山の名が3箇所あることを発見する。	北条ふるさと館
12月10日	風早二神氏のうちで、場所の解らなかつた土井二神氏の墓地を柳原の一心庵で発見する。	
12月14日	北条市鹿峰の日蓮宗積善寺で、寛保4年（1744）に作られた「二神喜種功徳碑」の調査を行う。	
12月19日	片山二神氏の旧屋敷跡を発見。現在は、重松忍氏の所有。屋敷周辺の石垣や塀は当時のまま。	
12月23日	豊後玖珠町の町誌編纂委員で久留島氏や大友氏の研究で知られる法政大学の福川一徳氏と起草委員会のメンバーで懇談会をもち、今後二神氏の調査、解明にご協力いただくことになる。	起草委員会
12月23日	ニュース第2号発行	

1999（平成11年） 1月11日	二神浩三氏（畠中二神氏）より、「畠中二神家系図」「畠中二神氏之儀書嘉永五年壬子文月二十四日作成」とある図書類の送付。	
1月16日	福川一徳氏より、東大史料編纂所に「二神文書（二神種方）」「二神文書（二神団四郎）」「片山二神文書（二神種康）」の3件の写しが保管されているとの連絡あり。	
1月23日	第5回起草委員会。2月14日の準備会の案内や当日の運営、会則、財政等の協議。 ニュース第3号発行	
2月7日	第6回起草委員会。出席者の状況、プログラム、史資料、会則、会場運営などについての協議を行う。この時点で、出席者13日の前夜祭22名、14日の準備会47名を確認。	
2月12日	法政大学の福川一徳氏一足早く来訪。その後の二神氏関係の古文書の調査結果について報告を受ける。	
2月13日	二神氏の系譜を研究するための準備会の前夜交流会が「国際ホテル松山」で25名の出席により開催される。	

2月14日	「二神氏の系譜を研究するための準備会」が、北条市立ふるさと館で開かれ、二神氏の系譜研究が組織的に始まる。	
-------	--	--



準備会スタートから系譜研究会発足までのあゆみ (1999.2~2000.2)

1999（平成11年）

- 2月16日 福川一徳氏と菊間二神氏の五輪墓を調査
- 2月19日 常竹二神氏墓地にある砂岩五輪墓に承応2年（1653）の年号を確認。
- 2月20日 工事中の北条市鹿島城跡の山頂付近で備前焼の瓶の欠片など発掘される。
- 2月26日 幕末の風早地区の俳壇の重鎮、二神栗舎に関する伊予史談会の会誌（大正12年12月31日、大正15年9月15日発行）を発見。
- 2月28日 北条市法善寺を訪ね、二神氏関係の史資料の説明を受ける。文禄・慶長の役に出陣した二神氏が捕らえたと伝えられる朝鮮虎の頭骨、二神牛之介の旗指物など数点の写真が公開された。
- 3月1日 片山二神家墓地で風早歴史文化研究会の竹田会長、新田常任理事によって二神通範（樹枝道種居士）の墓石を確認。隣にある夫人（仙窓理心大姉）の墓石はすでに確認済み。
- 3月5日 大阪府箕面市の二神敬子氏よりメールあり。
- 3月6日 高知県宿毛市の二神敬之助氏より連絡あり。
- 3月9日 本島二神氏の二神司郎氏を二神島に訪ね、名誉会長を受けていただく。
- 3月10日 ニュース第4号発行
- 3月12日 二神栗舎（本名：二神種亮、土井二神氏）が描いた水墨画2点が松山市内で発見。写真を準備会で入手。
- 3月16日 大分県玖珠町森の久留島記念館で久留島藩江戸屋敷詰藩士の記録「御中小姓先祖書：文化6年（1809）」と同町

安楽寺境内で豊後森二神氏の墓石群を発見。

- 3月21日 山口県豊田町一ノ瀬地区の一一行17名が二神島・中島を訪問。21日は昼前にチャーター船で二神島へ。安養寺・昼食・二神家墓地・宇佐八幡神社を見て、中島大浦に宿泊。22日は、吉木五十鈴神社・二神雄彦宅・吉木二神氏墓地・熊田宇佐八幡神社・長師真福寺。昼食後、宇和間港より帰途につく。記念品として「館の椿」をいただく。



3月22日 第1回常任理事会：中島大浦の中島町運輸課会議室

4月4日 5本目の「館の椿」を法善寺境内に植樹。残りの内訳は、二神島安養寺、中島真福寺、城辺町諏訪公園、北条市片山墓地。

4月19日 兵庫県芦屋市の二神豊氏より手紙受領。松山市窪野町二神正氏より電話。

4月21日 奈良市の二神栄三理事より電話。

4月22日 宿毛市の二神政幸理事より、入会申込書など送付の要請。

4月25日 ニュース第5号発行

5月2日 風早歴史研究会で浩三会長に講演依頼。

5月13日 北条市客二神要氏の案内で、栗井の安岡・友兼・宮崎の

三地区を写真撮影。

- 5月16日 北条市ふるさと館で「風早歴史文化研究会」の総会が行われ、浩三会長が「二神島から風早へ」と題し講演。また、同会の機関紙「風早第41号」に「二神系譜研究準備会」の題で英臣事務局長が寄稿。
- 5月18日 網野善彦氏（前神奈川大学特任教授）と松山市全日空ホテルで、浩三会長・理事5名で懇談。系譜調査の協力を約束いただく。
- 5月29日 第1回二神島交流会前夜祭：ふたがみ荘。23名出席。
- 5月30日 「第1回二神島交流会」開催。63名参加。安養寺、宇佐八幡神社。関口博巨氏（神奈川大学日本常民文化研究所特別研究員）による講演。



- 6月11日 高知県須崎市の二神十郎氏より入会申込み。坂本二神氏であることが判明。
- 6月13日 第2回五役会議。次回の学習交流会と全国理事会を9月12日城辺で開催を計画。
- 7月4日 第2回小冊子編集委員会。
- 7月10日 しまなみ海道開通記念シンポジウムで福川一徳顧問がパ

- ネラーで出席。準備会より4名傍聴。
- 7月11日 福川顧問、調査のため北条市訪問。
- 7月15日 「二神氏学習交流会 in 城辺」の打ち合わせで城辺町訪問。藤田儲三氏と懇談。その中で、城辺二神氏の史料「二神内記・外記」の存在を確認。
- 7月20日 **ニュース第6号発行**
- 8月1日 二神栄三理事より「二神氏関係年表」の送付を受ける。小冊子編集のための貴重な資料となる。
- 8月4日 当会の名誉会長である本島二神氏39代目の当主二神司郎氏が早朝3時35分に逝去される。享年91歳。



- 8月6日 二神司郎名誉会長の告別式：ムラタホール
- 8月10日 打ち合わせのため城辺町訪問。
- 8月14日 全国の二神さんに発送予定の小冊子の校正。
- 8月23日 福川一徳顧問、取材のため二神島訪問、二神浩三会長、豊田涉常任理事が同行。
- 9月11日 城辺町の諏訪公園に「館の椿」の案内板を設置。18時から、「二神氏学習交流会 in 城辺」前夜祭：山出憩いの里温泉、17名参加。小才角二神氏に伝わる二神熊蔵夫妻の絵図を公開。
- 9月12日 8時30分より第1回全国理事会。10時20分より学習交流会。講演「城辺二神氏について」講師：藤田儲三氏（南

宇和歴史民俗文庫)。午後は関係史跡訪問。



- 9月17日 北条における幕末の医師二神有済、隆涛の系譜について調査。隆涛氏夫人の出里である渡部家を訪問。
- 9月22日 愛媛県歴史博物館に保管されている二神氏関係の史料についての問い合わせを行い、「片山二神文書」が松山大学の西園寺源透文庫に保管されていることが判明。
- 9月23日 北条市法善寺にこの春植えた「館の椿」の案内板を設置。
- 10月2日 風早二神氏の祖、二神彦左衛門種範の350回忌法要を法善寺で営むと共に片山二神氏の墓地で発見された墓石も確定。
- 10月5日 **ニュース第7号発行**
- 10月7日 神奈川大学日本常民文化研究所に対し、二神文書閲覧訪問団受け入れの依頼文書を発送。
- 10月14日 9月に開かれた「二神氏学習交流会イン城辺」での藤田儲三氏の講演記録が小冊子として刊行される。
- 10月15日 準備会ニュースNo.7や準備会への入会を呼びかけた「二神氏の系譜を調査研究する会へのおさそい」の小冊子などを愛媛県南部と高知県全域の二神さん240名に送付する。
- 10月16日 北条市法善寺の蔵にしまってあった古い襖の下張りから土井二神氏に関するものを発見。

- 10月21日 松山大学図書館「西園寺源透文庫」の中に所蔵されている「片山二神文書」を調査しコピーを入手。
- 10月23日 北条ふるさと館の竹田館長より、寛文3年3月5日豊後森藩久留島主膳の乗る参勤交代の御座船が大時化に遭い、山口県屋代島の地家室沖で磯岩に激突し破船し十数人が溺死。その中に、二神興傳次の名があるとの報告あり。
- 10月25日 中央公論新社より網野善彦氏著「古文書返却の旅」が発行される。
- 11月11日 東京大学史料編纂所を訪問。二神系図（二神種方）、二神文書（二神團四郎）、片山二神文書（二神種康）の三点を中心に取材。
- 11月12日 神奈川大学日本常民文化研究所を訪問。「二神系図」「二神文書」などの写真撮影と福川一徳顧問の指導で実測。夜、「二神氏系譜研究会関東地区打合せ会」を東京お茶の水ガーデンパレスで開き14名出席。関東支部結成を目指し3名の幹事を選出。
- 11月18日 南宇和歴史民俗文庫の藤田儲三氏より「城辺二神氏が在郷代官をしていた時代で寛保3年の記録が発見された」との連絡を受ける。
- 12月13日 常任理事会で、北条市小川にある宅並城跡二神敬二郎氏の案内で調査の登山を行う。
- 12月13日 神奈川大学日本常民文化研究所の橋川所長ご一行が、来春の調査打合せで二神島を訪問。本島二神家などを調査するとともに、中島町をはじめ関係各所へのあいさつなどを14日まで行う。
- 12月15日 神奈川大学日本常民文化研究所橋川所長、窪田所員、東国歴史考古学研究所田代所長が、北条市の二神氏関係史跡を調査見学。
- 12月15日 北条ふるさと館竹田館長より、「豊田種治（二神種家の

叔父）に宛てた足利尊氏花押のある下知状を持っている人が愛媛県丹原町にいる」との連絡が入る。

- 12月16日 高知県・愛媛県在住で、電話帳に記載されている二神さん589名に「会へのおさそい」の小冊子の発送を終了する。
- 12月20日 小才角二神氏で幕末の庄屋職を務めた二神熊蔵の絵図（天保10年制作）の修復が完了する。二神氏関係の絵図としては、昨年末、北条市善応寺で発見された二神通範夫妻の絵図に次いで2例目。
- 12月25日 **ニュース第8号発行**
- 12月29日 小冊子などを九州全域50軒、中国地方・愛知・岐阜・三重・香川など146軒、事業所系80軒の二神さんに送付。

2000（平成12年）

- 1月6日 余戸二神氏の二神信助氏から入会届けがあり連絡をとる。広島県の二神虎二氏より入会届けあり。
- 1月7日 本島二神氏に残る携帯用の系図に『明治21年5月19日種村孫河東坤謹書』とあるのを発見。この種村（末弥）は二神種章の四男で松山の河東家に養子となっている。河東坤は種村の孫で、伊予の俳人河東碧梧桐の父である。つまり河東碧梧桐は種村の曾孫になる。
- 1月8日 準備会の会員向けの資料「家計調査の手引き」を作成
- 1月10日 余戸二神氏の二神信助氏と懇談し、同家に伝わる「余戸二神氏文書」「余戸二神氏系図」を拝見し写真撮影。また同氏の墓地を訪ねる。
- 1月16日 3月の初旬から予定されている神奈川大学日本常民文化研究所による本島二神氏墓地の第二次調査にあたり、橋川所長らと、墓地の相続地権者である岡山氏在住の黒瀬一朗氏を訪ねる。系図を拝見し写真撮影。黒瀬一朗氏の

祖父は二神弥三郎（二神司郎氏の伯父）で、愛媛県越智郡岩城村の黒瀬家に養子となっている。

- 1月17日 山口県豊田町の磯部完治氏より、豊田種長追善供養祭を4月16日開催との連絡が入る。
- 1月23日 第4回役員会開催。
- 1月28日 神奈川大学日本常民文化研究所による二神島調査が3月8日～22日と決まる。
- 2月4日 大阪の二神俊一理事より、関西ブロック支部の打合せを2月5日に行うと連絡あり。
- 2月9日 東京の二神重成・昌生理事より関東分科会を6月4日にとの連絡あり。
- 2月11日 二神俊一・栄三理事より関西分科会を6月17・18日で開催の連絡あり。
- 2月17日 NHKラジオ「ラジオ深夜便」で網野善彦氏が「古文書返却の旅」をベースとした放送内容の中で、準備会の紹介があった。
- 2月21日 埼玉・千葉・東京・神奈川・大阪・京都・兵庫・奈良の二神さん215軒に小冊子「二神さんあつまれ」を発送。これで全ての関係する県などへの発送を終了。

二神氏「ルーン調べます」

研究準備会が発足

全国で初めての本格的調査がはじめて、「二神氏ルーン調査会」が発足した。奈良市西院の「二神氏の森」と隣接する約50人の「二神氏」が出来た。

ゆかりの史跡めぐる



「二神氏の森」をめぐる調査会

(参考) <http://www.dion.ne.jp/~dion012/>

11.9.16 毎日新聞

(第3回連載第四回)



ゆかりの史跡訪ねる

全国津々浦々 二神せん集会

城辺で30人交流

緑学の「二神氏の古事記・歴史」で、二神氏の歴史をめぐる講演会が開かれた。奈良市西院の「二神氏の森」で、二神氏の歴史をめぐる講演会が開かれた。奈良市西院の「二神氏の森」で、二神氏の歴史をめぐる講演会が開かれた。

二神氏の歴史をめぐる講演会は、約60回、うち奈良市が主催する「二神氏の森」で、二神氏の歴史をめぐる講演会が開かれた。奈良市西院の「二神氏の森」で、二神氏の歴史をめぐる講演会が開かれた。奈良市西院の「二神氏の森」で、二神氏の歴史をめぐる講演会が開かれた。

2 ① 豊後岡藩士福田家に「二神家系」が

竹野孝一郎

二神系譜研究会が発足して8年目を迎えられますこと、心よりお祝い申し上げます。

思えば私と二神会との出会いは、大分市府内町の林家所蔵の「二神修理進宛大友義統書状」によってであります。二神会発足の準備をしておられた二神浩三先生と二神英臣さんが玖珠へ訪ねて来られ、喫茶ブルボンの轟義禮さん等と会食したのが最初の出会いだったと記憶しております。

林氏所蔵の二神文書を調査させていただいたのが、昭和58年の夏頃のことでした。それから15年以上を経て、一通の二神文書によって二神会の皆様方と交流させて頂くことなど、当時予想もつかなかったことがあります。その後、伊予・玖珠で開催されました「二神氏学習交流会」にお招きをいただきなど、光栄の至りと思っております。

林・得能・橋爪家文書の調査以後、残念ながら新たな二神文書の発見はありませんが、「編述流御伝書併諸書附類目録全 十冊之内壱」と題する冊子本が、二神会の顧問であります福川一徳先生より玖珠郡史談会に寄贈されました。この書の「別段書面類之覚」の条に、豊後岡藩家臣福田信明家に「二神家系」と題する一通が伝わっており、「□信明之妻二神氏也」と注記されております（写真は表紙と関係箇所）。

「林二神系図」によりますと、二神修理進瑞庵の孫七太夫嘉林は、黒田氏から豊後森久留島氏に仕えたが、元禄2年（1689）に「召放ち」になり、子の嘉鑑ともども豊後岡藩領竹田に移り住んでいます。嘉林はその4年後の元禄6年に竹田で没しています。子の嘉鑑も没年は不明ですが、同じく竹田で没しています。そして親子共々、竹田の円福

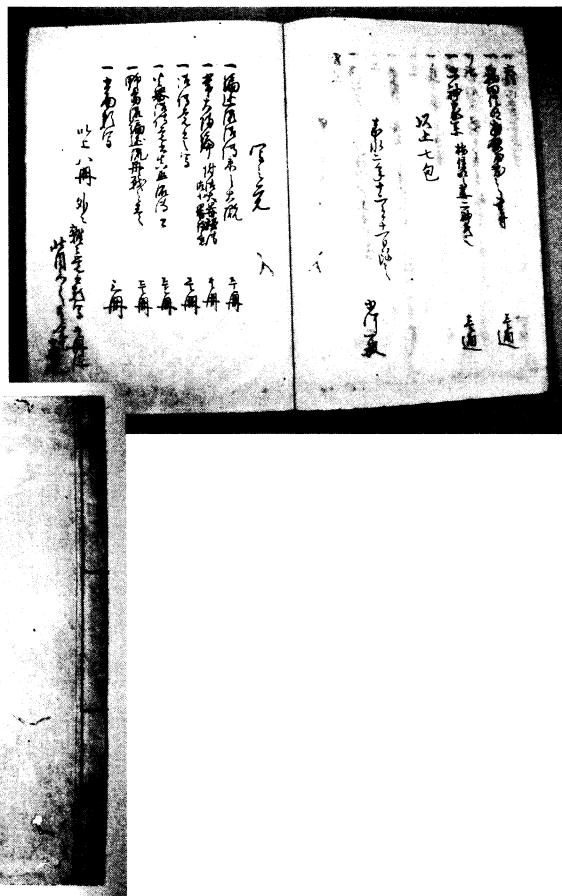


竹野孝一郎氏

寺に葬られたとあります。

嘉鑑には3人の女子があり、3人とも岡藩士に嫁いでいます。その1人が福田宇平治の妻で、「二神家系」を伝えている家であります。現在、福田家と「二神家系」について、その所在はつかめておりませんが、今後、この「二神家系」の所在調査を行い、二神会の皆様に史料提供できればと思っています。

今後とも、二神系譜研究会が益々ご発展いたしますことをご祈念申し上げます。



編述流御伝書併諸書附類目録全十冊之内壱

② 「由利千軒」の謎は解明されるか

風早歴史文化研究会 竹田 覚

<はじめに>

1181年、河野通清・通信父子が高縄山城において、源頼朝の挙兵に呼応して兵を挙げた。4年後の源平合戦に通信は河野水軍を率いて源氏に味方し手柄を立てた。1221年の承久の変には朝廷方について敗れて捕えられ、現在の岩手県北上市の安楽寺に預けられた。2年後の1223年に68歳で没したが、その墓が「聖塚」である。後に孫の一遍上人が墓前に額づき供養したことが「一遍聖絵」に画かれている。

1 河野氏について

- | | |
|-------------|---|
| 昭和40年 | 「聖塚」を安楽寺の住職司東真雄氏が発見 |
| 昭和42年 | 北条市出身の愛媛大学教授重見辰馬氏が確認 |
| 昭和43年 5月3日 | 北条市文化財専門委員瀬戸丸清学・川口雷両氏が墓参 |
| 昭和43年 7月3日 | 司東真雄氏が北条市へ来訪、高縄山や道後の宝厳寺に参拝 |
| 昭和47年 8月14日 | 北条市鹿島博物館専門委員一行6名（竹田覚ほか5名）が北上市を訪問、司東真雄氏から発見の経過を聞く |
| 昭和57年10月 | 北上市長齊藤五郎氏が北条市へ来訪 |
| 平成8年10月15日 | 河野氏の史跡を訪ねる旅（風早歴史文化研究会）一行が、通信の墓「聖塚」に参拝、稻瀬町公民館で交流会。 |
| 平成9年5月19日 | 「通信没後777年祭」に招かれ風早歴研役員5名が出席。<後略> |

2 河野幸夫氏との出会い

祭りの後の懇親会で隣席したのが河野幸夫氏であった。河野氏の祖先は、通信の配下の造船技術者であったという。席上で話題が海中に没した史蹟のこと及び海中考古学に興味を持ち、松島湾内の地震で沈没した神社関係の石造物など発見した例を話された。私は「由利千軒」の話をふと思い出し概要を述べた。すると彼は、松島湾で海中探査したことをNHK教育テレビで紹介をするというのであった。

松島湾は太平洋の波が押し寄せ、海が濁り暗いので困難だったが、瀬戸内海であれば海中の透明度もよく、是非、機会を見て由利島を訪ねたいということだった

3 由利島探検（第1回目）平成15年9月25日

松山の高浜港から神浦港（豊田涉氏乗船）経由で二神島着。船中で豊田涉氏より由利島についての話を聞き概要を把握。二神島から別船に乗り換え約40分で由利島に着き、島を一周したあと南側海岸に小ボートで上陸。海岸はこぶし大から頭くらいの丸い礫が重なっていて歩きにくかったが豊田涉氏の案内で、神社跡・住居跡、共同井戸などを見学した。河野幸夫氏は食後、素潜りで海岸線から沖合いに向かって海底の様子を調べていた。夜は宿で懇親会を開き、話題は諸般にわたり盛り上がった。当時、二神小学校の倉橋健二校長に種々お世話になった。

4 由利島探検（第2回目）平成16年5月16日

豊田勝氏が操る高速漁船で高波をけって約20分で由利島に到着。島の南西方向は波静かで好都合だった。河野幸夫氏は持参した水中ロボットをテレビに接続して自家発電機を始動させると海底の様子が鮮明に映し出された。海底の浅い場所から沖合いへ次第に移動させると魚類の群れや貝・海草・岩肌などが見えてきた。海岸の地点

を変えながら探査を続行した。

しかし、目的とする人工物（石垣、井戸枠、陶磁器類など）は、遂に見ることができなかった。残念であったが、後ろ髪を引かれる思いで現場を後にした。

後日、テープは大学で学生たちと検討したうえで複写して送付するとのことであった。それから数週間後に送られてきたが、どうも今回の調査では昔の生活に結びつくような遺物は発見できなかった。

<おわりに>

河野幸夫氏は、東北学院大学工学部教授・工学博士で日本国内にとどまらず黒海・地中海でも調査の実績を持っている。専門は衝撃波の研究だそうである。

今後、天災などにより沈んだ島として今に伝えられる「由利千軒」の謎は、果たして、いつの日にかに解明されるのだろうか。今はただ、河野幸夫教授の熱意と協力に敬意と感謝を表したい。また、お世話になった豊田渉氏、豊田勝氏をはじめ関係者に心より深甚の謝意を表したい。



由利島よ又いつの日か

特別寄稿

① 二神島と日本常民文化研究所

この原稿は、旧・愛媛県中島町発行の広報「なかじま」に当時、担当者であった豊田涉が網野善彦氏にお願いして寄稿いただき、平成9年（1997）11月号から平成10年（1998）1月号の3回に分けて掲載したものをまとめたものです。（内容等は当時のままです。）

故神奈川大学特任教授 網野 善彦氏

二神島とのご縁

私が最初に二神島を訪れたのは、昭和29年（1954）8月のことであった。当時、勤務していた日本常民文化研究所の月島分室が、水産庁から委託された「共同漁業権の性格に関する研究」の調査地の1つに二神島が選ばれ、私もその調査員の1人となったからである。

なぜ、この島が選ばれたのか私は知らない。このとき一緒に調査を行った同僚の河岡武春氏が広島文理大学出身で、宮本常一氏に傾倒しており、二神島を選んだのは或いは河岡氏ではないかとも考えられるが、私自身はなんの予備知識もなく、島に渡ったのである。

調査のテーマに即して漁業組合の文書を見せ



二神港（1980年頃）

ていただいたが、その頃の研究所はまだ全国の漁村史料の調査・蒐集・整理を行っており、私たちはその仕事に即して二神家に向って伝來の文書を見せていただいた。



二神司朗邸

そして、二神

司朗・道夫ご兄弟のご好意で文書の全てを拝借し、組合の文書とともに研究所に送ったのである。現在まで続いている二神島とのご縁はここから始まった。

研究所の活動が停止に

しかし、私にとってこの調査は、瀬戸内海、特に島を訪れた初めての経験であった。実際、50年近い年月を経た今でも、そのころの二神島の美しい自然の浜、二神家のお屋敷から見た素晴らしい景観、そして浜の端に建てられた避病舎などは、私の目に焼きついている。そして、司朗氏のお勧めで、ご一緒に渡った由利島での一夜。翌朝早く、活気に満ちた鰯網の様子。そして、驚くべき美味の刺身の味は、今も忘れることができない。

この時から、再び私が二神島に渡った昭和57年（1982）までの約30年間、先に拝借した文書に関連して、研究所は二神家と漁業組合に迷惑をかけ続けた。昭和30年（1955）に水産庁からの委託予算が打ち切られ、月島分室の活動が停止した結果、文書の返却が全く遅れ、中島町誌編集に関連して、厳しいご催促をいただいて、ようやく研究所

はほとんどの文書を返却した。

ところが、研究所が神奈川大学に招致されることになり、こうした借用しっぱなしになっている文書の返却作業を主な目的として、神奈川大学に勤務するようになった私は、多くの文書群の中に、なお未返却のままになっていた「二神家文書」の一部のあることを発見した。

先の、町誌編集に関連した研究所による文書返却の際には私は関わりがなかったので、その事情、理由の詳細は明らかでないが、おそらく別置されていたため、気づかれることなく未返却となってしまったのであろう。

再び二神島へ

1日も早くこのことを二神家にお知らせし、お詫びをしなくてはと思い、田島佳也氏とともに再び二神家を訪れたのが、昭和57年（1982）11月のこと、二神家と二神島とのご縁はここから新たに始まることとなった。

それ以来、研究所は文書・古銭・建築等の各分野の調査を何回か行ったが、平成6年（1994）二神司朗氏から中田和邦氏を通じてのお申し出で、二神家文書を研究所にお譲りいただくという重い責任を負うことになった。

現在に至るまで、考古学の分野を加えてさらに調査を続けている。その経過・成果については、研究所の紀要「歴史と民俗（平凡社）」等にその都度報告をしている。ここでは、再び二神島に伺うようになってからの15年間の島での見聞の中で、私自身が感じたことについて若干述べてみたいと思う。



二神司朗氏・網野善彦氏（1982年）

「村上家文書」から思うこと

今年3月、私は村上宗一郎家に伺い、同家に伝わる「壬申戸籍・明治5年(1872)」の草稿本を拝見することができた。

島では周知のように、同家は村上水軍の末裔という伝承を持ち、江戸後期、山口県屋代島から移り住んだといわれる。大分から大阪までの瀬戸内海で幅広

く生魚の商いを営んできた同家に伝わる文書の大部分は、こうした商業関係の文書で、すでに愛媛大学教授の内田九州男氏指導の下で、同学の学生諸君による丹念な整理が行われ、目録も作成されている。

この戸籍草稿本は、「石鐵縣管轄第拾貳大區九小區戸籍草稿」という表題を持つ二神村の行政に関わる文書として、村上家文書の中では、やや特異な性格を持っている。そこには、島の各戸の戸主・家族・続柄などが記載され、異動についても後筆で記入されているが、129戸(うち1戸は安養寺)のうち、書き忘れと見られる1戸を除き、全てが「農」と記されていた。

言うまでもなく、二神島の田畠は極めて少なく、島の住人の生活が村上家のように海、或いは山に依拠していたことは間違いない。にも拘らず、政府の戸籍は島の全ての家を「農家」ととらえることによって、実際の島の生活を支えた漁撈・商業等を殆ど切り落としたのである。

おそらくこれは、江戸時代後期には社会に浸透していた「百姓=農民」という誤った思い込みにより、二神島の百姓を全て「農民」としたためと思われる。これは私にとってまことに衝撃的であった。近世から近代初期にかけての日本の社会が農業社会だったという従来の「常識」が、こうした明治政府の偏った見方に、かなりの程度左右さ



壬申戸籍草稿本

れてきた結果であることを、私はこの戸籍草本によってはっきりと知ることができたのである。

そして、この二神島で確認したことは小さな事実であれ、おそらく明治以後の日本の歩みについてのこれまでの見方に、大きな修正を迫る重要な手がかりになるものと思われる。

海民と海の領主

しかし、私が島の調査から教えられたことはそれだけではない。この島の在り方は、“海民と海の領主—海賊”との関わり方を考える上で、きわめて示唆的である。現在の小泊・向井・泊・脇の浜は16世紀には、浦と泊の海辺に並行し、家と家とが密集して立ち並ぶ集落の形態は、日本列島各地の集落に見られる海民の集落の典型と言っても過言ではない。

現在の本浦、宇佐八幡より東、二神氏の屋敷・墓地・安養寺等の集落と湾をはさんで、島の西端の城山一小城は、海の館と湾に出入りす



二神島の中央部（1980年頃）

る船の見張り所・警固所としての海域の在り方をよく示している。

いわば、海の領主と海民の集落との見事な1セットを、我々は二神島に見出すことができるるのである。これは、瀬戸内海の“海賊”的世界、さらに列島全域の海民と海の領主の関係を理解する上での重要な手がかりと言わなくてはならない。

残された仕事と大きな成果

このように、私自身は島から多くのことを教えられたが、研究所としては、二神島或いは中島町全体について、なお、なすべき仕事を多く残している。何より研究所に保管している「二神家文書」を広く公開するための整理・目録作成・写真撮影が急がれており、遠からずこれは達成するであろう。

また、平成7年（1995）8月には由利島、昨年の3月は二神家の墓地について、鶴見大学の大三輪龍彦氏・河野真知郎氏、東国歴史研究所の田代郁夫氏・奥寺宏之氏等による考古学的な調査が研究所の委託によって行われ、大きな成果をあげた。

14世紀に遡る中世の墓石発見

しかし、由利島では多くの遺物を発見したとはいえ、夏季のために山の斜面の調査は行うことができなかった。二神家の墓地からは、14世紀に遡る五輪塔をはじめ、多くの中世の墓石を見い出すという大きな収穫を得たが、本格的な調査は後日の課題とせざるを得なかつた。

由利島の中世遺蹟の見い出される可能性は残っており、また、14世紀から近世・現代まで一貫して同じ家の墓所であったこと



二神家墓地

の明らかになった二神家墓地の在り方は、全国的に見ても稀有な興味深い事例である。

今後、調査をさらに推進するための方途が模索され、その実態が明らかにされることを期待したいと思う。

民家調査から総合調査へ

さらにまた、西和夫氏を中心とする神奈川大学の建築史の研究室によって、何年もかけて島の全ての民家についての調査が行われている。

島の民家、集落の在り方が列島を越えて広い視野の中で追求され、その個性が明らかにされつつあるが、当面、中島町の島々の全てを視野におさめた文献史学・考古学・建築史学等の総合的な調査を通して、大きな成果をあげうる余地は広く残っている。

私自身は、今年の3月いっぱいで神奈川大学を退職し、日本常民文化研究所を離れることになるが、今後、推進されるであろう二神島の調査については関心を持ち続け、力のある限りお役に立ちたいと思っている。

中島町がこうした調査の実現を通して、その長い歴史を明らかにすることによって、さらなる発展を遂げられることを心からお祈りしたい。

② 弾コギ異聞

（昭和40年（1965）「不死鳥第6号」に書かれた、広島大学地質学教室の大国英子氏による報告を掲載させていただきました。）

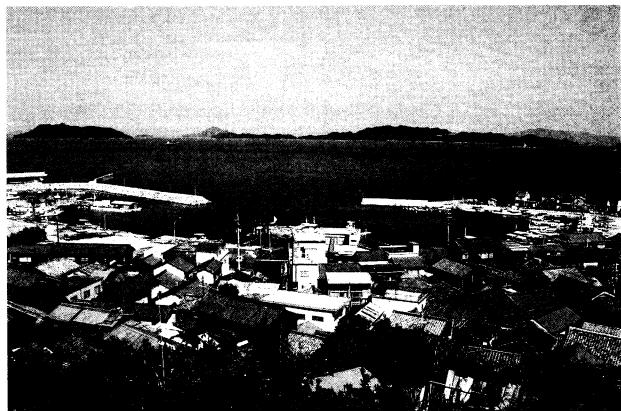
広島大学地質学教室 大国 英子

● 1個の木箱

これは瀬戸内海の西で起きた奇妙な宝探しの話である。

昭和31年（1956）1月、山口県諸島（モロシマ）付近で延べ縄漁をしていた広島県豊島（トヨシマ）の船が木箱を1個釣り上げた。しつかり釘付けされ、ロープでからめられたこの箱はずっしりと重い。なんとも気味が悪いが、そうかといってこのまま海に返すには惜しい気がする。こわごわ開けてみて驚いた。煙ならぬ小銃の弾がびっしりと詰め込まれているではないか。これは朝鮮戦争が終わって、呉に駐留していた英豪軍が帰る途中、瀬戸内海で特に深い諸島水道へ不要になった砲弾を沈めたものの1つで、それはおびただしい量であったらしい。

当時は金ヘン景気の世の中、豊島の船は早速これを現金に換えた。
思わぬアルバイトである。ためしに底を探るとまたもや箱がある。箱は即ち弾・弾は即ち金にほかならない。「仕事は大人数、うまいものは少人数」である。豊島の船は、黙って夜な夜な諸島で宝の箱を引き上げた。



諸島水道遠景

●諸島水道を目指す船団

しかし、場所が悪かった。諸島水道は昔、瀬戸内海に霸を唱えた忽那氏の本拠。いわゆる忽那七島のすぐ西側である。忽那氏の血を引くこれらの島の人々が何で気づかぬはずがあろうか。七島のうちで最も諸島に近く、漁に出る人の多い津和地島が最初にかぎつけた。2月、旧正月の餅をそろそろ用意しようかという頃、これはきっと何かあるに違いないと、豊島の船を引っ張ってきて、みんなで寄ってたかって酒を飲ませ、脅したり、すかしたりしてついに聞き出してしまった。

自分たちの庭にも等しいこの海に、そのような宝が沈んでいようとは……。津和地の人々は一斉に諸島水道へと船を進めた。津和地の戸数は約300戸、このうち海に出かけなかったものは4～5軒にすぎない。この話は1両日中のうちに東対岸の怒和島の元怒和に伝わった。元怒和は100戸余り（注：実際には270戸ほど）であろうか。これも殆ど出かけて、残ったのは2～3軒である。七島のうちで最も大きい中島は農業を主とするが、比較的海に出る人の多い宇和間地区、大泊地区もこれに加わり、さらに南沖にある二神島からも30隻あまり参加した。二神島は200戸ほどの村で、農業が殆どであるが、皆、船を持ってゐる。二神島は東西に米山・妙見山などの火山がいくつか連なり、その北側に村があり、山を越えた南側に畠がある。したがって肥料の運搬も作物の取り入れも山を越すより船を使うほうが楽で、仕事もはかどる。

旧正月の餅つきもそこそこに、正月も休まず、人々はこぞって諸島水道を目指して、我も我もと漕ぎ出したのである。このことは瀬戸内一帯に広まり、広島県の倉橋島・能美島・鞆の船をはじめとし、上は淡路島、下は鹿児島、長崎の五島からも集まつた。

それからの諸島水道は大変である。集まつた船は、島の丘から眺めると、あたかも筏を組んだ如く、船から船を伝つて遠く離れた別の船に乗り移ることも容易に思われるほどである。何しろ昼夜の別なく数百の船の群れが何の秩序もなく、思い思いに動き回るのであるから、

胴に穴を開けたり、舳先を折ったりと怪我をする船もあらわれる。

網などで海を引くことをコグという。人々は、エビコギ・ゴチアミ・延べ縄など、先祖から伝えられた漁法はいくつとなく知っている。しかし、弾コギは前代未聞である。自分たちで道具を作りださねばならない。一般に用いられたものは30cmほどの四つ手碇を2mばかりの竹に20~30cmの間隔で下げ、それを海に沈め、船を進めて、手応えありとみると引き上げる。船によって碇の大きさもまちまちであれば、それを上げるにも、ワインチを巻くもの、手でたぐるものなど各種各様である。4トンばかりの船に普通は3人が乗り込み1人が舵をとり、残る2人が碇を上げる。弾コギで笑いの止まらぬのが島々の船鍛冶。碇を作り、船を修繕する。食事の暇も寝る暇もないほど注文が殺到する。

どれほどの弾が海底にあるのか誰も見当がつかない。小銃の弾から1トン爆弾まで様々の弾がある。とにかく碇を投げてそれを引けば、弾の箱が掛かってくる。もぎ取るようにして再び海に沈める。最初は爆発への恐怖があって、恐る恐る碇からはずし、そっと船底に降ろしたが、次第に慣れて船底へどんどん投げ込んでも平気になってきた。碇を投げる。船を進める。引き上げる。向こうの船とぶつかりそうになる。大声で怒鳴る。エンジンがせわしく唸る。ワインチがきしむ。人々は無我夢中で弾を上げる。

●諸島の海は「化石の宝庫」

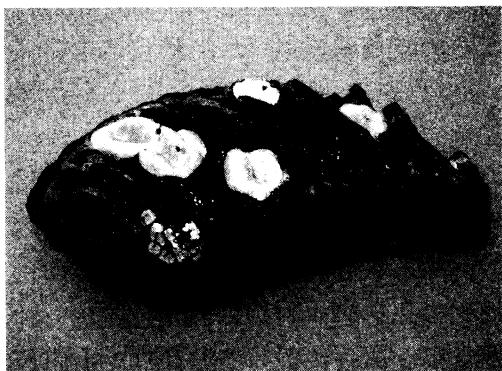
諸島付近の水深は100m前後もあり、潜水夫も潜ったことがない。底はすり鉢のようになって、きめの細かい砂か泥であるらしい。四つ手碇は、時々変なものを掛けてくる。海松の枝、日に干しておくと次第に白っぽくなつついには灰色になつてしまつ真っ赤なサンゴ、穴の一面にあいた石、石とも泥の塊ともつかぬセメントのようなものなどはその例である。時には鹿の角もかかる。このほか、かなり沢山かかるものは、松の木が石になったかと思われる棒状のものである。黒

褐色でひび割れがあり、1m以上もありそうな直径20cm前後の棒・両端が太くて中に穴が通っているもの、2~3貫目もありそうなものもある。これらは乾かしてこすると一様に黒光りして鉄のようである。なかには織り機のオサのようなものもある。

珍しく思って持ち帰り磨いて置物にした人や、不思議なものであるから愛媛大学や広島大学に持っていた人、県に寄付して感謝状をもらった人もいた。しかし、大部分の人は弾かと思って勇んで上げればこのような得体の知れないものであるから、なんとも腹立たしく、力任せに海に投げ込んだり、ご丁寧にも粉々に碎いてばら撒いたり、また、持つて帰るつもりで船底に転がしておいても、弾が次々に上がれば邪魔になり捨ててしまったりした。

それから数年経って、島に突然現れた広島大学の先生の話によれば、その松ノ木のような変なものは、今から約1万5千年前、この瀬戸内海が陸であった頃、その湿原地をのそ歩いていたナウマン象の牙や骨の化石であり、オサのようなものはナウマン象の歯の化石である。また、セメントの塊は、ナウマン象が大陸からやってくる以前、諸島や二神島、片山島が火山として誕生した頃、古瀬戸内海（瀬戸内海は今日まで幾度かできたり消えたりした）に生きていた貝の化石を含むとの事である。今に思えば惜しいことをしたものである。

捨てた化石はえらく重たかった。碎いた化石は面白い形をしていたし、捨てた石には亀の型がついていた。漢方薬屋を持って行くと馬の骨だと言われ、そのまま店に置いてきたものは珍獸の化石であつたかもしれない。後の祭りである。思いはそれぞれ違ひながらも、大学の先生も島の



ナウマン象など化石

人々もため息をつくばかりである。碇からはずされ再び海に返された象の化石は、ゴチ網やエビコギにかかる限り、瀬戸内海が干あがるまで安らかに眠っていることであろうし、馬の骨は竜骨として薬屋の抽斗の中に納められていることであろう。

●津和地郵便局おおわらわ

話は前にかえる。

弾コギの根拠地は津和地である。幸い？にも、この津和地には警察がない。現場からは近い。人々は津和地の浜で弾を解体し、朝市を開いた。値がよいものはイロもの（真鍮、銅など）である。仲買人は主として広島から来た韓国人で、取り引きは全て現金。あわてたのは津和地郵便局である。この島で電話のあるのはこの郵便局だけで、広島方面との連絡のためにひっきりなしに利用者がやってくる。「明日の朝まで金庫の中にしまっておいてほしい」と、厚い札束を抱え込む仲買人も来る。ただ預かるわけにもいかないので、貯金してもらう。すると翌日には引き出しに来る。夕べに預け、朝には引き出す。こういったことが毎日続く。300万円もの電報為替が舞い込む。郵便局の面子にかけても札の耳を揃えなければならない。現金調達におおわらわとなる。おまけに千円札であるから一抱えもある。しかも小さな局なので、局長と局員の2人だけである。忙しいことこの上ない。おかげでその年は愛媛県随一の貯金高を誇ることとなった。

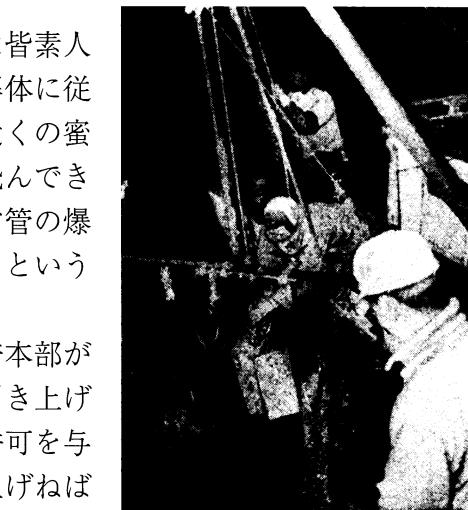
七島のうちで最も稼いだのは津和地島だと他の島の人々は言う。津和地の人もそれを認めるに違いない。津和地300戸のうち30戸軒が家を新築・改築し、船を改造した。一晩で10万円も稼いだ人もあるという。焼酎は清酒・ビールにかわり、広島や呉に遊んで一夜に数万円を散財する人もあった。地方に働きに出かけている若者は呼び戻された。漁師は魚を忘れ百姓は蜜柑や除虫菊を忘れ、昼夜兼行の弾コギで津和地は二十四時間静まる時がなかった。

●海上保安庁動く

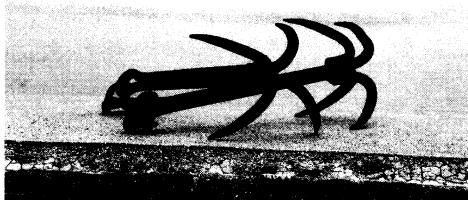
諸島水道は機帆船の航路である。しかも、海の銀座と呼んでよいほど沢山の船が往来する。その水道に数百の船が集まって、進むともなく止まるともなく、ひねもす漂い、それぞれが爆発物を扱っているのであるから、危険きわまりない。夜ともなればなおさらである。衝突することもしばしばである。

また、弾を上げて解体するのは皆素人である。1トン爆弾が爆発し、解体に従事した3人がバラバラになり、近くの蜜柑畠で仕事をしていた婦人は、飛んできた破片で即死し、或いは拾った雷管の爆発のため、子ども2人が死亡するという痛ましい事故が発生した。

7月、ついに第六管区海上保安本部が取り締まりに乗り出した。砲弾引き上げの区域を指定し、特定の会社に許可を与え、人々はその監督の下に弾を上げねばならなくなつた。なんといっても、自分でこぎ、解体し、直接売るほうが収入がいい。しかしこれまでのようにおおっぴらに弾コギはできない。必然的に夜の操業となる。夜といつても灯は点けない。手探りの有様で船を動かす。これこそ本当の闇操業である。巡視船も無灯火でひそかに近づき、いきなりサーチライトを照らす。弾コギ船は、われ先に逃げる。せっかく手応えのあった碇綱も、背に腹はかえら



ヤミ操業（「明治百年・歴史の証言台」客野澄博著 昭42年12月20日発行、317頁より）



引き上げに使われた『四つ手碇』

れず、惜しくはあるけれど叩き切り、ここを先途と船を走らす。どこまでも追っかけられて島に逃げ込み、ついに捕まってしまうもの、灯のない悲しさで互いにぶつかるものなど。諸島水道は騒然となる。これが毎夜繰り返される。村の古老は、臭いものをそのままにして集まるハエを追うようなものだという。巡視船は2、3隻。弾コギ船は数百。これではお話にならない。仲間を追う巡視船のすぐ後で、悠々と操業する船もある。巡視船が姿を消せば、ちりじりになっていた船は、弾にたぐりよせられるかのように集まってくる。

沈められた弾には限りがある。裸の砲弾がかろうじて碇にかかって上がる頃になると、取り締まりの厳しさも手伝って、人々は諸島に集まらなくなつた。7月には認可を受けた弾コギ船は、百隻を数えたが次第に数を減じ、9月末、引上げ作業が打ち切られる直前には20数隻になってしまった。

●宝探しの終わり

諸島水道は上り下りの機帆船の列と、波に任せて魚を釣る船影が見られるだけとなつた。宝探しは、終わったのである。

今も人々は目を輝かせ、手振り身振りでこの弾コギの話しをする。こんな景気のよい話は、これから先あるとは考えられない。いつしか、弾コギに出かけた船は1000隻もの数になり、1晩で稼いだ金高も数十万円とかわって、語り伝えられるであろう。

それから8年、弾の朝市がたった津和地の浜には、何隻かの船が干され、積み込みの際にこぼれたのであろうか、伊予蜜柑が波にゆらゆらし、あの諸島は当時のままに、亀の甲の姿を浮かべているのである。

一時的な異変ではあったが、思わぬ収入に恵まれた漁民は、これを資金としてゴチ網漁などへの切り替えをしたのであった。

注釈 ※漢字の一部は、常用漢字に変更させていただいたものがあります。

※現代風に言葉遣いを訂正した部分があり、見出しのタイトルは編集者にて作成しました。

③ 二神島に現存する民家と文献資料とを総合すれば

神奈川大学建築学科 津田 良樹

1986-8年ごろであるから、もう20年近く前のことになります。数度にわたり二神島を訪ね、当時150戸ほどあった二神島の民家の98戸を実測し、神社の祭礼なども調査したことがあります。詳細な調査を行ったにもかかわらず、一部を「住宅総合研究財団年報No14、15」で報告したものの、中途半端なものであり、気にはかかりつつも、いつの間にやら20年近くたってしまいました。

その間に気づいた資料ですが、二神司郎家文書の中に幕末期の二神島の安養寺や民家の間取を書き上げた帳簿があります。それは、「安政六未年四月」の年紀や作成者として「二神島」とある横帳で、表紙に表題代わりに「異国船渡来滞船等致候様之義有之候へ者、御人数御差出シ可相成、左候時者御家老中始御宿 庄屋役宅ヲ始其余寺社百姓家間取御尋ニ付如此相認差出之候」と記されています。藩に提出された控えであるためか、文中「御家老中始御宿」の後に脱落があるようで、若干意味不明であるが、大要は以下のようである。すなわち、「異国船が来航して逗留するようなことがあれば、その人数を届出すること。そのような時には藩重役を初めとして泊り込むため、庄屋役宅を始め寺・神社・百姓家の間取を尋ねられたので、この帳簿のように書き上げ提出した。」というようなことでありましょう。

この帳簿が提出された安政6（1859）年4月は、前年6月に日米修好通商条約が調印され、この年6月から神奈川・長崎・箱館を開港するという、ちょうど、その間の時期にあたっています。そのような時期に、各藩ではこのような調べをやっていたのでありますか。帳簿の内容は、安養寺と庄屋を含め14軒の民家の間取が書き上げられています。庄屋家の間取図が図-1であります。「庄屋英左衛門宅、大手囲無御座候」と注記して、間取図を単線で描いております。庄屋英

左衛門は二神家18代の「種式」であります。間取図の中には土間に「庭」、4つの部屋に「六畳」・「八畳」、そのほか便所である「雪隠」・「床」・「縁」・「戸口」が書き入れられています。また、間取図は「六畳」・「八畳」と書き入れられた部屋の大きさから判断して、1間を6分で描いてあり、100分の1の縮尺で描かれていることがわかります。すなわち、二神家18代の主屋は、間口6間に奥行4間半ほどで、総坪数27坪ほどの主体に、縁と雪隠が突き出した建物でした。間取は、9坪ほどの土間に床上が4室からなる食違四間取であります。

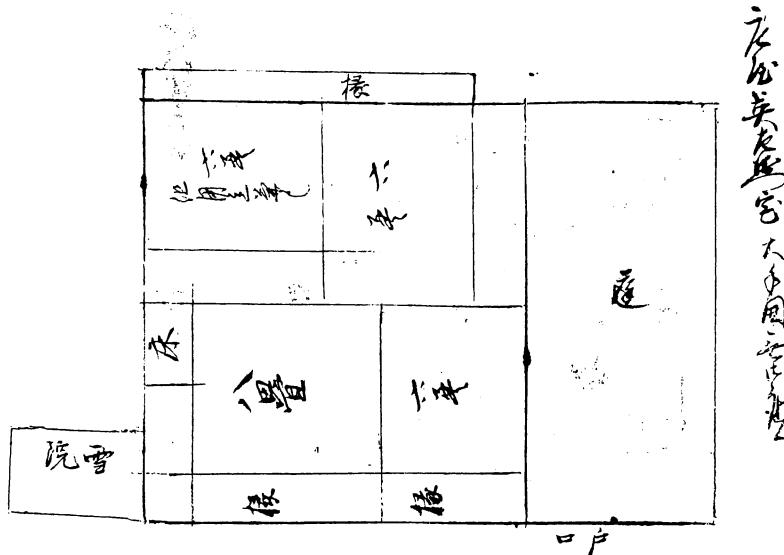


図-1 庄屋英左衛門宅間取図

付属屋については記載がないので不明ですが、現在も二神島に残る伝統的民家は、主屋と門長屋（ヘヤ）などで中庭（ヒノラ）を囲む中庭形式が一般的であります。それらの点からみて、当然、幕末期も門長屋などの付属屋があったものと思われます。二神家18代当時の住居は、以上のような様相であったと思われます。

ところで、安政6年のこの帳簿、明治9（1876）年の「建物台帳」（第3回二神交流会で橋川俊忠氏が報告した資料）、さらには現存する二神島の民家（当然のことながら、現存する二神島の民家には、幕末期・明治期・昭和期の建物などが混在しています。）を総合すれば、幕末期から現在に至る二神島の民家の様相をたどることが可能ではないかと考えられます。

ところが、安政のこの帳簿に記載される各民家は、安養寺・庄屋家以外の13戸については、現在のどのお宅に当たるのか明らかではありません。また明治9年の「建物台帳」に記載される各戸もまた多くは同様に不明です。

とはいえ、これら各戸の変遷が明らかとなれば、より身近で、真実味のある民家史のひとつを明らかにすることが期待できます。そのためにも、この帳簿に記載されている各戸の名前リストを掲載いたしますので、橋川氏の報告した「建物台帳」と同様、資料上の各戸と現在の各戸を結びつける作業に協力していただけることを切に希望します。

表一1 間取図名前リスト

肩書	名前	注記
寺院	安養寺	大手囲無御座候
庄屋	英左衛門	大手囲無御座候
組頭	半三郎宅	表分外囲御座候、上雪隠無御座候
組頭	吟右衛門	表分外囲御座候、上雪隠無御座候
作改	徳右衛門	表分外囲御座候
百姓	虎蔵	外囲并上雪隠無御座候
百姓	七郎右衛門	外囲并上雪隠無御座候
百姓	金五郎	表分外囲并上雪隠無御座候
百姓	利左衛門	表分外囲御座候、上雪隠無御座候
五人組	長助	表分外囲御座候
百姓	太兵衛	表分外囲御座候
五人組	七右衛門	表分外囲御座候、上雪隠無御座候
百姓	才右衛門	表分外囲御座候、上雪隠無御座候
五人組	半右衛門	表分外囲御座候
百姓	清五郎	外囲上雪隠無御座候

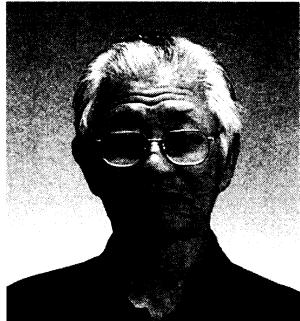
研究・調査報告

小才角二神家の古文書より

理事 二神 政幸

はじめに

小才角二神家は、初代九良衛門に始まり、現代の昭義氏で13代となる。その中でも7代熊蔵の頃は最も繁栄した時代である。身分は本家が郷士職、長く続いた庄屋（頭集・鉢土・平山）は別家に譲り、小才角浦庄屋を妻シマの実家である川内佐平次より譲受して三男の三蔵に継承させている。（詳しくは、「海の民ふたがみ」第6号）



筆 者

熊蔵は小才角二神家の中興の祖であると言
われるように数多くの資料によって実証されている。しかし、熊蔵がど
のようにして財を成したかは、その筋の資料が全く無いので分からない。

1枚の古文書による発見

小才角二神家のルーツを探ることが私たちの最大の課題であった。
日本の国の中でも、最も不便なへき辺の小さな漁村に居住し始めた九
良衛門は、どこから来たのか。「二神家繁書」には「予州より来る」と
あるが、どうしてもその手がかりがつかめなかった。ところがこの
度（平成18年2月）、資料を整理する中で1枚の古文書によってそれ
が発見された。

その古文書には、本家として「風早郡柳原村二神牛之輔」が記され、
別家として「城辺村二神十郎左衛門」の名が記されている。（二神島
の総会で報告）



古文書 (1)

さて、この度は熊蔵の1つの側面を古文書を通して紹介してみよう。
熊蔵についてまとめておくと、

- 出生、明和2年（1765） 死亡、弘化2年（1845） 81歳
- 絵写真～熊蔵75歳の時
- 母長寿の祝い・文政10年（1827）
 母88歳、熊蔵63歳 母93歳で死亡（1832）
- 熊蔵「連歌」を愛し、全国（西日本）の多くの同好者と交流する
- 本名は熊蔵だが、通常は「久万蔵」の名を使う

残された短冊「連歌」

熊蔵が残した多くの古文書の中で最も多いのがきれいな短冊に書かれた「連歌」である。中でも母の長寿の祝い歌である。数にして100枚にのぼる。短冊「連歌」には作者の号が、祝い文や漢詩には氏名や落款が住所の記入されたものもある。

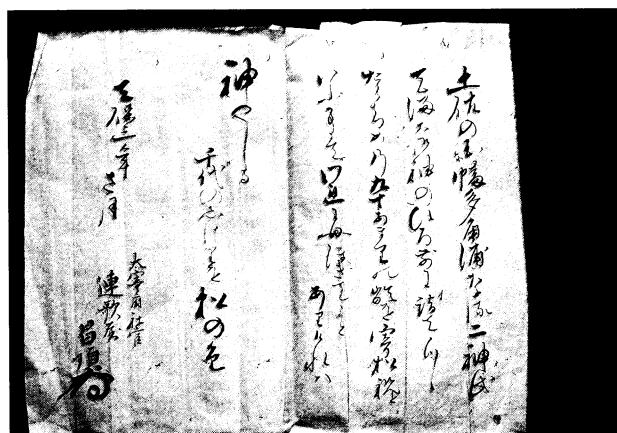
「連歌」「連歌師」を日本語辞典で調べてみた。

連歌は、短歌形式から派生した日本独特な文芸。平安時代から室町時代に流行し、江戸時代に俳諧に引き継がれた。短歌の五七五の上の句（長句）と七七の下の句（短句）とを交互に数人が詠みあうもの。

二句で完了する。一句連歌（短連歌）と長句（発句）、短句（脇）、長句（第三）と順次詠み連ねる鎖連歌（長連歌）とがある。百句連ねる百韻が基本。ほかに五十韻、歌仙（三十六句）などもある。

連歌師は、連歌の専門作者、連歌の宗匠（連歌に巧みな人）

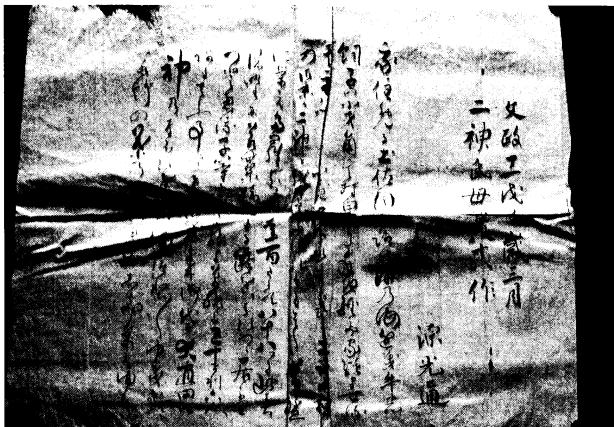
百数枚の短冊（連歌）の中には、京都・大坂・福岡・熊本・松山・高知などの地名の記されたものもある。「連歌屋」というのは、連歌の中継ぎをする事務局のような役目をするところだと思う。



連歌 (1)



連歌 (2)



古文書 (2)



古文書 (3)

小才角二神家に残されてきた古文書には、母の長寿を祝った連歌祝いの品物の目録や書状、当家が準備した屏風や襖などが180年も経て現存していることは、8代禮蔵、9代克平など後世の人たちが二神家の繁栄の印しとして大切に保存してきたからであろう。

おわりに

なお、過日、宿毛歴史館の学芸員の方と会う機会があったのでいろいろ聞いてみた。

「江戸時代の後期から明治にかけての伊与（伊予）と土佐の交流は想像以上である。現在の国道は昭和4年に開通したもので、それまでは旧街道松屋峠が利用された。江戸時代には番所が置かれ、毎日200人から300人の人々が通過していた。峠越えは馬以外に荷物を運ぶ手段がなかったので、宿毛湾はもとより大月町の浦々にも九州や瀬戸内海方面への海路が物資を輸送する主役であった。」と力説された。特に伊与から土佐への流入が多かったと付け加えた。

連歌という風流を好み、各地の同好者と交流を重ねる中で一方では郷士としての職責を果たし、村では庄屋として一族を束ねてきた熊蔵の存在は実に素晴らしいものがある。

役員のつぶやき☆☆☆

二神島の人々と二神氏

会長 二神 浩三

2006年4月23日は、二神系譜研究会の総会が、二神氏先祖の地二神島で初めて行われた日である。北は札幌から西は長崎からと沢山の二神氏が、ご先祖の地を見ようと二神島に集まってきた。また、二神氏のご先祖である「豊田氏の郷 豊田町」からも、吉本前町長と白石区長さんが見えられた。その昔、豊田氏が、豊田郷から二神島へと移り住んだ証を確かめたい気持ちからであろう。それだけに、安養寺に遺された文書類に寄せる期待が大きかったものと思われる。

総会の日の朝、準備万端整えて待っていた安養寺宝物の拝観に赴いた。(安養寺は、松山の石手寺の末寺であり、石手寺は当初安養寺と呼んでいた。現在は、二神島の安養寺は無住職の寺で、道後石手寺の隣にある地蔵院という寺の住職水崎さんが兼務し、仏事の時のみ二神島の安養寺に通っている。) 1ヵ月も前から安養寺のご住職水崎さんにお願いし、安養寺宝物拝観スケジュール表をお渡ししていた。水崎住職はこのところ、体調不良のため「二神島のことは次男に任せてくれるから」とのことでのことで、その次男のかたにご連絡いただき、ご了解を貰っていた。総会の2日前にそのご次男のご住職から電話をいただき、「自分は都合で島に行けないが、二神島の寺総代に話しておいたから、見せてもらってください」とのことであった。それとは別に、寺総代さんに電話をしたが、何時も留守で、応答がない。そこで葉書で見学の日時と目的などを記して、お願いをしておいた。

23日朝、二神島出身の会員と共に、寺総代さんにお会いし、「宜しくお願いします」と頭を下げて返事を待った。所が、予期に反した強ばった面持ちで、「わしら、檀家の者でさえ見せてもらったこともな

い涅槃（ねはん）掛け図など、二神さんだろうと何だろうと、余所から来た人に見せるわけにはゆかない。住職が何と言おうと島の檀家の者も見せてもらつてないものを見せることはできない。」の一点張りである。（後に、水崎住職にお会いする機会があり、お尋ねしたところ、「そんなことはない。たまたまその人が見てなかつただけのことでしょう」とのことでした。）二神氏と二神島の歴史的な関係を、その場で説明できるような雰囲気でもなかつたので、寺総代の言葉に従うしかなかつた。

豊田町の皆様が、地域を挙げて豊田氏を慕っておられるのを見るにつけても、不甲斐なさを痛感するとともに、準備万端整つていなかつたことに気が付いた。即ち、我々二神系譜研究会は島の人々に対して、何を還元してきたであろうか。今ままでは、島の人々にとって、我々は全くの余所者としか映っていない。何年かに一度訪れてきたにせよ、それはあくまで行きずりの訪問者に過ぎず、島人に歓迎されるべきお客様ではない。

我々が、二神島に上陸して、海岸で、のどかに「ひじき」や「てんぐさ」を干しながら、井戸端会議に余念のないご婦人層に遭遇し、人懐っこい語りぐさに心安まるものを感ずるのも、この島の特徴の1つである。しかし、一方では、港の連絡船の待合所として造られた立派な「海の駅」が、船の着く僅かの間しか開かれず、殆ど鍵の掛かった状態にあり、「余所者が来て汚すからだ」と云うのが理由である。私が、この海の駅が出来てから一度だけ二神島へ夜釣りに行ったことがある。その時、夜遅くまで、海の駅で騒いでいたのは、島の人達であり、決して余所者ではなかつた。島の人口は、現在198名、戸数は114戸である（※平成18年7月末）。島の人々にとって、余所者は一見ただけで見分けが付く筈で、島の人を余所者と見間違うことはあり得ない。昔の人々は、島を守るため、他を寄せ付けず、島に閉じ籠もつた生活をしていたのかもしれないが、今も尚、そうした習性が残つているようと思える。

神奈川大学の日本常民文化研究所を中心とした「二神島調査団」の方々は、二神司朗家に眠っていた沢山の古文書の調査、二神家の墓地調査、二神島の家屋の調査など、多くの調査を島に長期滞在しながら続けてこられた。当然、島の人々の協力なしでは実行しがたい活動である。日本常民文化研究所の方々は、島の人々に対して、何度もなく、中間発表をして研究成果を島人に還元してこられた。

我々、二神系譜研究会も日本常民文化研究所の先駆に学ぶべきものがあるように思える。島の人口も年々減少し、高齢化が進む中で、何をどのように還元できるだろうか。島の住民を交えたイベントを考え、島の繁栄に些かなりとも貢献できれば幸いと感ずる昨今である。



二神島の二神家墓地と筆者

健 康 雜 感

副会長 二神 俊一

還暦も過ぎ、同級生との集まりでも糖尿病などの生活習慣病の話題が多くなり、これから健康管理に気を付けようと思っていたところ、娘から「プールへ泳ぎに行こう」と某スポーツクラブのチラシをみながら誘われた。Fクラブが入会募集の販売促進のキャンペーン期間中で僅か千円で1週間利用可能とのこと。元々この手のスポーツクラブは私にとっては別世界の無縁のものと勝手に思いこんでいたが、まあ、「駄目もと」と重い腰をあげてワイフと娘と三人で行ってみた。自宅から車で3、4分の距離で平日は23時30分まで開館しているなど夜間の利用者としても大変便利である。もちろん設備は完備し、明るく清潔感あり自分のペースで健康チェックも出来る。

仕事を終え、夕食後一休みしてから水泳着など抱え行ってみた。21時半頃でも大勢の若者から中高年の人人がマシンやエアロビクスで汗を流している光景に圧倒された。

測定後、ストレッチ運動したのちインストラクターから機器の使用方法など教わり早速トライしてみた。

私は泳ぎが好きなので後でプールで泳いで最後に風呂へ入りリラックスできた。

兎に角一週間通ってみることにした。一月末の寒い頃だったが「これはいける」と判断し、早速正式申込をし、2月から通い始め早くも半年経った。おかげで体調は良く食事も美味しい。ストレス解消にもってこいである。

25メートルプールでは歩き専用レーンでずっと歩いている人もいるかと思えば長距離用レーンで遠泳している人など様々で自分の体力にあったやり方が出来るのがいい。

こんな話をある時職場で話したら、早速同僚が行き始め毎晩通って

いるとか、その人は毎晩晩酌をしていたけれど晩酌を止めてプールで約一時間歩きをしていて、肥満解消に役立ち、奥様から晩酌を止めて感謝されているとのダブル効果を強調されていた。

要は如何に継続していくかが今後の課題である。

(平成18年7月30日記す)



夫婦揃って自転車コギ



ストレッチ運動

テレビ討論「日本のこれから」を見て思うこと

理事 二神 久蔵

私は混血児？

昨年10月に、4年来痛みに耐えかねている左足親指を診てもらうため、数件の医者・病院を訪ねたものの、原因不明で痛み止めと湿布薬しか貰えません。最後に、顔見知りであった医大のT整形外科教授を訪ねました。その日は、挨拶を交わしMR Iを予約するだけでした。約束の診察日の診断で「二神さん、日本人には珍しい病気です。1ヶ月くらい様子を見ましょう。ブロック剤を注入して、何日間持つか、次回の診察日に報告を」と言うので「2日しか痛みが止まらない」と報告すると、「では、掃除をしましょう。ただし、ほかにも手術を待っていらっしゃる方がいますので数ヶ月かかります。時が来れば電話をいたします」とのことでの、5月に19日間入院。今まで5日程度の入院は2回ありましたが、何年ぶりかで読書三昧に浸り、杖を突き、足を引きずりながらのリハビリ。痛さに、この暑さに悲鳴の毎日です。

そこへ「海の民ふたがみ」への原稿依頼が届きました。日本人には珍しい病気だと診断されたことを気にも懸けていませんでしたが、次の診察日が9月初旬でしたので、原稿締め切りまで、どこの国で多い病気なのかと思いました。その間、真夏の夜の夢を見て、その夢を原稿に書けないものかと。

「ご先祖様は海賊なので、唐天竺の美女かそれともエキゾチックなトルファンあたりの美女の血が入っているのかなあー」と、がに股の短足男が空想に浸っているときに、高校野球で今治西はベスト4まで行けずに敗れ、次の日は終戦記念日で靖国神社へ小泉首相が参拝するしないでメディアは大騒ぎ。当日の夜、NHKのテレビ番組「日本の、これから」を見ていると鬱（うつ）に陥りそうで、真夏の夢が吹っ飛んで、鬱のストレス発散をしたくなりました。「海の民ふたがみ」に

ふさわしくありませんが、お許しください。
では、偏見と独断で発散させていただきます。



二神島で釣りを楽しむ筆者

テレビ討論はじまる

人は様々な性癖がある。論理的に思考に長じながら人前に出ると気後れして要領を得ない人も居れば、逆に興奮し言論に冷静さを欠く人もいる。このテレビ討論で元特攻隊の老人は前者で、旧満州引揚者の老婦人は後者であったようだ。

番組は、小泉首相の靖国神社参拝から討論が始まった。アジア侵略のA級戦犯者が祭られているから参拝は良くないと中国・韓国・日本の方々の発言があったが、戦争犯罪人として裁かれて刑を執行されているのに、国際法上罪は償われているとは理解されないのだろうか。私たちが合法的に選んだ、戦後の歴代の日本の代表者が、中国・韓国・その他アジアの国々にお詫びをし賠償金の支払いも申し出て、経済協力も行われている。戦後60年間1発の砲弾も発していない国の代表者が、国のために戦い迷惑をかけた行為を償って処刑された方々

の靈を慰めることがどうして悪いのだろうか。

心の問題で「一般の方々で心ならずも戦場で亡くなられた、A級戦犯の方々も東京裁判を受諾し死刑になり罪を受け入れている。日本は60年平和に暮らしているのに、いまだに特に中国・韓国から責められて困っています。これからは、先の大戦の反省から戦争しません。平和を願っています」と祈り・誓うことは個人であれ首相であれ、誰であっても日本の文化・風習だと思います。私はこのことを、東アジア特に中国・韓国の方々に理解していただけたらと願う者です。そうしなければ前へ進めません。

アジア侵略は日本だけ？

日本だけが東アジアを侵略したと主張する「自称平和主義者の日本人」「中国・韓国」の方々、少しは近代史を知ってほしい。例えば、第二次大戦終結後、イギリス・フランス・オランダなどは、アジアの植民地支配を回復しようとして、再侵略を開始した。いずれも結果は敗退したが、三色旗を誇るフランスは、ベトナムへの再侵略、敗退後も、アルジェリアで独立運動弾圧の凄惨な軍事行動を繰り広げた。フランスのベトナム再侵略戦争を引き継いだアメリカ（但し、アメリカは非共産化が目的で植民地化の意図はなかった。）は、他国に軍隊を投入した。隣の韓国もベトナム戦争に軍隊を投入して戦闘に従事している。

自己主張のみの中国は、その後、ベトナムが共産化しないのはけしからんと、懲罰と称する侵略戦争を仕掛けて、敗退した事実を中国国民は知らされているのだろうか。チベットにも侵入し、宗教にも介入してダライ・ラマを追放している。また、現在の中国の礎を築いた「孫文」を匿い、資金援助までした日本人が居たことも、北京大学生は知っているのだろうか。

韓国と日本のつながりは古く長い。朝鮮半島は中国と国境が接するので、中国や北方民族から実に数百回も侵略に悩まされてきたという。

韓国には「恨五百年」という言葉があり、ひどい仕打ちに対して五百年は恨みを忘れないということらしい。

660年当時、朝鮮半島に、高句麗・新羅・百濟があり、中国の唐が侵入し660年に百濟を、668年に高句麗を滅亡させている。新羅が唐と手を組み、百濟・高句麗を挟み撃ちにしたためだが、その後新羅が676年に半島を統一している。そのとき、百濟王子の願いにより百濟を救おうと天智天皇が数万の援軍を送った事も、10万人の亡命者を受け入れた歴史も、韓国の人々はすっかり失念していらっしゃるようだ。(伊予の国、風早郡から物部薦なる人物が、百濟救援出兵し、帰国後、追大式を授与されているが、二神氏は歴史上現れていたのでしょうか。)

そして、「恨五百年」の対象はひたすら近世・近代の日本の侵略行為に向けられている。100年以上前に、国際上認められている日本海を、「日本海と言うな、あれは植民地政策を進めた恨みの海である」と徹底している。ちなみに、韓国では「東海」と呼ばせている。偏狭なナショナリズムではないか。

一向に癒されない中国・韓国の対日感情を解（ほぐ）すのは、各自が国の政策・政党を代弁するのではなく、本音で自分の考えを述べて、より交流を深めて現在の友好的日本人の全てを知ってもらうしかない。

しかし、テレビ討論を観ていると友好的日本人と、エセ友好的日本人、自称平和主義者の違いを知るべきではないか。日本は、アジアを侵略し、その象徴だから日の丸・君が代を認めないと論争する自称平和主義者がいるが、どうして侵略と日の丸・君が代が結びつくのか不可解である。欧米の国々は、アフリカの黒人を人間として認めず、猿と人間の間の動物として酷使したではないか。

前にも述べたが、東京裁判受諾後もイギリス・フランス・オランダは、アジアの植民地支配を回復しようと再侵略を開始している。フランスはアルジェリア、イギリスは南アフリカの独立運動弾圧に凄惨な軍事行動を長年とっている。

イギリスはアヘンが自国で禁止なので中国へ武力で売り込み、なお

かつ香港島を100年も侵略していた。この行為は、自称平和主義者、エセ友好的日本人から見ると「自由・平等・博愛」の象徴のフランス国旗、イギリスの国旗ユニオンジャックなどは侵略の象徴だから認めないのでしょうね。だが、イギリスでもフランスでもオランダでも、侵略の象徴だから国旗・国歌を変えようという話はない。日本には世界に比類なき不思議な自称平和主義者がいる国ということになる。

日本は確かに東アジアに侵略したが、イギリス・フランス。オランダ・ポルトガルなども東アジアを侵略している。日本は、お詫びも毎回致し、申し出の賠償金もきちんと支払っているのに、なぜいつまでも日本の侵略行為だけが恨みを向けられるのか。どこの国でも戦没者は、その国の文化・風習にもとづいて祀られている。それが靖国神社であるだけだ。A級戦犯も刑罰を受けている、死ねば同じだと思えばいい。靖国神社は國のものではなく法人だ、不愉快な方もいるだろうが、誰をどう祀ろうが神社の自由で、お参りも行きたい人が行けばいい。「昭和天皇が参拝をやめられたではないか」。このメモを今後、自称平和主義者が持ち出すと思うが、今まで「天皇が、天皇が」と批判していた者が、今回は天皇も我々と同意見だと鬼の首をとったつもりで行動されるだろう。天皇ご自身の自由なお気持ちを利用するのは大変失礼である。

日本が、チベット、ダライ・ラマ、台湾を語るだけで、中国は内政干渉をするなという。中国人が中国国内で以上のことを批判すれば公安局に連行だ。また、国家主席批判のデモへでも行けば刑務所行きだ。ところが他国の、「日本的小泉首相批判デモは愛国だ」と公安局は、むしろ奨励している。やることが逆ではないか。ちなみに、自称平和主義者の方はご存知ですか。日本で小泉首相批判デモを行っても、誰も連行しませんよ。

ミサイル等強行発射への制裁

北朝鮮の「テポドン2号」ほかミサイルの相次いでの発射強行に対

する国際社会の制裁、日本の制裁に対してどう思うかの問い合わせに私は、貨客船万景峰号の半年間入港禁止、日本から北朝鮮への送金禁止の経済制裁は正しいと思う。

旧満州からの引揚者の老夫人や何人かの方が、それは厳しい、経済的に苦しい北朝鮮を追い込んでしまう。追い込むと何をするかわからないから、制裁などせずに黙って見ているだけで良いと制裁に反対されたが、その自称平和主義者の方々は、ご自身の子どもが自宅から北朝鮮に拉致され、また、ミサイルが自宅に落下したらどうなさるのかと聞きたい。

これに対して、アメリカの若者が、「ほかの国であればテポドンを発射されたら、船舶の入港禁止では済まぬ、軍事力を行使するだろう。イスラエルは、自國の人間2人が人質にされただけで他国（レバノン）に攻め入り、空から地上から無関係な人を殺し、建物・道路などを破壊し侵略しているのに比べたら、日本の制裁は軽すぎる。」との発言は過激ではあるが正論である。これに比べて、自称平和主義者の制裁は「重い、何もするな」との発言は、日本人として無責任、恥ずかしいと他国から思われはしないか。

以前、小泉首相が自衛隊をイラクへ派遣した時、北海道の若いボランティアと称する平和主義者が現地の情報も調べず、警告を無視して英雄気分で出かけ人質にされた。「自衛隊を引き上げてくれ、そうでないと私は殺される」と泣き叫び、嫌いな小泉さんに私たちの税金を2000万円以上使わせ、忙しい方々の労務も割いた。「自分の主義主張を貫くなら自己責任である」ことが理解できない、身勝手な無責任者としか思えない。

戦争は無くならない

現在、野蛮な行為の侵略戦争（植民地化）は世界の目が厳しいから無いと思うが、戦争（紛争）は無くならないと思います。異なった国益を追求する国家間では何らかの形で紛争が絶えず起きると思うが、

それを成り行きに任せていては国際社会は機能しなくなる。今ある国連軍は、「国際紛争の解決を目的とした巨大な労力、努力の体系」として存在するが、どの国の人々も平和を願っている。しかし、いくら平和を願っても自然と戦争が無くなるわけではない。

戦争を無くす唯一の方法は、「戦争よりも合理的で実効的な国際紛争の解決の手段」を考案することだが（石油等資源エネルギーが良いが利権が絡む）、その手段がない以上当面、「できる限り具体的に戦争勃発を減少させる努力」を国連中心に進め、戦争の可能性に対して十分に備えを固めるしかない。本当に平和を願うなら、戦争の条件・経緯や不幸にして戦争が発生したときの方策をまず研究すべきであろう。だが、自称平和主義者は「平和憲法を守れ、一字たりとも改憲はだめだ」とひたすら憲法の不戦条項を神社仏閣の護符と同様に、ひたすら平和を念じていれば戦争から免れると信じている。平和と安全を守るために軍事研究の必要性を説く政治家、人々を「平和の敵」と騒ぐ。これでは戦前の不幸にして戦争に負けたときはどうなるのかと説く人々を、神国の日本が負ける筈がないと抹殺した論者と同じではないか。あらゆることを想定して、平和と安全を考えるべきだと思う。

おわりに

世界には日々の食料にも事欠く貧しい人々がいる。厳しいとはいえ、贅沢から抜け出せない日本人。貧しさから脱した日本は「モノ」を大切にしなくなり、汗水流すことを嫌い、安直ばかり追い求めてはいいのか。仕事を選り好みして仕事につかないニートと称する若者たちよ、思考せよ。

社会全体が緊張感を欠き、精神的墮落が蔓延するような国が世界の模範となったり、繁栄することは長くは続かないだろう。お盆休みで諸外国からの日本への帰国風景が各空港からテレビに映し出されたが、戦争・内乱・天災により飢えに苦しむ人々が数億人いて、国を追われ、家を追われた難民数百万人が同時に、この地上に生きている。憲法

の不戦条項を護符としてひたすら平和を念じさえすれば、戦争から免れると信じるテレビ討論の自称平和主義者に答えを聞いてみたい。

今、まさに京都で宗教者会議の第8回世界会議（8月26日）が始まった。約100の国・地域から指導者が、地域紛争、貧困、環境問題に宗教がはたす役割などを話し合うとのこと。小泉首相が来賓として出席、国連、紛争当事国のイラン、イラク、イスラエル、パレスチナ、スリランカなどの指導者も加わっている。参加者の自由な発言と安全のため非公開であることが残念であるが、宗教指導者の開祖、釈迦・イエス・マホメットたちは身を切り刻んで行に励み、衆生救済を願った。

どうか、英知をだしあって宗教の対立を乗り越え、衆生に進むべき道を教えてほしい。

初さんの自慢の友「富さん」

理事 二神 亮郎

晩酌を飲んで機嫌のいい時、父・栄（1906～1971）から聞いた話ですが、祖父の初太郎（1862～1934）が若い頃、（高知の）佐川の豪商の息子と知り合いで、夏には1ヶ月近くも家に遊びに来ていたそうです。その人は変わった人で、植物採集が趣味でした。数回、小才角に来たそうですがいつも何日も滞在し、あっちこっちと船を出して採取旅行をしたそうです。「初さん、富さん」と呼び合うくらい仲良くなつて、地域内では「奇人の富さん」というあだ名がついたそうです。

初さんも高知の幡多郡で、自称五指に入ると言われた豪商のセガレ。富さんとは非常にウマが合ったようです。理由はわかりませんが、富さんの実家は破産をして、東京へ出て行きました。数年後、久しぶりの手紙は、東京帝国大学の理科助手になったという連絡でした。変わり者の友の大出世です。「日本植物図鑑」とか「富太郎」の名のある本を大急ぎで買い集めたそうです。

初さんの1つの自慢は「俺の友達が大学の先生になった。志あれば天下は取れる」というのが口癖でした。初さんが厄年（42歳）の時、富さんが、桜の苗木（仙台屋桜？ソメイヨシノ？）を送ってくれました。小才角の家の裏山の段々畠の一番上の8段目の上に、昭和30年頃まで直径60cmはあろうかと思われる大木で見事な花を咲かせていました。元木は大きな空洞がありましたが、枝木は20cmほどで数本ありまし



若かりし頃の富さん
(牧野植物園のホームページより)

た。小才角で一番見事に咲く「さくら花」でした。

初さんのもう1つの自慢は、「富さんの桜と、高知五台山の桜は同じ桜である。」と言っていたそうです。私は、五台山のどの桜なのか？まだ見たことはありませんが、一度見てみたいものです。今、あの8段あった段々畠は荒れ果て、ただの山林と化し、初太郎の自慢の桜も、「ただの山ざくら」となっています。

父・栄は、自分が生まれる前後の話で、しかも、祖父が酒の肴にする話ですから、どこまでが本当だかわからなかったそうですが、「富さんの苗字は、佐川の牧野だ。」と聞いて、初太郎の言っている富さんが「牧野富太郎」であると確信したそうです。

今になってみれば、「牧野富太郎」を知らない人はいないでしょうが、当時は「奇人さん」で、我が家に居候していても、だれも有名人になるとは思わなかつたそうです。学校にも行かず、志一つで自分の生涯を決めた偉大なる奇人を友として持つたことを、初太郎は誇りにしていたそうです。



二神島交流会での1コマ（右端が筆者）

証明はされませんが、むかし、むかしの昔話として、父が祖父から聞いた話を思い出して、あの崩れかかった小才角の屋敷で、古きよき時代に起きたロマンを文にしてみました。

牧野富太郎博士の何らかの資料の中に、「幡多・月灘村（小才角）紀行」などという、若い日の思い出話が書いてあれば幸いですが、そんな博士の記録はないでしょうねえ。

注： 編集部で調べたところ、牧野富太郎さんは、明治17年（1884）から明治26年（1893）にかけて、東京と郷里の佐川をたびたび往復し、土佐では採集と写生に励んでいます。明治26年9月に月給15円で東京帝国大学理科大学助手になっています。

お先気になる港山二神氏

理事 二神 康郎

今年も7月末に松山に帰省し、先祖の墓参りをすませた。我々の菩提寺は、何故か松山市の沖にある興居島（ごごしま）の泊地区にあり、墓は松山市の海水浴場の梅津寺にある。系譜研究会で我々は「港山二神氏」を名乗っている。港山は三津浜と梅津寺の中間にある小高い山で、町名ともなっており三津浜から港を隔てた対面にある。

我々の先祖は今から200年余りの昔、二神本家から分家して豊田姓を名乗った。常任理事の豊田涉さんと小生は先祖を共にしている。しかし、我々は100年余り前に豊田氏から更に分家して二神姓に戻り、二神島を出て港山に居を構えた。その当人を港山二神家の始祖として、私は五代目の嫡男に当たる。

これらのこととは、今から34年前父親が逝去した休暇を利用して、代々伝わる系図を携え二神島に渡り、故二神司郎氏にお会いし、お互い系図を出して見比べた結果わかったことだ。そのとき知り合った豊田涉さんから仕入れた情報を基に書いたのが、昭和59年に出版された「朝日旅の百科シリーズ“瀬戸内海”編」に掲載されている“二神島探訪”だ。

港山二神氏は代々子宝には恵まれていた。しかし、女子が多いうえ、男は養子に出る者や結婚前に逝去する者が多かった。私自身は一人息子だ。そんなことで発足以来1世紀以上も経つというのに港山二神氏には三所帯しかいない。しかも、私の子供は3人とも皆な女子で、このまま行けば当家は断絶する。義理の息子か外孫の誰かが跡を継いでくれることを私は期待している。



二神島探訪（1）



瀬戸内海



二神島探訪（2）



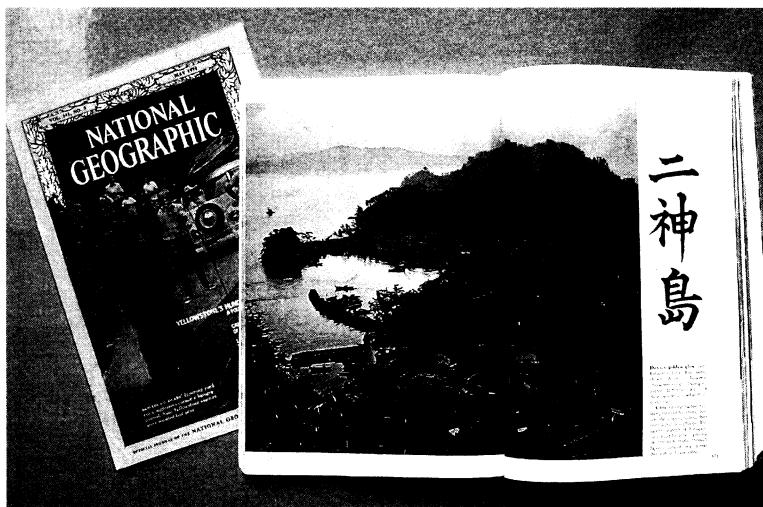
二神島探訪（3）

二神島を想う

理事 二神 重成（城辺二神氏）

ナショナル・ジオグラフィック誌

20年か30年前に、アメリカの地理雑誌を読んでいたら、二神島を取り上げた特集リポートが載っていた。水のきれいな港、落ち着いた街並み、寄り添うように並ぶ民家などが活写されている。海民の生活を見つめようとする思いやりが伺われる好ましいリポートであった。著名な月刊誌「ナショナル・ジオグラフィック」だから、このバックナンバーは必ずあると思う。



ナショナル・ジオグラフィック誌
「二神島」の文字は二神司朗氏筆

二神島の思い出

10年くらい前だったか、豊田町と二神島の交流会があった。その会のあと、城辺町に縁のある者が集まって、豊田町から二神島へ向かっ

た。車で一路東へ走り、瀬戸内海のひなびた港から小さな船で二神島を目指した。1時間足らずで前方に二神島が見えてきた。「私の先祖の誰かも、同じようなコースを通って島に向ったのかも知れない」と勝手に想像して胸を躍らせた。

この旅には、さらに貴重な思い出がある。島に着いてから、二神司郎先生の寓居へ足を速めた。渚を辿る道ばたには、たこつぼが並べられて日に干してあった。ひっそりとしたお住まいに司郎先生は居られた。温容の奥のやさしい眼が、遠来の縁者を迎えて下さった。

神奈川大学日本常民文化研究所と東大史料編纂所

そして、二神系譜研究会の有志が、神奈川大学日本常民文化研究所と東大史料編纂所を訪ねて、二神文書などの史料調査の実態を見せていただいた時のこと。たしか網野善彦先生が段取りをつけて下さったのだと思う。常民文化研究所では、特に二神島調査の特長や問題を詳しくご教示いただいた。

宮本常一先生、網野善彦先生のような歴史学・社会学のいわば改革者が、二神島の海民の生き様に早くから注目したということは本当に嬉しい。

海の民の島・由利島

例えば、神奈川大学日本常民文化研究所も明らかにしたように、明和年間（1764～1774）二神氏は、松山藩と必死の交渉を重ねて、由利島の統治を守り抜いた。当時の海の領主二神新四郎種章を支えたのは、やはり海の民の活力だったのだろう。

この時代、係争について公正な決定を確保し、さらにその確実な執行を促すというのは容易ならざる仕事だった。松山藩のような強い公権力を相手にしたのだから、二神島側にとっては一大事であったに違いない。由利島についてのルポルタージュ（豊田涉氏、「海の民ふたがみ3号」）にも興をそそられる。私も是非由利島を訪れたい。



由利島探訪の1コマ



由 利 島

まもなく年金満額

理事 二神 重則

1944年8月生まれで、2年前から厚生年金の比例部分とやらを使いながら生き長らえています。私たちの歳は62才が満額支給で、何とかたどり着けそうです。

黄昏刻に外へ出てみると、歩いている人が多くなったのに驚かされます。田舎へ行くと、高齢者ばかりが目立ち、都市部でも「なんとかの里」と書いた車イスマークの送迎車も多くなりました。ところで、障害を持つ人の60%以上が高齢者だと言うことをご存じでしょうか。

早期退職し大工さんを目指しましたが病のために断念し、今は自らが障害者と言うこともあります。障害を持つ人の就業支援をするNPOでウロウロしています。そして、この3年間で知り得たことを書いてみようと思いました。

活動の場は「特定非営利活動法人（NPO法人）ぶうしすてむ」です。そこではパソコンを使った障害者の情報と就業の支援をしています。私は自立や社会参加には仕事が近道と考え、就業の手伝いをしています。2年前に10人、昨年は8名のOA研修の受託事業を行いました。それとは別に、会独自の講習や研修・個人レッスンなどを行いました。原因は個人の気質や社会情勢にありますが、受講者にとって一般就労は遠いところにあるようでした。

そこで、一般就労が難しい人に現代の利器パソコンとインターネットを使った、在宅就業のチームとそれを支援するシステムを作ろうと



筆 者

考えました。1年を経過し、全員に賃金を払うには程遠い現状ですが、多くの人や団体の助けを頂き、望みを捨てずに2年目を迎えてます。近い将来には、独自の開発品や、より高度な技術を生かす仕事を行い、雇用できる状態にしたいと考えています。

皆様の障害を持つ人達のイメージは如何でしょうか。「要らない」「可哀想な人」「親が大変」など色々あると思います。ここに、3.5%と言う数字があります。身体障害者（手帳を持っている人）の発生頻度です。身近な例の糖尿病では、目が見えにくくなったり足の切断などがあり、思わぬ3.5%入りをします。また、年間交通事故は90万件を越えています。決して、3.5%は他人ごとではありません。（なお、障害を持つ人では身体の他に知的障害や精神障害があります。）

高齢はもちろんですが、障害を身近な事として地域で助け合える、その様なシステムを作りたいと思っています。

それにしても、最近世の中が殺伐として来たと思いませんか。今も昔も、親は子供の帰りが遅いとオロオロします。きっと父と母は私のことをその様に心配してくれたのでしょう。父母はその祖父母が、そしてその関係はきっとダーウィンまで続いて行くのでしょう。私共は幸いにも連綿と種の字が続く家系図が残っています。心配の親子列を見ていると、お盆が近い事もあり「墓参りに行こう」と思います。

いろいろ変わった？

理事 豊田 渉

島から陸地（久米塙田町）へ上がって今年で10年になった。人生の5分の1になる。陸地に住んではいても、職場は中島であるから、ほぼ毎日、海を渡っている。二神島にいたときも、二神島から中島に通っていたから「船通勤」の形は変わっていない。この7月で船通勤が31年を過ぎた。あっという間だったと、このごろつくづく思うようになった。

「朝早いから大変ですね」とよく言われる

が、正直なところ、自分自身はそう大変だとは思っていない。若い頃から早起きはそう苦痛ではなかったように思う。どうやら、海の民の血をひいているようだから、海を見ずしての生活をさせてくれないのかなと思っている。でも、今はそれで十分に満足している。

私は、昭和47年7月に中島町役場（当時）に勤め始めた。最初は、いつまでもつかなという思いだった。何しろ、船は朝の6時に出航。それに乗り遅れると昼まで船は来ない。それを過ぎれば夕方になって、それで行けばもう帰る時間になる。当時、旅客船が1日2往復。フェリーボートや高速船などは、もちろん走っていない時代。

島の人たちは、「辛抱せにやいかんぞ」「通うのが仕事なんじゃから」「あんたが通うんで、いろいろ助からい」などと、励まされていましたのか、うまくのせられたのか、あれよあれよという間に30年を過ぎた。当時、民間企業は公務員の給料の倍。「なんで役場へ」という人もいた。しかし、今は逆。「公務員はええのう、通うだけで……。」変わったのかな？

通いはじめた頃、二神島に役場職員は私と保育園の先生と小学校の



筆者

事務員だけ。中島の役場に通っていたのは私だけ。2年前まで1人通っていたようだが辞めていた（通うのが大変だったのだろうか？）。その前になると昭和39年ころに遡り、その人は二神道夫さん。二神司朗氏の弟さんで、二神倫一郎理事の父上である。

今回は、船で通っていた頃の話を少し紹介してみよう。その頃、定期船は中島町営汽船。（平成16年10月1日からは中島汽船株）に変わった。）

当時は、船内で船員さんたちは食事をとっており、炊事担当の船員さんがいた。私は、朝が早いものだから時にはカップラーメンを持って船に駆け込み、お湯を分けてもらって食べていた。運がよければ、船員さんのご飯にありつけることもあった。だからというわけでもなかったが、荷物の上げ下ろしや綱とりなどを手伝ったこともある。

ある時、出航時間になっても、船が出ない。操舵室から船長が遠くを見ている。やがて、高校生が駆け込んできた。船長は、高校生を待っていたのだ。この船に乗れなければ完全に遅刻。船の離発着等の権限は船長にあるし、定刻より出るのが遅れた船はスピードアップをして次の港に向かい決められた時間に着くのだから、乗客は何も言わない。その高校生には、船員たちが「もっと早う来いよ。皆に迷惑がかかるぞ。」と言っていた。高校生の遅れ癖はすぐにはおらなかつたが、皆でみまもっていたのだ。強面の海の男たちだったが、内に秘めたやさしさのようなものを垣間見た。

船では、こそこそと隠れて悪さをする高校生たちもいた。もう古い話なので関係する人たちにはご容赦いただきたいが、底部の船室の一隅に2、3人が座れる場所があり、そこで隠れてタバコを吸っていた高校生。そんな狭い場所で吸わなくともいいものを、すぐにはられた。そして、今度は外でこっそりと吸っていた。そこまでやるかと思った。たばこは、船室の座席の下に隠すが、船員は、もう知っているから、船内清掃のときに回収して没収。次の日、高校生は無くなつたのがわかるが何も言わない、いや言えないのだった。そんなたわいもないこ

との繰り返しの船だったが、高校生もそのうち、船でのたばこはやめたようだ。

次は、自動販売機のジュースをこっそりと飲んでいた高校生の話。船にあった飲み物の自動販売機は、今のようなペットボトルや缶ではなくビン入りのコーラやジュースが横に入っていて、お金を入れるとロックがはずれて引き抜くようになっていた。高校生も考えたもので、栓抜きを持っていて横になったビンの栓を抜きカップで受けてただで飲んでいた。しかし、これは中身がなくなってもビンは残る。すぐにばれた。船員にこっぴどく怒られていた光景を今でも思い出す。それでもなかなか懲りない面々だった。

ただ、悪いことばかりでもなかった。二神島の高校生だけを褒めるわけではないが、その当時、船は朝早くに二神島を出て、夕方帰るのは一番最後だった。津和地島を出ると次は二神。本来は、船内清掃で船員が行うことの1つだけれど、最後に降りる二神島の高校生たちが、いつの頃からか客室の枕やタバコ盆を1箇所にきれいに並べて船を降りるのだった。現在、そういう光景をみることはない。変わったのかな。

方言にみる小才角二神氏のことなど

二神 栄三

1 ソラ（天空、上、或いは高所）

平成11年8月6日、二神本家、故司郎先生の告別式のことでした。

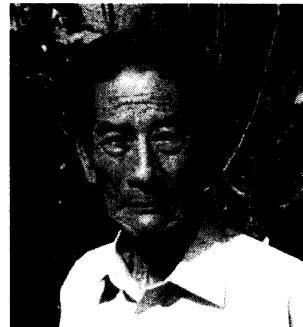
倫一郎さんに「今後、二神本家を誰かが尋ねて、無人の庭に出入りすると、近所の人に不審に思われはしないだろうか。」と聴きましたところ、「いや、その心配はいりません。『ソラ』の春子姉さんに鍵を預けてあるので、借りて開ければ家の中まで入れます。」

誠に行き届いたご配慮と感じ入り乍ら、『ソラ』の春子姉さんと聴いた瞬間、小才角の故重丸夫妻の『ソラ』のおじさん・おばさんのことが、頭の片隅で飛び交っておりました。省三さん（宿毛市在住）の祖父母の事で（小才角11代、政治の弟）本家の西の上に家があり、文字通り『ソラ』でした。

寸分変わらない言葉、小才角まで数百キロの距離、まして昔の不便さを重ね合わせ。頭をひねり回しました。（但し、陸路で考えた場合のことです。）

後日、英臣夫人談で、津島町（現・宇和島市）でも同様の言葉使いのあることを知りましたが、他も探せば、共通した言葉の土地もあるのかと思いながら、現在に至っています。

何故、これ程に、僅かな言葉一つに反応したかは、重則さんの小才角先祖のルーツ探しの一つに【方言】があったからだと思っております。



2 長曾我部検地帳の地名の中にある『タ』について

同帳の田畠に使われている地名（現在の宅地番号は、明治に改正）は、400年後の今もそのまま使われている所が多く、変化の激しい今の代に変わらぬ呼び名は、永く風雪に耐えて来た古木に接する様な安らぎすら覚えます。

疑問に思ってここに取り上げる箇所は、『浜タ。同じ南。同じ北。浜タノ上』などですが、古い書物には濁点、半濁点は見かけません。

その例をあげてみます。

同帳に『大ハン』と在る所は、『大バン』と呼びならわされており、また『タ』とあるのは、『水田』のタではなく、（後述）段、あるいは上にある平らな地の意味であると、私は解釈しております。

小才角本家の西の山側の段々畠で敷地に接した下の段は、明治の初めまで蔵があり、元愛は野菜畠ですが『クランダ』と呼んでおります。この『ダ』から濁点を除いてみれば、よくわかります。

地検帳の筆法をかりて記すると『蔵タ』でしょうか。

この『クランダ』を知っている人も、今は僅かになってきております。

3 時の流れ

目覚しい速さで変遷していく現在の流れからみれば、蚊・蜻蛉どころか、虱にもあたらぬ『小才角二神』の明治初め頃のたたずまいなど、今後20年を待たずに人々の記憶から消え去っていることでしょう。

小才角二神盛時の面影が僅かに残っていた敗戦直後の姿に、伝え聞かされた事柄を加え、明治の初めに近づいてみます。

(A) 現在の石段を上がったところは裏門で、右に馬小屋、その北側は納屋が続いておりました。年配の人は知っていると思います。

- (B) 敷地より少し下がった南の畠は（今の持ち主は別）作業場と納屋の跡
- (C) 石段の下の道路を東へ約20m、四辻の東南の角地は、もと馬小屋（馬小屋は石段上とここで2箇所）
- (D) 正門は、私方の納屋の所に石段があり、上に表門があつたと聞いております。
- (E) 敷地の形は入船邸とも謂れ、同形の敷地は亮郎さん（名古屋市在住）の小才角の家です。

前述の『タ』の項で、『水田のタ』ではないと否定しました。浜とある所から『村の中』と考えられます。

小才角川は夏など日照りが少し続くと、川口より400～500mまで干上がり、それより上流の水田で、水路の使えない部分は丸太を屋根の軒樋のようにして加工して水を通しておりました。大雨の時を除き、川の幅の割には水量は少なかったと思います。

では干害用の池はといいますと、ありませんでした。

4 土地台帳（宅地）

上記について、新旧がいつ頃変わったか、さっぱりわかりませんでした。元大月町長新谷重範氏に伺いましたところ、明治24～25年頃『現行法』に切り換えられ、旧帳は焼却処分されたとのことでした。同氏より旧帳を調べるについて、その方法の示唆を受けていますが、残念ながら、いまだ実現しておりません。

中部・関西支部 7 年の航跡

中部・関西支部理事 二神 宏介

はじめに

二神系譜研究会「海の民」9号テーマ、二神系譜研究会7年の航跡発刊に際し、中部・関西支部の航跡を簡単に報告します。

中部・関西支部は平成12年に発会し今まで4回の中部・関西支部会を開催しています。

第1回 平成12年は発会式と懇親会をサンーストンホテルにて開催しました。

中部・関西支部結成に関しましては、俊一副会長、栄三さんの熱心な会員勧誘で、取り敢えずサンーストンホテルに来て下さい、の一言から、二神さん集まれで中部・関西支部結成となりました。

当日に何人かの人に支部理事を頼み、それが今日の理事であります。



その後

インターネットを開いても、常任理事、重則さんの熱心で情熱あふれる情報文章をみて、栄三さん、他理事は二神さん集まれ、を本格的に取り組みました。とにかく楽しい支部を創る事が目的でした。

楽しくなければ会でない。皆様でワイワイ言いながら楽しみ、又少しは、いい話を聞くことが支部会の目的としました。

第2回

平成13年（大阪江坂）サンーストンホテルにて第2回中部・関西支部総会



を開催しました

浩三会長にお願いし、特別講演（二神氏起源と二神会の調査報告）と懇親会を行ないました。

参加者は前夜祭13名当日16名延べ人数29名と盛大に行なわれました。

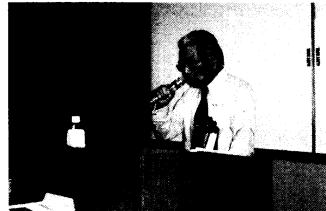
中部・関西支部会も隔年で行なう決議もなされました。

第3回 平成15年

奈良「国際奈良学セミナーハウス」にて開催しました。（国際奈良学セミナーハウスは一般の人は入れない場所）

特別講演は講師に「高島伸先生」にお願いしました。

（香川県多度津町文化財保存特別会員、塩飽水軍専門）「瀬戸内水軍」を中心



に二神氏関連のお話を楽しく詳しく講演して頂きました。

参加者は26名でした。

懇親会は奈良近鉄ビル7階の百楽で東大寺、興福寺、若草山を眺めながらの一時を楽しみました。

第4回

平成17年11月に開催。

奈良ウエル飛火野荘にて於きまして、中部・関西支部総会を開催しました。

特別講演は広島の種昭氏にお願いし「二神氏のルーツを訪ねて」冊子8号の詳細を講演して頂きました。又、御参加の守さんから旧満ソ国境「我が避難の記」の小冊子



を参加者全員に御寄贈して頂きました。

二神系譜研究会にも保存版を頂きました守さんの弟、照夫さん寄稿の『海の民』8号「牡丹江の二神一族顛末記」関連の小冊子です。

ご参加の皆様は北海道、関東、中部、近畿、中国、四国と各地から中部・関西支部会のため、総勢22名と多数御参加いただきました有難く厚くお礼を申し上げます。

11月19日は古都奈良町散策と中部・関西支部会及び懇親会。

11月20日は観光ボランティアガイドの辻本さんの案内で、古都奈良の観光をしていただきましたが、日頃一般の観光客の行かない素晴らしいところを、御案内できたのではないかと思っています。

この件につきましては速報23号で報告されています。



次回は平成19年に開催します。

楽しい会にする為、観光と特別講演と講師も検討していきたいと思います。

中部・関西支部会ではありますが、全国の会員の皆様がご参加されても、楽しめる中部・関西支部会にしたく思っています。今後とも全国、多数の皆様の御参加をお待ちしています。

最後に私の気持ちとして一言

「元気の出る友達を持つ。元気の出る所にいく。元気の出る話を聞く」をモットーに中部・関西支部会の発展に寄与したく思います。

中部・関西支部理事会の主な活動、行事

1：毎年1月に新年互礼会及び年間活動の計画（近畿地区のみ）

- 2：毎年5月又は6月 二神系譜研究会総会出席時の報告会
- 3：9月又は10月、中部・関西支部総会がある場合打合せ、開催準備会及び準備を行なう。
- 4：中部・関西支部会総会と懇親会
- 5：その他、関西地区以外での行事がある場合。
基本的には二神系譜研究会（総会を含む）行事については関西支部理事が代表として誰かが参加し報告会を行なっています。
(理事の主な参加行事、二神系譜研究会総会（松山）、二神島交流会、九州玖珠交流会、高知小才角交流会、山口県豊田町交流会等)

（お詫び）

中部・関西支部会員の皆様には中部・関西支部会報告を郵送すべきですが、予算がありませんので、一部の方にEメール、FAXの連絡のみしています。

俊一副会長からは常任理事会報告を、常に詳しくEメールでご連絡頂いていますが、この件につきましても転送連絡となっています。中部・関西支部会員の方で情報御希望の方は下記のアドレスまでご連絡ください。

中部・関西支部理事 二神宏介

Kosuke-fg1810@almond.ocn.ne.jp

（注）栄三さんは2005年で理事を辞任されたので敬称を略しています

今後とも中部・関西支部会の活動に御支援ご協力をお願いします。

中部・関西支部会
理事 二神 宏介

「ふたがみ」にまつわる話

二神島の昔話 「お市さんあわれ」

編 集 部

釣島と二神島のちょうど真ん中あたりに、こっぽりと、お椀をふせたような島があろうが。その島は小市島（おいちじま）と言うんじや。なんで小市島かというと、昔は船というたら帆掛け舟で風向きをみては、米や木材なんかを積んで、九州から大坂へ行き来しよった。

そういう船に、芳造という船方がおったんよ。この芳造は、途中の港で仲良くなつた小市というおなごを「嫁さんにしちゃるけん。」というて、船に乗せちよつたんと。

ところが、この芳造、家にはちゃんと嫁さんがおるのに、そがいなこというてしもうた。どこぞで小市さんとわかれにやならん。そこで、いきしもどしに見るこの島へ、小市さんをおきざりにすることを思いついたわけよ。

船に酔うたんなら、一休みしようやと芳造に言われ、島に上陸してのんびりしとる間に、おきざりにされてしもうたあわれな小市さん。声を限りに芳造の名を呼んだと。

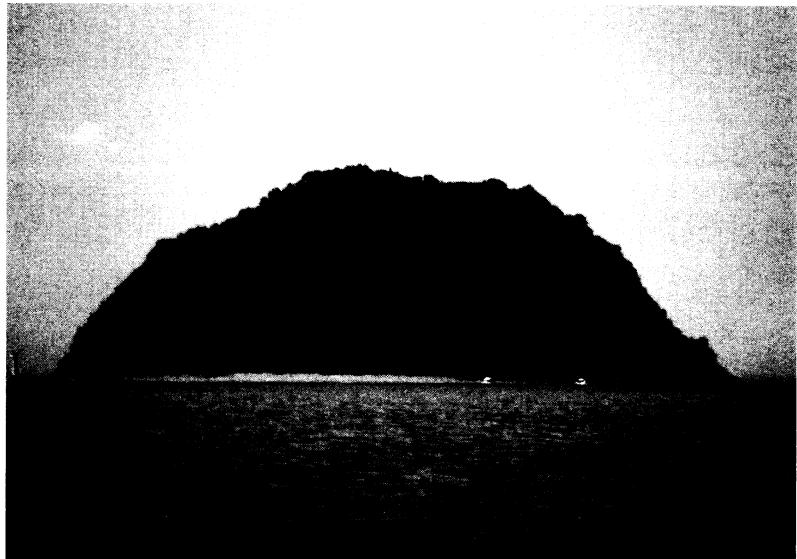
呼べど叫べど、船はもんてきやあせん。そのまま船は小さなって、とうとう見えんようになってしもうた。食べもんはないし、水もろくにない無人島じやけ、小市さんは、自分をだまくらかした芳造を呪い、置き去りにした船を恨みをもって、とうとう狂い死にしてしもうたんと。

それからじや、この島の近くを通る船があると、恨めしそうなおなごの声で、「水をください……。水をくださあい……。」と呼びもって、どこまでも追いかけてくる、船ゆうれいが出るようになったんじや。

船方が、つい、柄杓で水を渡そうとするもんなら、おなごは、「にたあっ」と笑うて、ひきしゃくると、どんどん、どんどん、船の中へ潮水を汲みこむ。船が沈んでしまうまで、いつまでも汲み込むんじゃ。

闇の夜や嵐の夜には、おおかた、船が沈められるようになった。ほじやけん、船ゆうれいが出たときや、柄杓の底を抜いて渡さんといかんのよ。

いつのころじゃろうか。誰か知らんが、この島に小市さんの靈を弔う小さい祠を建ててのう。それから、誰ちゅうことない、この島を小市島（おいちじま）というようになったんと。



小 市 島

二神島の近況

平成18年9月発信
理事 豊田 渉

「フェリーじんわ」就航

平成18年8月1日から中島汽船(株)の西回り（釣島、中島の神浦、怒和島、津和地島、二神島を巡る）の定期船に新しいフェリーが就航しました。

船名は「じんわ」。かつて、二神島、津和地島、怒和島の3島は「神和（じんわ）村」と呼ばれていました。それで、「じんわ」。もう1つは、人の和で「じんわ」。この2つの意味が込められているとか。

総トン数は462トン。全長は約49.53m。幅11m。大型車4台または乗用車18台の搭載能力。定員は310名（1.5時間未満）。乗組員5名。公開速力は14ノット。旅客室にはリクライニングシートと対面式イス席、ソファーを設けています。車両甲板にはバリアフリー旅客室、トイレを設け、体の不自由な方、高齢者の方にも配慮した設計になっています。3階客室には喫煙室を用意しています。車両甲板から2階の客室への階段は幅広くなりました。



島にイノシシ出現？

私の覚えている限り、「二神島にイノシシがいた、見た」という記憶はありません。が、いざ知らず。世の中が進歩しているのか？どうか。島で聞いた話では、「山でイノシシを見た」「足跡があった」とか、最新？情報が、ちらほら。

何年か前に、隣の津和地島に出現。今までこの近辺にイノシシはいなかったはずなのに？。津和地島では、ハンターが島に入り大捕り物が繰り広げられました。その結果、1頭しとめました。何でも、隣の広島県から泳いできたという話でもちきりでした。それがやがて周りの島にもイノシシが出るようになったようです。実際、私も、二神島の海岸に打ち上げられていたイノシシを見たことがあります。

イノシシ。本当なんでしょうか。そうならば、大変。そうでなくとも、高齢者の多い島々。人家近くに現れてこなければいいのですが。

冊子「忽那諸島界隈はええとこぞなもし」が刊行

8月31日発行。356ページ。著者は山野芳幸さん。元中学校の校長先生。旧中島町が合併したこともあります、写真と文でつづった「愛ランドまつやま」へのメッセージ。

本書に登場する島々は、野忽那島・睦月島・中島・怒和島・津和地島・二神島・興居島・釣島・安居島と無人島の由利島などなどを紹介しています。ちょっとしたガイドブックになりそうです。

ご希望のむきは、豊田までご連絡ください。



刊行された冊子

編集後記 その1

今回は「7周年特集」ということでこれまでの活動の歩みを振り返ってみた。

- ① 豊田町へ「豊田氏慰靈五年祭」に浩三さんらと初めて行ったのは確か平成7年で当時は松山にいたのでフェリー経由で乗用車で走って行った。その後は平成12年で勤務の関係で大阪にいたので新幹線で馳せ参じ、JRの



常任理事会の模様

駅で浩三さん、英臣さんらに合流し、末次さんは別府から車で飛ばしてきて壮健ぶりを示してくださいました。

- ② 重則さんが開設した「二神さん集まれ」のホームページは大ヒットで大きな反響があった。長男がインターネットで「二神」で検索していたら出ていたと連絡してくれた。

当時は未だ現役の銀行マンで大阪で単身生活中であった。栄三さんらと関西支部をたちあげたことなどが懐かしい。

- ③ その後副会長として総会・常任理事会・編集会議といろいろ会議に出席しながら皆様との出会いを大切にしながら日々の活動のお世話をさせていただいている。まだまだ未熟ですが宜しくお願ひ致します。

さて、今回も予定より若干遅ればせながら冊子第9号を発行することができて関係者の皆様のご努力に感謝申しあげます。有り難うございました。

平成18年10月10日

二神 俊一

編集後記 その2

2000年3月12日、愛媛県北条市のふるさと館で二神系譜研究会はスタートし、それから7年。準備会から数えるとそれ以上の年数になり、個々の取り組みになればまだまだ遡る。

今回の特集は、系譜研究会発足から7年という区切りの年で編集をさせていただいた。その「航跡」を書き連ねていきながら、「いろんなことをやってきたのだなあー」と今さらのように感じた。これらの広がりは、自分の系譜を調べようという人たちの思いが同時期に重なったこともあるだろうし、抜きん出てインターネットという大きな力があった。「1人の動きよりも大勢の動きによる成果」であり、「思いは力になる」ということにほかならない。最初は、系譜研究会からの動きのみを考えていたが、ついついそれ以前からの動きも重要だと痛感し、今回の欲張りな内容になってしまった。「こんなことまで」とか「あれが抜けている」とか、思いは様々であると思う。決して十分だとは考えたくないし、これでいいのだということではいけない。

何代にも亘って連綿と受け継がれてきた系譜の流れ。まだまだ解明されていないことのほうが多いが、こつこつと地道な作業が今後も必要だと思う。そして、解明されたものをどう受け継ぎ、どう伝えていくかが大事になってくる。今号が、今後の活動の土台となれば幸いである。これから道はまだまだ続くが、休み休みしながらでも、一歩一歩進むことが基本だと改めて思う。

(豊田 渉)



二神系譜研究会会報
「海の民 ふたがみ」 第9号

発行日 2006年11月

~~~~~ 「二神系譜研究会」への連絡先 ~~~~

会長

二神 浩三 〒790-0905 松山市樽味2-5-13  
TEL・FAX (089) 947-2952

副会長

二神 俊一 〒791-0243 松山市平井町3020  
TEL・FAX (089) 975-1650  
メールアドレス futagami-shun1@leo.e-catv.ne.jp

事務局 事務局長

二神 英臣 〒799-2469 松山市光洋台7-34  
(089) 994-2542

広報

二神 重則 〒791-0243 松山市平井町甲2169-43  
(089) 976-5179

インターネット

「二神氏」ホームページ <http://www.dokidoki.ne.jp/home2/futagami/>  
メールアドレス futagami@dokidoki.ne.jp

印刷

平和印刷工業株式会社

〒790-0921 松山市福音寺町728番地  
TEL 089-947-9155(代)・FAX 089-947-9055  
メールアドレス naka@heiwa.co.jp